

# ガンダムビルドデューラーズ

ぬぬっしし

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ただ純粹に、ガンプラを楽しんでいた少年がいた。

かつて少年と同じように、ガンプラを楽しんでいた青年がいた。

兄弟が作り上げたガンプラは、数多もの戦いを通して、進化し続ける。

二人が目指すその高みの先は……

目次

第一話	GPデュエル	1
第二話	掴むための第一歩	27
番外編	To The Vast Virtual World	!!!!!!
第三話	再燃の灯火	59
第四話	真実、そして邂逅	84
第五話	敗者の在り様は	134

## 第一話 GPデュエル

『はいこれ、プレゼントだ』

『これ……ガンプラ？』

『そう、”ガンダムアスタロト”って言うんだ』

『でもいいの？……ガンプラなんて作ったことないし……』

『大丈夫だ、イチから教えてやる。楽しいんだぞ』

『……本当？』

『ああ、一緒に楽しもうぜ——』

——ユウ。

「っ!？」

——夢を見ていた。

「……どんな夢だっけ」

——ガンプラに触れるきっかけとなった時の夢……。

「学校……か」

五時限目の前の予鈴に目を覚まされ、今に至る。

少年の名前はユウ——ウチヤマ・ユウと言った。

「ユウ、何ぼさっとしてんだよ」

寝起きで右目を掻いていると、クラスメイトがユウに話しかけてきた。  
た。

「寝てた、知らない間に」

「おいおい、昨日はちゃんと寝たのか？」

「……寝てない」

やれやれ、といった具合に、クラスメイトは頭をぼりぼりとかいていた。

「受験生だからって、夜寝ないのは体に悪いぞ。無理しすぎないようにな」

気遣いの言葉だろうが、そうではない。ユウはそう思ったが、口にはしなかった。

「……おう、ありがとな」

「……」

学校に向かう時も、休憩中も、下校の時も。ユウの頭の中では一つの物語が動いていた。

彼はそれを自分で、「機動戦士ガンダムアポロン」と呼んでいた。

妄想の作品——自分でも、己の厨二臭さのようなものは自覚していた。むしろ、それが楽しくてやっている。

「……」

帰りの電車の中で、窓を見つめながら思う。

——夕陽だ。

あの太陽のように……熱く激しいガンダム。

あんな風に……。

「ただいま……」

普段どれだけぼーっとしていても。

家に帰ってきてからは、いつだって全力だ。

「……」

ひとつ、またひとつと階段を上る。

——この先に、彼の楽園がある。

右手をそつとドアに触れさせ、

「……」

その扉を開く。

「おかえり、ユウ」

「ただいま、兄ちゃん」

帰ってからの、ユウのたったひとつの嗜み。

「今日は休みだったんだ」

「いや、帰りが早かっただけ。それよりこいつ、ちゃんとサフ乾いてるぞ」

日々の疲れなんて全部吹き飛ばしてくれるほどの娯楽がここにある。

「……ただいま、アポロンガンダム」

ウチヤマ・ユウ。

彼は中学三年生……そして、

ガンプリビルダーである。

「で、そいつのコンセプト、ちゃんと決まったのか？」

ユウの勉強机のすぐ隣には、大きな二段ベッドがある。その二段ベッドの下端に腰掛け、今まさにユウと会話をしているのは、ユウの兄——ウチヤマ・ヒロと言った。

「決まったも何も、作り始めたときからイメージできてたさ。こいつは完全近接特化型ガンダムだ。装備からもわかるだろう？」

ユウは手にしたガンプラを握りしめながら、ヒロに言う。

アポロンガンダム……それが、このガンプラにつけられた名前だった。

しかし、まだ完成はしていない。

「んまあそうだけどき、後半主人公機イメージなんだろう？そういうのってさ、ダブルエックスとかフリーダムとか……やっぱり射撃系の性能が強化されてるイメージがあるじゃないか」

アポロンガンダムは格闘戦前提でありながら、ユウの脳内では「番

組後半の主人公機」という設定付けがなされていた。実際のガンダムシリーズと比べてみると、異例なことである。

「それはいいよ。ガンプラバトルやるなら、俺は近接戦がしたいんだ」「……本当にいいのか？自分で作ったガンプラを、バトルに使って」

ガンプラバトル。「GPデュエル」と言われる筐体を用いた、特殊なゲームだ。実際のガンプラにプラネットコーティングと呼ばれる特殊な加工を施し、フィールド内の、プラネットコーティングされたガンプラを分子単位で形状を維持したまま動作させ、戦わせることができる。

ただし、原理としては僅かに電子レンジのものが応用されており、バトル中のガンプラは熱を持ち、少しでも柔らかかさが増す。実際のガンプラを用いる故に、攻撃されてしまえば柔らかくなった樹脂に食い込み、溶けたり傷が付いたり、または破損したりする。

「……いいよ、そのために作ってるから」

それでも、「自分の作ったガンプラが動く、戦える」ということは、まるで夢のような、誰もが待ち望んだものであり、日本全国いや、世界各国の夢を持つガンプラビルダー達が、このGPデュエルを楽しんでいた。

世は彼らのことを、デューラーと呼ぶ。

ユウはまさにそのデューラーへの第一歩を踏み出そうとしていた。「そっか……んじや、完成したら全部教えてやるよ。ガンプラバトルってもんをな」

「ああ、頼むよー！」

目を輝かせるユウを、ヒロは嬉しそうに見つめていた。

しかしその瞳の中には、どこか不安が潜んでいるようでもあった。

「ん……」

二段ベッドの上段からは、ユウの寝息が聞こえてくる。

時計の針は夜の1時を示す。そんな中ヒロは一人目を見開き、サーフェイスで灰色に染まったアポロンを眺めていた。

「……」

ヒロには不安があった。

GPデュエルを始めることで、ユウは後悔しないだろうか。

——かつての自分のように。

「……」

あのガンプラは、ユウが長い時間をかけて作ったもの。それを傷つけながら戦うことがどんなことなのかを知ってしまったと、後悔するかもしれない。ガンプラバトルなんて最初からやらなければよかったと。それでもユウはやるのだろうか。

……ガンプラに、ガンプラバトルに誘ってしまった自分は、間違っていたのだろうか。

そうして少しずつ、ヒロの心の中でモヤモヤとしたものが広がっていったのだった。

後日。

自転車で約10分のところに、ひとつの模型店がある。

「プライム オーツカ」と大きく書かれた看板が目を惹く。

「いらつしや——ああヒロくんじゃないか。久々だな、こうして来てくれるのは」

「ご無沙汰してます、店長」

店に入るや否や、店長のオオツカがヒロを出迎えた。

メガネをかけ、ぼさぼさと髪を生やしている、40代くらいといった印象の男だ。

挨拶を交わしてから、オオツカはふと目線をヒロの隣へとやった。

「……弟さんかい？」

「はい、ガンプラバトルを始めたいみたいですから」

はじめましてとユウが言うのと、そうかそうかと笑いながら、背をゆうに越える高さまで積み重ねられたプラモデルを横目に、オオツカは二人を店の奥へと案内した。

この辺りではよく人が来る店で、GPデュエルの筐体も置いてある



……ということとは、ヒロから聞いていたユウだったが、来てみると確かに人が多い。実際にガンプラバトルをしている様子も見られた。

新規のデューラー向けに、この店では練習用の貸し出しガンプラがある。アポロンの完成前に、それを使ってGPデュエルに慣れてもらうというのだ。

「えっと、ユウくんって言ったっけ。とりあえずこのストライクを使うといいよ」

「ありがとうございます」

「操縦とかはお兄さんに教えてもらって……まあこれ、素組みだから、壊す気で行きな」

そう告げると、オオツカは店番へと戻っていった。

手渡されたのは、HGのストライクガンダム。しかしストライカーパックは渡されなかった。

ふと、ヒロはユウの目を見つめる。背の高さは兄弟であまり変わらない。己の弟の成長の速さに少しにやつきながら、ヒロは歩いた。

後ろにユウもちゃんといっていた。

「これが……GPデュエル……」

店の奥の部屋に、それはあった。

前後にディスプレイが配置された、ドーム状の筐体。ユウの想像していたよりも遥かに大きく、そのバトルフィールドは広がっていた。

「どうだ、凄いだろ」

ユウは息を飲みつつ、頷く。

筐体自体もいくつかあり、既に何人か人が来ている。どうやら自由に入入りできるようだ。

一番手前側が空いていたから、二人はそこで練習を始めることにした。

「まずはここにストライクを置いて」

ともかく最初は、言われた通りに進めていこう、とユウは思った。

奥にある円形の台座にガンプラを置く。それと同時に、目の前にあるディスプレイでは表示が表れた。何がなんだかユウにはわかっていないようだ。

「そしたらここのグリップを握れ。今ここが、お前のコックピットになる」

それより手前には、少し大きなグリップが二つ用意されていた。

右手、左手と順に手を添え、ゆっくりと力を入れる。ひんやりと冷たく重い、金属の感覚があった。

重量から感じる「本物感」。それがユウの心をどんとどんと高ぶらせた。

——俺がこいつを動かせる。

そう思うだけで、胸の鼓動が明らかに速くなっていくのがわかった。

プラネットコーティングが完了したガンプラは、手元で自由に動かせるようになる。

すると、グリップに添えたユウの手を覆うようにヒロが背後から手を伸ばしてきた。

「前に倒すと前進する。さあこうして……」

言われるがまま、グリップを前へ動かす。

するとストライクは独りでに動きだし、台座を離れバトルフィールド内へ入った。

あとは目の前のディスプレイに注目する。

そこには円筒形の物体があり、ディスプレイの中央で赤く囲われていた。

「あれは……?」

ユウが聞くと、ヒロが話し始める。

「ガンプラの改造パーツの、プロペラントタンクだ。攻撃はしてこないが、こちらへ向かってきたり、攻撃を避けたりするようプログラムされてる。サンドバッグみたいなものだと思って」

……ともかく、目の前のあれを狙えばいい。そういうことなのはわかった。

「さつき軽く説明した通りだ。グリップを軽く倒して前進、サイドで武装選択。こいつは今、ライフルとナイフとバルカンしか使えない」  
「……とにかく、今ある武装であれをやったらいいでしょ？」

「そうだ、まずはあの辺りを……ってユウ!？」

まだ説明が残っているぞ、と言わんばかりの顔をするヒロを横目に、ユウのストライクガンダムは移動を始める。もっと詳しい説明をされるより、感覚で覚えていく方がいいだろう。そう判断した上での行動だった。

ある程度動かして操作の仕方を把握すると、行動を開始する。

こちらから相手へ向かうと、相手もこちらへ向かってくる。さつき言ってたように、そうプログラムされているらしい。右へ左へとスラストを吹かし機動させ、相手を攪乱させようと試みる。

「近いな……」

想定していたよりも距離が縮まってしまった。ライフルでどうかできそうにない。

頭部バルカンで牽制しつつ、ライフルを投げ捨てる。引き続き左右の動きをしばらく続けたまま、対象との間隔がほぼゼロ距離となった。

「避ける!!」

とヒロが言うより先に、ストライクがハイジャンプをした。一度足を踏み込んでから、スラスト一斉点火の合わせ技だ。

空高く大きく飛び上がったかと思えば、先程と反対側に着地。そのまま首から腰の位置を変え、飛び上がった瞬間にサイドサイドアーマーから取り出していたナイフ”アーマーシユナイダー”を構えながら、瞬間的に大きく腰を捻る。

対象が焦点をこちらへと合わせてきたのと同時に、振動を始めたナイフが、円筒形の対象を貫いた。

熱で赤みを帯びた断面が見える。真つ二つだ。

「……どうかな」

返事を待つも、ヒロは啞然としていた。

——本当に初心者なのか？

そう疑問に思えてしまうほどの、戦いぶりだった。

「ちよ、ちよっと待ってろ」

何かを考えたかのように、部屋から走り去るヒロ。

サンドバッグなんて、甘ったるい練習をさせてられる相手じゃない。ユウには素質があるかもしれない。そんな可能性を、ヒロは僅かに抱いていた。

「店長！ルージュ貸して!!」

「ええっ、もしかしてあの子とやろうっての？」

ヒロは静かに頷いた。

練習させるなら、実際にガン普拉バトルさせるのが一番なのだ。

するとオオツカもどこか楽しそうに、ヒロについていった。

「お待たせユウ」

「おかえり……って、店長さんまで……」

帰ってきた兄の背後に、さつきストライクを貸してくれたあの店長がついてきていたことに、少しだけユウは驚いた。

「それだけ、君に期待してるってことだ。お兄さんと一戦してやってくれ」

オオツカがそう言うと、バトルフィールドを挟んでユウの反対側に、ヒロが現れた。

「に、兄ちゃんと戦うの……？」

「ああ、久々に腕がなる……。ユウ、お前は他の初心者と比べ物にならないくらいに初期ステータスみたいなものが高い。それも桁違いだから戦ってくれ」

そう言うとヒロは、台座にガン普拉をセットした。

フィールド内には、二つのストライクが並んでいた。

白のストライクと、赤のストライク。

ユウの、初めての対人戦だ。

「あんな動き見せられたら遠慮はできねえ。久々過ぎて腕は落ちてるかもしれないけど……出来るだけ手加減ナシでいくぞ、ユウ」

手始めに少し大きくジャンプをし、腕を慣らす。久々のガン普拉バトルだったが、まだ感覚が残っていたことが、ヒロにとっては少し嬉

しかった。

「望むところだよ、こっちこそ手加減ナシだ」

少しにやりと笑うユウ。互いに準備は万全だ。

「俺もお前も同じで、武装はバルカンとライフル、ナイフだけだ。シールドで攻撃を受け止めるもよし、逃げるもよし。ともかく行くぞ」

「ああ……」

二人同じタイミングで、グリップを前へ倒す。

ヒロはゆっくりと、ユウは勢いよく動かした。

必然的に、加速力は一時的にユウのストライクの方が高くなる。

先に接近する方が、先制攻撃を仕掛けられる。そうユウは思っていたが――

「何っ!?!」

今触れる、といったところで、目の前にルージュはいなかった。

もとい、ストライクの頭上へ移動していた。

「甘いな!」

構えていたライフルの光線が、ストライクの左肩を貫く。

ボールジョイントの基部から、腕一本が紅く溶け落ちた。

これが……ガンプラバトル。

「……ははっ、負けてられないな」

しかしそれと同時に、ユウの心に火がついた。

勢いよく方向転換した上で、再度グリップを前へ倒す。バルカンで牽制しながら、再びルージュへと接近する。

相手の行動を構わず接近してくるストライクへ、銃口を構えるルージュ。それでも気にせず、ストライクは近づいていく。

ストライクがライフルを構えた。構えながら距離を縮めていく。

向かい合う銃口と銃口。どちらが射撃するのといった状況で、先にルージュがトリガーへ指をかけた。

放たれる光線がストライクへ当たる。勝った、ヒロは確信した。

――が。

「何だと……!?!」

光線が直撃し爆散したのは、ルージュが射撃した直後に、ストライ

クの右手から離されたライフルだった。

「しまったー！」

少しでも油断してしまったヒロのルージユは、気づかぬ内にストライクが取り出していたアーマーシユナイダーに、頭から縦に真つ二つにされてしまった。

ほんの一瞬の出来事だった。

「勝負はついた……かな」

ヒロだけでなく、オオツカも、啞然としていた。

「壊す気で行きなとは言ったけど、また派手にかち割ってくれたなあ……。ジャンクパーツ行きにすらなるかどうか」

「す、すみません……」

いいんだいいんだ、と笑うオオツカ。もともとが貸しガンプラで、壊されればジャンクパーツ行きになる、というのがいつものお決まりらしい。

「しつかし……期待の……どころか、大期待の新星デューラーだね、ユウくん」

「本当です……正直度肝を抜かれました」

そんな大袈裟な……と少しユウは思うが、確かにそれはガンプラバトル初経験の人間の腕ではなかった。

所謂センスというやつだろう。

ユウは自分の現段階での腕を把握できた。また、積極的に前へ出ていく戦法が得意なこともわかった。

ヒロはそんな自分の弟に、微かな希望を抱いていた。

「はみ出しは？」

ヒロが横から聞いてくる。

「ないよ」

ユウは淡々と、机の上で作業を進める。

——マスキングテープを剥がしているのだ。

ひとつ、またひとつと、慎重にピンセットを滑らせる。

赤と白のラインがくつきりと浮かび上がっていくと、ユウの中で達成感が生まれていった。

そしてそれは、ヒロも同じだった。

「ほんとに綺麗に塗装できた。発色もいい」

「初スプレー塗装にしちゃあ、なかなかいい出来なんじゃないか？」

初めてのプラ板加工、初めての表面処理、初めてのスプレー塗装……。このガンプラには、ユウの初めてが詰まっている。

塗装面が露になったパーツを、一通り組み上げる。

股間軸に脚を、腰に胴体を、胴体に肩を。

そうして形になっていくほど、心が踊り出す。

「さて、最後だ」

後ハメ加工というものに慣れていなかったユウは、うっかり塗装前にフェイスパーツを頭部に閉じ込めてしまっていた。つまり、ヘルメットを塗装している間、フェイス部分だけマスキングしてあったのだ。

これを剥がせば、こいつの顔が現れる。

「顔で、ガンプラ全体のイメージが決まる。——こいつの命だ」

もし、マスキングをぐぐり抜け、フェイス部分にも塗装がされてしまっていたら……。逆に剥がれていたとしたら……。もしかしたら心が折れていたかもしれない。

慎重にマスキングテープを剥がし、何も異常がないことを確認したユウとヒロは、同時にほっと、息を吐いた。

背中にバックパックを、そして……。頭部を乗せると、

「完成だ……!!」

この世に、アポロンガンダムが誕生した瞬間である。

バックパックは小型のものを、リアアーマーに可動式のビームサーベルラックを装着し、膝裏には蹴り用ビーム発振器、かかとは展開できる刃が用意されている。

胴体はケルデイルガンダムをベースに、中央をプラ板でスクラッチしている。ブルーのクリアパーツもばっちりキマった。

白と赤を基調としつつ、頭頂部センサーにはオレンジを配色している。

胸が少し小さく、ヒールを履いたようなかかどが上がった足の形状、膨らみを持ちつつ、足首へ向かって細くなっていく脚に太もも。その全てが、「力強さ」「細マッチョ」さを演出している。

……と、ユウは心の中で思った。ここまで全て約2秒のことだ。「サフの時点でかなりキテたけど……色がつくだけでまたうんとかっこよくなるな……。最高じゃないか、ユウ」

「ああほんとだ……兄ちゃんがパーツ配分考えてくれたおかげだよ」「何を言うか、最終的に完成までさせたのはユウだろう?」

褒めと謙遜のし合い。それほどまでに、二人で力を込めて作られたガンプラだった。

「じゃあ俺達二人のガンプラだ。俺と兄ちゃんの二人がいたからこそできた、最強のガンプラだよ」

「……ははっ、そうだな。最強のガンプラ、な」

誇らしげに言うユウを見て、少し照れるヒロ。ヒロ自身はあくまで、ユウの手伝いをしただけのつもりだったから、ああも胸を張って言ってくれるのは嬉しかったのだ。

ガンプラバトルとユウの、運命の日は近い。

何日か経った。

今日はいよいよ、アポロンの初ガンプラバトルだ。

「……楽しみか?」

ふと、ヒロがユウに問う

「もちろん」

本当はワクワクで今にも声を出したくて仕方なかったユウだが、なんとか大声を出さずに答えた。

ガンプラバトルを始めることになると、専用のカードキーがもらえる。それがどうにもユウの中で“デューラー感”を引き立てていくもので、ずっと手に握りしめたり、太陽にかざしたりしていた。



「今なら、やめることもできるんだぞ」

「えっ」

思わずヒロの口から、そんな言葉が飛び出す。

突然の言葉に、ユウは少し戸惑った。

「…………、ごめんごめん、今は気にしないでくれ」

ヒロはまだ少し怖かった。

自分がガン普拉バトルを最初に始めたときと似ている。心が舞い上がるほどワクワクして、楽しみで楽しみで仕方なかった。

だからこそ、かつての自分とユウを重ねてしまう。

せつかくアポロンガンダムを完成させられたからこそ、自分のように後悔しないだろうか。

そんな不安が――

「んんんんー！大丈夫っ!!」

「…………!」

ヒロの不安は、ユウの言葉にかき消された。

「……大丈夫だよ、後悔しない。やりたいからやるんだ」

自信に満ちた瞳で目を合わせるユウ。

自分を見て不安そうな顔をしていたヒロに、ユウはちゃんと気づいていた。

ヒロがどう思っているか、安心できるように。ユウは声をかける。

そしてそれは自分への戒めでもあった。

――絶対に後悔しない。

「そうか……なら俺が一つ、一番大事なことを教えてやる」

少し悩む素振りを見せてから、ヒロがユウの両肩に手を置き、目を見て話す。

「もしピンチになったときは、『俺はどんな相手にだって勝てる!!!』つてくらいの思い切りをやってみろ。それくらいの吹っ切れがないとガン普拉バトルなんて出来ない。きつと」

何があっても心は負けずにいること。ピンチのときこそ自信を持つこと。自分ができなかつた、きつと大事であろうことを、ユウに伝

えた。

こいつならきつと、この思いを大事にしてくれる。  
この希望に満ちた目を、信じてみたい。  
そう思いながら、ヒロはユウの背中を押した。

前と同じ、大きな看板が目を惹くあの模型店に着いた。  
また、あの場所へ向かう。

あの場所で、戦える。

奥の部屋へ入ると、人がやはり多くいた。  
空いているひとつの筐体のところへ向かい、待機する。

通りすがりの、誰だかわからない人と戦う。それがガンプラバトル  
において、メジャーな戦い方だった。

「あ……」

すると、バトルフィールドを挟んで反対側に、ユウと同一年くらいの  
少年が立った。

マツチング完了——バトル開始だ。

「よろしくな」

声をかけてみるが、俯いたまま返事はなかった。

筐体にカードキーを差し込むと、ディスプレイに自分と対戦相手の  
情報が表示される。

「T o r o , s M o b i l e S u i t

G u n d a m F e t e

V S .

Y u , s M o b i l e S u i t

A p o l l o n G u n d a m

相手はトロくんと言うらしい。

対戦戦績は……23戦中、22勝0敗1分。

「嘘だろ……」

その情報を知っただけで、ユウは目の前にいる相手からただものでは  
ないオーラを感じた。

とても同じ年だとは思えない。

「くそっ初心者狩りか……今ならまだ辞退でき——

「やるよ、大丈夫」

ぎよっとした目でユウを見つめるヒロ。

それに対してヒロに見向きもせず、ユウは真剣な眼差しでただ前だけを見つめる。

この前の模擬戦でユウは、自分に実力があることを知った。ほんの少しだけ自信も持てた。

しかし今相手との力量差を見て、そんな自信は揺らぎつつある。

それでもそこに残るわずかな自信が、ユウに前を向かせていたのだ。

それに——

「——ここで勝ったら、最高にかっこいいでしょ?」

ユウにとって、それが一番の原動力だった。

「ね」

「……………!」

決意の表れとして、自信ありげな目をヒロに見せつける。

最高にかっこいいアポロンガンダムの姿を、見せつけてやりたい。

後戻りするなんて選択肢は、ユウにはなかった。

「……ガンダムフェーテ、行きます」

相手のガンプラが、バトルフィールドへ入った。……次は自分の番だ。

「すううっ……………」

今一度、息を整える。準備はできた。

「アポロンガンダム、行きます……………!!」

ヒロが見守る中、手元のグリップを前へ倒し、機体がフィールドに吸い込まれていく。

アポロンの目の前には、対戦相手であるトロのガンプラ「ガンダムフェーテ」がいた。

「あ……かつけえ」

サバーニヤにダブルオー……だけじゃない。

他の機体をもっと混ぜられたミキシングガンプラだ。大型の肩に、複雑なディテールが詰め込まれたポリウームのある脚。それに額のクリアパーツが印象的であった。

配色はベージュシックなトリコロールカラーで、真っ先に主人公機だと連想させられる。

ユウは他人が作ったガンプラを見るのが好きである。故に戦闘前であっても、こうして好奇心のようなものが掻き立てられる。

ユウは戦闘開始前に、ルールを確認しておく。

今回は1機対1機の戦いで、相手から戦う力がある程度奪い、動作が停止した場合勝利となる。

一部機能や設定、戦闘に伴うハンデはTVアニメ等のメディア公式設定を準拠としているものも多くあり、頭部（センサー部）を破壊されると、ディスプレイ表示がロストし、直接目視で奥のバトルフィールドを覗き込みながら操作することになる。

コックピットや動力部、すなわち胴体部を貫かれると、一発K.O.にもなる。

それが、このガンプラバトルでの基本的なルールであった。

「READY?」

目の前のディスプレイに、表示が現れる。

……準備ならとづくにできている。

「BATTLE START」

戦闘開始の合図と共に、ぐっとグリップを倒す。アポロンガンダムはバックパックやリアアーマーのスラスタ一に一斉点火し急速に前進する。模擬戦のストライクの時よりうんと速いのがわかった。

近接戦闘が得意……というより現状近接戦闘しかできないユウは、模擬戦と同じく相手に詰め寄っていく。するとフェーテは肩と脛のスラスタ一を噴射し、左右へ交互の高速移動を始めた。

——模擬戦の時の自分と同じ距離の取り方だ。

アポロンにはビームライフルのような射撃兵装がほとんど用意されていない。つまりは攻撃するなら、全力でこちらから接近するしかないのだ。

右手を腰へ添えると、リアアーマーが可動し手元にビームサーベルが置かれる。勢いよく引き抜いてから再加速し、相手へ接近する。

フェーテがビームライフルで射撃を行ってきた。基本接近と同時に回避しつつ、目の前へ向かってくる光線は前腕のビームシールドを展開し防御している。

——距離を詰めた。今しかない。

引き抜いたサーベルを、加速の勢いのまま腰の捻りを加えながら振るう。刀身は赤く輝きうねったまま相手を切り裂く……はずであったが、

「いつの間につ……!?」

フェーテは剣を振ったのと反対方向へホバー移動し、アポロンは後ろをとられてしまった。

かと思えば、相手のサイドアーマーに接続されたままのビームサーベルが粒子を吐き出し、アポロンの右腕を溶かしていく。

それは一瞬であり、さらに背後からの突然の攻撃であったために、ユウはすぐに状況を判断できなかった。

「何が……起こった……?」

起き上がると同時にすぐさまフェーテはビームサーベルを突き刺そうとしてくる。咄嗟に展開したビームシールドで防御こそしたものの、完全に相手が上手である。

パワーだけではアポロンも負けてはいない。押し返されそうになる腕を必死に押し上げ、相手のもとから離れる。

離れたと同時に相手から射撃が飛んできた。ビームライフルを構えながら近づいてくる。

「うああっ！」

一撃が、バックパックへ直撃した。

状況が良くない。一方的に押されている。

「……機体の状態をチェック」

ディスプレイにアポロンガンダムの状態を表示させる。損傷箇所は多数に及び、バックパックと右腕以下、頭部の一部が欠けていた。機体をよく見てみると、胴体のプラ板から自作したパーツにはヒビが入り、バックパックは砕け、右肩は熱を帯び真っ赤に溶け落ちている。

立てたエッジは削れ、角から徐々に塗装が剥がれていく。丁寧に塗装された赤色がめりめりと剥がれていく様は、初めてのスプレー塗装を終えたユウにとっては酷なものであった。

長い期間をかけ、初めてのことに挑戦し、愛着を持つて完成したガンプラ——それが、こうも簡単に壊れていくものなのだと知ると、精神的に来るものがある。

そうしている内にも相手は距離を詰めてくる。フェーテの右手に構えたサーベルが振るわれようとすると同時に、咄嗟に足が動いた。

——アポロンのかかとは、かかと落とし専用の刃がついている。右足のそれを展開すると同時に、左足の爪先を軸に腰を捻りながらフェーテの右腕を狙う。

……が、

「……!!」

「隠し武器のつもりかもしれないけど……最後まで取っておかないと無駄だよ」

初めてこちらへ向かって口を開いたかと思えば、アポロンの胴体を狙っていたはずのフェーテのサーベルは、アポロンのかかとを突き刺していた。

——やられる……

勝負に負けるよりも、ガンプラが傷ついていく。その事に恐怖があった。

思わずアポロンを退かせてしまう。

「言わんこっちゃない……まだやめられると言ったのに……」

迫るフェーテに対して、反対に背を見せ逃げるアポロン。そんな姿を見たヒロが眩く。

どう考えても、負けが目に見えているも同然なのだ。

ただ怖い。怖いのだ。舐めていたわけではない。それでもこれほどまでに意図も容易くガンプラが傷ついていくのは、ユウにとって恐怖でしかなかった。

頭部アンテナもいつしか欠け、特に脚部の塗装剥げがひどく目立つ。

退いていくと共に足は削れ、粗削りなプラスチックの断面が現れる。

「うわっ!？」

塗装が剥がれていくのに目を奪われていると、地形データとして存在していた岩に足をとられ、躓き、倒れてしまった。

怖い。怖くて仕方がない。

ガンプラバトルなんて始めてしまわなければよかったのだろうか。

「…………え」

——違う。

『…………大丈夫だよ、後悔しない。やりたいからやるんだ』

あの言葉は嘘だったのか…………？

自分は何故ガンプラバトルを始めた？

誰かがアポロンでガンプラバトルをするように強いたのか？

——違う。

「自分の作ったガンプラが動く、戦える」ということは、まるで夢のような、画期的なもの…………。

自分も、ただその思いだった。

まるで夢のような…………。

思い出せ。

この夢は、そう簡単に覚めるようなものじゃない。

覚悟を決めてきたはずだ。

負けちゃいけない、後悔しないとヒロに誓ったから。

それに

『——ここで勝ったら、最高にかっこいいでしょ?』

ゆっくりと機体を起き上がらせる。

『もしピンチになったときは、『俺はどんな相手にだって勝てる!!!』ってくらいの思い切りをやってみろ。それぐらいの吹っ切れがないとガン普拉バトルなんて出来ない。きつと』

そうだ。

こんなときどうすればいいか、もう知ってるじゃないか。

俺は……

「俺は……勝てる……」

消耗なんて気にしてちゃいけない。

”本物”のガンダムを思い浮かべてみればわかる。やられないガンダムなんていない。

やられても前を向く。自分だって最初にそう決めていたはず。

相手より先に、前に出るんだ。

やられて、壊されて……そこから生まれるものもきつとあるはず。

大丈夫だ……このアポロンガンダムとなら……!!

どれだけ傷がついてもまた塗り直して……きつと強くなれるはず。

前に出るんだ……もつと……!!

「……なんだ?」



ユウの決意に合わせたかのように、アポロンのデュアルアイが緑に強く発光する。

「立ち姿から変わった……。ユウ、お前……」

再度グリップへ手を添える。

自分は近接戦闘しかできない。ならば近づくまで。

もつと……………。

バックパックは死んでいるが、リアアーマーのスラスタははまだ生きています。

飛び回るわけではなく、小さなスラスタを点火させつつ足を地面について全力で走るアポロン。

「速いっ……………!?!」

——距離は詰めた……………!

「遅い!!」

残された左手でサーベルを握りしめ、素早く振り上げる。相手もビームシールドを展開し、防がれる形になる。

フェーテがこちらを押し返し、攻撃を跳ね返すも、スラスタを吹かして再度接近しビームサーベルを向ける。

——今度は相手の左腕を奪った。

自分と同じように、ビームの粒子に触れたところから徐々に赤くなり、溶けていくのが見えた。

自分でもなんとなくわかるほど、さっきまでと己の表情がまるで違う。

凝り固まった表情筋がほぐれていくような感覚。

今、最高に楽しいんだ。

思わず口角が上がる。

余計なことは考えずに、手加減もせずに戦うこと。

自分の作ったガンプラで、全力で戦うこと。

それが今できるようになって、ユウは心から楽しいと思えた。

フェーテとアポロンが鏝迫り合いをする。粒子の塊と粒子の塊とがぶつかり合い、火花を散らす。

相手を弾き飛ばすと、ハイジャンプをしてから相手へ向かって急降

下する。

緑に輝くデュアルアイが、一本の閃光の道すじとなって伸びる。勢いよく振りかざしたサーベルは、フェーテに避けられたために地面へと叩きつけられる。その瞬間を狙ってフェーテがビームサーベルを投げた。今度は残っていた左腕が持つていかれた。

それでも容赦はしない。

両腕が無くなってもなお、斬る、避けるの合戦は続く。

フェーテの左手から振るわれるサーベルが、頭部アンテナを直撃する。

——知らない。

関節から塗装が剥がれていく。

——知らない。

その目には、相手への勝利しか見えていないから。

思い切り飛び上がり、左足のかかとの刃をフェーテに食い込ませる。

相手の頭部が吹き飛んだ。

今しかない。

目視での戦闘に切り替えた相手は、少し反応速度が遅くなる。

フェーテの左手に握られたサーベルが、恐ろしいほどの速さでアポロンを狙う。

アポロンの回し蹴りが、フェーテを狙う。

これで勝負が決まる、そう両者が確信した。

「……!?!」

フェーテの左腕は、アポロンの頭部によって遮られ、腹部にアポロンの脚が直撃していた。

「隠し武器を……………」

「膝か……ッ!?!」

フェーテの胴体に接しているアポロンの膝裏から、目映い光が漏れていく。

「最後まで取ってないなんて、誰が言ったんだ……ッ!!」

まるで流れ星のように一瞬の光であった。  
アポロンの左足の膝裏から、強力な光線を放つ。  
ビームの粒子が、フェーテの胴体を貫いた。

炎と共に爆散。勝負がやっと、ついた。

「Battle Ended

Winner

Y u ' s M o b i l e S u i t A p o l l o n G u n

d a m ]

「勝て……たんだ」

長いようで短かった時間の間で、恐怖と興奮を一気に味わったユウは、疲れ果て、その場に崩れ落ちてしまった。

「ユウ!!!お前……」

「兄ちゃん、勝てたよ」

ユウのもとへ慌てて駆けていくヒロだが、思ったよりもけろつとした表情をしていて、ほっとため息をついた。

「俺とアポロン、かつこよかった……?」

「……ああ、最ツツ高にかつこよかったぞ、ユウ」

そう言うと、まだまだ子供なんだと思うような無邪気な笑顔を見せた。

勝負を終えて、対戦相手のトロのところへ向かう。

「最高にアツくなれたよ。ありがとうな」

そう言うと、トロへ手を差し出す。

自分に様々な体験をさせてくれた相手に、感謝したい。ユウの純粋な気持ちであった。

「……1敗目だ」

「え?」

何かを呟いたと思うと、トロは差し出されていたユウの手をぱっと突っぱねた。

「……いつか必ず勝つ」

そう一言残すと、トロはどこかへ行ってしまった。  
鋭い眼光と、紫色の指輪が印象的な少年だった。

「大丈夫なのか？それ」

ユウの手に持つ、ぼろぼろに果てたそれを見てヒロが聞く。

「なあに言ってるのさ、大丈夫に決まってるでしょ」

ヒロは心配そうな目でこちらを見つめるが、ユウは軽く返す。

「自作パーツまでやられてる。ガンプラバトルの機体……ほんとにこれで……」

「瞬着とプラ板とヤスリさえあればなんとかなる!!」

「えっ……」

咄嗟にユウの口から出た言葉が、ヒロを驚かせた。

「あと……代替のパーツがあれば一番だけどね。大丈夫だよ、俺ならこれくらい大丈夫。」

本当に瞬間接着剤とプラ板とヤスリだけでなんとかなる……なんて自信は、ユウにはない。

それでも、そんな心持ちであることが大事なんだと、そう思った。  
きつと俺なら、大丈夫。

ヒロはそんなユウの目を見て、確信した。

こいつなら、本当に後悔しない。あの時の俺の思いだつて叶えてくれる。こいつは……きつと……

「……ポジティブになれたんだな」

「うん……それと……」

「？」

「……兄ちゃんがいれば大丈夫、俺達絶対、最強のデューラーになれるよ」

「……………そうだな！」

きつと、自分とヒロと、アポロンなら大丈夫。

根拠はないが、ユウにはそんな気がしていた。

ぼろぼろになったアポロンガンダム。

この機体は、可能性に満ちている。

この2人と1機ならば、どこまでも進化できる。

そんな自信が、ユウだけではなく、ユウの横顔を見つめるヒロの心の中にも広がっていた。

## 第二話 掴むための第一歩

薄暗い部屋に、僅かに摩擦の音が響く。音の大きさも、リズムも不規則に。

止まったかと思えば、息を吹きかける音とともに再び鳴り響く。誰かの言葉が飛び交うわけでもなく、ただそれは黙々と進められ――

「ユウ、こんな遅くまで何やってんだ」

「!？」

――一人の声に遮られた。

慌てて机の上に教科書の類を乗せて隠す。

「べ、勉強…….だけど」

ユウは嘘をついた。しかしあからさまに顔に表れていることは、ユウ自身も理解している。

あまり慣れないことはするもんじゃないな。そう思った。

「はは、そうか」

しかし、父親に説教を食らうということは免れた。とはいえど、普段から特段強く叱るような父親でもないから、とユウは調子こいているようでもある。

そんなユウをニヤニヤしながら見つめるヒロ。

「はああ…….今日のところはやめておいたほうがいいかなあ」

「それが賢明だろうな」

ユウはぽりぽりと頭を掻いた。時計の針は夜の11時を指している。

「ちなみに、どうなんだ？ 現状は」

「どうかなあ、この一週間でなんとか治しきりたいけど…….」

ヒロの問いにユウは答える。

その手にはヤスリと、プラスチックが貼り付けられたガンプラの胴体があった。

ユウは以前の戦闘で破損した場所や、欠けたパーツの修正を行っているのだ。

「うーん……なんとか手伝ってやりたいもんだが……」

「兄ちゃん、何してくれるの?」

「わからん」

はあ、とため息をつく。

ヒロはプラ板の扱いには慣れていない。

「あ、塗装はできるぞ!多分な」

「スプレー塗装やったことあるの?」

「ないが」

「ないのかよ」

はああ、ときつきより深く息を吐いた。

ヒロは筆塗りの方が慣れているらしいのだ。

「まあやらせろって!練習すりやなんとかなるし……どつちかが家にいないときとかでも作業進められるだろ?」

「そ、そうだけどさ」

「それに……任せつきりはなんか嫌だからさ」

ヒロがにかつと笑顔を見せる。

ヒロはきつと、前の戦いで傷ついたんじゃないかと自分を気遣ってくれているんだ。ユウはそう思った。

そんな気遣いを無下にはできないし。

「じゃあ……頼んじやおうかな」

何より、嬉しい。

向けられたヒロの拳に、ユウも拳をこつんとぶつけて応えた。

それから一日二日と経つと、アポロンはある程度もとの形に戻ったのだった。

「パテナんかは使わないのか?」と度々ヒロに聞かれるが、ユウにはあの指に張り付く扱いづらさが好まなかった。というか面倒だ。

そんなユウはどうやってアポロンを修繕したかというと、なんと傷にプラ板を縦向きやら横向きやらで差し込んだり置いたり。

上から瞬間接着剤で強制的に埋め込み、硬化後に形状を整える、と

いう、お世辞にも丁寧とは言えないというか、なかなか荒っぽい手法を取っていた。

とはいえ、だ。

「……いい感じだよな」

それでも「瞬着とプラ板とヤスリさえあればなんとかなる!!」なんて宣言の通り、アポロンがアポロンたるものとして、ここに復活したのだ。

ユウは達成感を強く感じている。

……感じている、のに。

「何かが足りない……何だろう」

技術系の大学に通うヒロはここ最近、空いた時間ができるといつも一人上の空、というか考え事をしている。

ヒロにはこの間のガンプラバトルが、忘れられないほど脳裏に焼き付いていた。

だからこそ、いつも考えてしまう。

ユウのことを。

あいつは十分に、十二分に強い。

実際、模擬戦だと油断していた自分は、あっさり負かされてしまった。正直再戦したい。

そんなユウでさえ、苦戦してしまう相手がいたのだ。

だからこそ、ヒロはずっと考えていた。

「あいつがもつと強くなるためには、何が必要なんだろう」

何かが足りない。足りなかった。

そう感じてしまうのだ。

けれどいくら考えたところで、答えがすぐに見つかる訳じゃなくて。

こんなとき、昔の自分はどうしていただろう。

「……いいものから……パクる?」

これは創作においての話であるが、いい技術をとっていくというの



は、ある種基礎とも言える。

しかしそれをどう活かせるか、ができないと、ただのパクリになってしまうのだ。

「……そうだー!」

思い立ったヒロはユウに連絡を取ろうと、携帯電話を取り出す。

新規メッセージ、2。

『兄ちゃん、今日の講義?終わったらオーツカ集合』

『……さすがに急すぎかな』

「……ははっ」

まるで自分の考えを見透かされているようだ、ヒロはそう思った。いや、兄弟やはり似通った思考回路を持っているのかもしれない。ヒロはキーボードに文字を打ち込み、ユウに返信をするのだった。

『奇遇だな、俺もそのつもりだった』

オレンジ色に輝く陽の光は、直接受けると非常に頭が痛くなる。

今自分の周りを歩き、通りすぎていく人達は、気にしないのだろうか。

なんてどうでもいいことを考えながら、ヒロは視線を右へ左へ。

制服姿のユウを目に留めたヒロは、ユウのところへ向かって走っていく。

「待ったか?」

「待ちくたびれちゃったね」

「許せよ」

「許したげる」

普段通り、他愛もない会話。

ただそんなユウの目を見て、ヒロは改めて確信した。

やはり今日ここへ来た目的は、ユウも自分も一緒なのだ、と。

夕方となると、退勤や下校の時間となり、GPデュエルの筐体のあるこの店には人がたくさん集まってくる。

塾に行く前に一戦！とか、飲み会前に一戦！とか、そういうのだろう。

ユウとヒロはというと、今日は一戦！とはいかず。

何故ならそもそも、ガンプラを持ってきていないからだ。

では何のためにここへ来たかと言えば、

「あの百式、動きブレてんな」

「対称的にあのジ・Oはすごい……重量級のガンプラを、ああも繊細に扱えるなんて」

ガンプラバトルの様子を、見に来たのだった。

あの日の戦いに、アポロンに、何かが足りないと感じた二人は、ここに来てヒントを得ようとしていたのだ。

右側に見えるのは、どうやらテストAMENTガンダムと、ゴッドガンダムの改造機体との戦いのようだ。

テストAMENTガンダムといえば、1/144スケールキットとしては未発売。それを作り上げてしまうなんて、素晴らしい腕の持ち主だ。ユウは最初に技術力の高さに感心した。

クローモードに可変させたテストAMENTのデイベインストライカーが、相手のゴッドガンダムのカスタム機の頭部に掴みかかる。

ギシギシと音を立てながら、ゴッドガンダムは身動きを取れなくなってしまう。

あれではトリケロスで串刺しにされてしまう。そうユウもヒロも思ったが……

「何だ!？」

「本気か……!？」

ゴッドガンダムのカスタム機が、掴まれた頭部を引き剥がし、機体本体が勢いよく下降、そして再び上昇した。

自ら首を千切るような決断をしたのだ。

モニタが使えなくなつたために、ゴツドガンダムのデューラーは筐体の中を動くガンプラを直接見ながら戦っている。

動揺しているテストメントは、残された頭部を放り投げ、接近する。ここからは完全近接戦闘だ。

とはいえ、モニタから映像を見ることができなくなつたゴツドガンダムのデューラーの方が、圧倒的に不利に見える。が、

「ハイパーモードだ……！」

……ガンプラバトルとは、そう簡単なものではないのだ。ゴツドフィンガーが決まると、テストメントは爆散した。

「……すごかったな」

「うん……すごいや、今のは」

「こういうのが楽しいよな……ガンプラバトルは！」

バトルの一部始終を見ていたユウとヒロは、心の底から興奮していた。

「とつきの判断というか……やり方次第でどんな戦況だつて変えられるんだ」

「ああ、よくわかつたな」

ユウは、これも手札のひとつにできるかもしれない、そう思った。

次に目に入ったのは、78とレガンダムの戦い。

大型かつ強力であるレガンダムの攻撃を見事にかわし、対応できているガンダムが印象的であった。

「技量とちよつとばかりのカスタムで、ガンプラバトルの戦力は大きく変動する。ガンダムとレガンダムとの戦いで、ガンダムが追い付けてるあれなんか、顕著に出ているな」

「確かに……すごいなああのガンダム」

ガンプラバトルにおいては、原作における機体の登場年代はバトル上の強さに反映されることがない。プラモの作り込み、要求される縦スキル、またはセンス。それらによってガンプラの性能が左右されるのだ。

強力な武器を作ったり、デューラー本人が操縦を極めることで、  
ガンダムにノーマルなガンダムが勝てる可能性も十分にある、という  
ことである。

ついに $\nu$ ガンダムのビームライフルを破壊したガンダム。

この調子だと、本当にガンダムが勝つかもしれない。

するとその時、

「そうかあれが……！」

「すっかり忘れてた…… $\nu$ ガンダムには、”アレ”があるんだ」

$\nu$ ガンダムの背面から、6基のフィン・ファンネルが一齐に射出さ  
れた。

それぞれが異なる軌道を描き、射撃形態に変化する。

いくつか避けきるも、動揺したガンダムは数発フィン・ファンネル  
による射撃を受けてしまう。

そこへ $\nu$ ガンダムが、ニュー・ハイパーバズーカを構える。

爆発と共に、 $\nu$ ガンダムのデューラーの勝利が表示された。

「……オールレンジ攻撃か」

「ああ、確実に強みにはなる」

本体を含めた多方向からの攻撃となると、それは強力なものだ。

しかし、初心者のユウには疑問も生まれる。

「あれ、GPデュエルって、ファンネルみたいなのはどうやって動かし  
てるんだろ」

「まあ基本はフルオートだな、自動で動いてくれる」

まあゲームである以上、当たり前か。ユウはそう思ったが、

「ただ、そんなのよりめちゃんと戦況を判断して正確に攻撃できる”

マニュアル”なんてモードもあるけどな」

マニュアルだなんて。まるで車みたいだ。

つまりは、ガンプレー機とファンネルひとつひとつを、デューラー  
一人で動かそうというのか。

「いや、サポーターの操縦も、オールレンジ攻撃の類いなら認められて  
たりするんだ」

サポーター。

GPデュエルにおいて、デューラーの隣で指揮や状況把握、作戦指示などをする立ち位置だ。

ユウは、ヒロにこの立ち位置についてもらおうと思っていたところだった。

「はえー……」

初戦は一人で戦ったが、今度ガンプラバトルをするとき、この制度をうまく使うのもよいだらう。

向かって左側。

ここに来てから最初に目に入ったバトル。

百式対ジ・O。

「百式、なんであんなフラついてると思う?」

ユウはヒロに問いを投げかけられた。

「瞬発力というか、適応力とかはあるから、操縦技術の問題じゃない。となると……」

ユウの目にひとつのキーが目に入った。

「……あれ、バインダーがない」

「何?」

よく見ると、通常百式の背面には2基あるはずのウイングバインダーが、どうやら破損しているようだった。

姿勢制御が上手くできないのかもしれない。

「バインダー……姿勢制御か……」

ヒロが一人呟く。

「兄ちゃん?」

「なあユウ、この前の戦いで、機体の動作に不満はなかったか?」  
聞かれて、少し考える。

「……ほんのちよつとだけ機動にグラつきがあった……とか?」

「……それだ」

「へっ?」

ユウは「大したことないし、ほんのちよつとだけだ」と付け加えるが、今のユウをさらに強くさせるには、その「ほんのちよつとだけ」の

差を埋めていくのが大切なのだ。ヒロはそう考えた。

「なあ、見えてこないか？アポロンが巨大なバインダーを2基、引っ提げて戦う姿が」

「戦う姿が……えーつと……」

宇宙空間。

遠く離れた相手が、こちらへ接近してくる。

それと同時に、アポロンからも相手へ接近していく。

少しの動きのロスも許したくない。

グリップを強く握りしめ、軌道をブレのない一本の筋のように捉え、真っ直ぐ真っ直ぐ真っ直ぐ………

ぶつかる……!!

その瞬間――

「……!!」

「これだ……!!」

実際に、ガンプラバトルが行われていたわけではない。

ただ実際の操作感を、ユウとヒロが脳内で想像していただけに過ぎない。

しかし、捉えたビジョンは二人ともしっかりと共有していた。

――さっきのレガンダムだ。

「……飛んだよね」

「ああ、確かに飛んだ」

アポロンの強化案。それはもうすぐ、形となりそうだった。

「見えたぜ……」 完成形”が……!!」

本当はあまり大きな声では言えないが、ユウはときどき授業中にまったく別のことをしている場合がある。

ペン回しに挑戦していると、隣の席の女子の足下に落として恥をか

いたり、窓に映る雲を、ずっと見つめていたり。

今日の場合、それが落書きだったのだ。

先日ヒロと捉えたビジョンを、忘れる前に形にする。

そのために、大まかなイメージを書き起こすのだ。

「背中から横向きに生えた3mm軸にアームを接続し、それを經由してバインダーがマウントされる。その際、干渉する部分を……いや、ここは塗装パターンの変更を……」

……あまりの独り言の多さに、周辺生徒から変な目で見られ続けている、ということに気づくのは、もう少しあとのことだ。

「お、やってるな」

ヒロが部屋に入ってくると、机に一人向き合うユウの姿があった。

「デスクライトぐらい、ちゃんと点けとけよ？目が悪くなる」

「へへ、もうなってる」

「バカたれが」

そう返しながら、ユウはただずっと作業を続けていた。

開かれたパーツの中に、何かワイヤーのようなものをぐるぐると巻いている。

「……なんだそれ、リード線か？」

「そうそう」

「にしてもこれ、どうすんだよ」

「できてからのお楽しみね」

「戦うときには言ってもらわないと困るなあ、俺だつてどうしたらいいかわかんないのに。というか、塗装前の中にハマてていいのか？」

「うっわうっかりだ」  
どう考えても、塗装後に中に仕込むものだろう。ヒロはひっそりとそう思っていたのだ。

机の上に散らばったパーツをじっくりと眺める。

「もしかして、ここに置いてあるのはもう塗装できるやつか」

「そうだよ、関節色だけね」

「任せとけ」

「心配だなあ」

実は知らないパーツなんかでスプレー塗装の練習をしていた（ユウには内緒で）ヒロが、パーツとスプレーを持ち出し、ベランダへ向かっていった。

そうこうしているうちに、全てのパーツの作業が完成した。

ユウもヒロを追って、パーツとレッドのスプレーを持ってベランダへ行く。

「ちゃんと吹けてる？」

「もちろんだ、兄ちゃんなめんなよ？」

「の割には、スプレー近いんじゃない？あと雨戸に近づき過ぎかな。色ついちゃったらどうすんの？」

「まあスプレーとかユウの持ち物だし、押し付けるかな」

「あのなあ……」

冗談混じりの会話に、お互い思わず吹き出してしまう。

今日はよく晴れていて、気分も最高だった。

「これで、一旦完成か？」

「そうだね、これがアポロンガンダムの……」

「……真の姿だ」

改めて組み上げられたアポロンガンダムを眺めて、二人で呟く。

背中からアームが伸び、大きなバインダーが接続されている。

腰から新たに提げられたホルダーには、ハンドガンが二丁装備された。中距離のつっさの射撃に対応できるようにしたのだ。

これだけでも、随分とシルエットが変わる。

「なんか、強そうになったよね」

「当たり前なんじゃないか？」

「へへ、当たり前だよね」

「こいつ使って戦えるの、楽しみだ」



その週の終わり。昼間からユウとヒロはいつものオーツカへ向かった。

今日こそは、ガンプラバトルの日だ。

「おおー、やっと見つけたぞお」

いざ行かん、というところで突然、背後から声をかけられる。

高校生くらいだろうか。

「え、えつと……？」

「ああ、名乗らないとだよねえ、えーつとねえ……」

呑気と言うかマイペースというか、突然現れたその人は、自己紹介を始めた。

「エイジ。ノダ・エイジって言うんだ、よろしくねえ」

とりあえず、会釈を試みる。

……が、

……なんだろう、この人。

ふわふわしているというかなんというか……気が抜けてしまいそうだ。

一体なんの用だろう。ユウは尋ねてみた。

「こんなところで声かけてるのに、わかんないのかねえ？」

「わ、わかんないですけど……」

「ふふ、ユウさんだったよね、どれが好きかなあ？」

何が始まるのかと思えば、店内で普通にガンプラ探し。

……いや、目的がある訳じゃないから探しているというより漁っているというべきか。

「に、兄ちゃんさ」

「……なんだよ」

頭の前から音符マークを生やしているエイジをよそに、ユウがヒロに小声で話しかける。

「……悪い人って訳じゃなさそうだけどさ、ほんと目的がわかんない

んだよね」

「俺も同感……あれ、」

するとヒロは、エイジが腰から吊り下げているものに気がついた。  
「なるほど……?」

「兄ちゃん?」

「おおーお二人さんやお二人さんや」

何かに勘づいたヒロとユウに、エイジが話しかける。

「ユウさんヒロさん、この中だとどれがお好きですかー?」

「そうですね……あ、ディバイダーとか好きですね」

「おおっ、いいね兄ちゃん」

「ディバイダー!すごい強そうですねー」

そうしていると、気がつけば10分近くガンプラを見ながら、3人でぐだぐたと話していた。

思いの外時間の経過が速かった。

「ふふふー」

しばらくすると、エイジが突然笑い始めた。

やはりペースが掴めない人だ。

「どうしたんです?」

「いやあ、やっぱりお友達とガンダム談議するのは楽しいですねー」

どうやら既にユウとヒロはお友達認定されているようだったが、エイジが嬉しそうなのでそこに突っ込むことはなかった。

なんだかずっとふわふわしてはいるが、もしかすると内に秘めたガンダム愛は強い人なのかもしれない。

ここで突然、ヒロが自分から口を開く。

「もしかしてあの……エイジさん?は、俺達とガンプラバトルをしに来たんじゃないですか?」

「……兄ちゃん?」

するとエイジは、うーんとしばらく考えてから、頭の上に電球を灯らせた。

「そうそう!お話楽しかったからついつい忘れちゃってねえ」  
ズボンのベルトに手を回し、何かを取り出す。

ヒロはその存在に気付いていたのだ。

「それは……!?!」

「……」

「決闘だ、アポロンガンダムのうちやま・ユウさん？」

その手にあつたのは、白と黒のガンプラだった。

「1カ月くらい前だったかなあ、お二人さんの戦いをたまたま見たのは。あれほどシビれる戦いを見たのは、ひさびさだったよー」

「その時から、俺達と戦ってみたかったと……?」

「そういうことだねえ」

GPデュエルの筐体を挟んでヒロとエイジが話している間、ユウはずっと不思議に思っていた。

こんな初心者の自分を見て、戦ってみたいと思う人がいたなんて。「ひとつだけ面白いことを教えてあげますよ。こいつ、あの時がガンプラバトル初戦だったんです」

「それはそれは……! なんとも、心の奥から燃え上がってきそうなほどワクワクしちやいますねえ」

自分が誰かに挑まれるほどの土俵に立てているなんて。

「随分と弟さんに自信があるんですねえ」

「もちろんです」

きつぱりとヒロが言う。

「でも、あの時の相手は油断をしていた。言っちゃえば、ナメてたように見えたんです。ボクは違いますよお、本気でかかっちゃいますから」

「望むところで——「えつと……」

ヒロとエイジの会話に、ユウが割って入る。

ずっと不思議に感じていた。今の自分と戦おうとわざわざ思うなんて。

それと同時に……

「俺だって、今すぐにも戦いたくてウズウズしてるんですよ。あなたは俺を目的として来た。俺達と戦うことを望んで来た。そんなの早く、受けて立ちたいに決まってるじゃないですか」

「ユウ……」

最初に想像していたのとは、全く違うバトルの開始の形。

それでも、今この瞬間、こうして決闘を挑まれている。

自分を、対等またはそれ以上の強敵として、戦おうと見てくれている。

そんなの、

「勝ちたいに決まってるでしょ……ね？」

「……当然だな、やるぞユウ」

自然とヒロの隣に立ったユウは、二人で目線を通わす。

「ふふふ……それじゃあほんとのほんとに手加減ナシだからねえ——」

突然、エイジがそのぼさぼさと伸びた自分の前髪を、全て手で後ろへと持っていった。

オールバックとなりピンと立ったその髪型が、明らかにさつきまでとは違う何かを感じさせた。

「——瞬速で行くぞ」

「……!!」

変わった。

確実に相手は、本気だ。

ユウとヒロも、もう一度互いに目を合わせる。

「サポートとはいえ、全力を尽くさせてもらうぞ」

「任せるからね」

「お前がちやんと戦えないと、意味ないだろう？」

ユウの隣へ立ち、その肩にそっと手を置くヒロ。

「Eiji's Mobile Suit

Gundam Vual Dober

V.S.

Yu's Mobile Suit  
Apollon Gundam

カードキーを差し込むと、機械音声とともに表示が現れる。相手のガンプラは、どうやらウヴァルの改造機体らしい。

表示の現れたその真下。ぼわっと淡く緑色に輝く筐体から、地面となるホログラムが形成される。

今回のステージは……市街地。中心には平面の広場が見える。

「エイジ、ガンダムウヴァルドーベル、行くぞー！」

エイジの手元にあったガンダムが、ひとりでに動きだした。

「例のギミックは、必要になったときに最高のタイミングになるように必ず俺が三つ数える。それまで余計なことはするなよ」

「わかった」

コントローラの奥の台座に、新しく完成したアポロンガンダムを置く。

背中のアームから伸びるそれが、機体のポリウムをわかりやすく増していた。

「アポロンガンダム！」

「行きます……!!」

台座から駆け足で、アポロンはドーム状の中へと向かった。

距離が離れている。

今の場所からは、相手を確認することができなかった。

「READY?」

「BATTLE START」

表示が浮かんだ瞬間に、互いにグリップを前へ倒す。

背部のスラスタを一斉に点火させ、高速で前進するアポロン。

しばらく先まで一本道が伸びているため、直線で移動をしている。

「久しぶりだけど、確実に安定してるよ」

「効果はそこそこってもんだな」

背部に取り付けられたバインダーの有用性が、ユウにもヒロにも感じられた。

途中、ビルに突き当たる。

方向を変え、迷路とも言える道路を進む。

どこだ。

相手は今どこにいる？

以前とステージ設定が異なるだけで、ここまで最初の行動が変わるのか。ユウは驚きつつあった。

するとそのとき、

「ユウ上だ！」

「!？」

投擲されたと思われる何かが上空で突如炸裂し、アポロンを襲った。

慌てて姿勢を低くし、ビームシールドを天面に向け展開する。

「グレネードか……」

「早めに近づいた方がよさそうだね」

「その通りだ……!!」

「何!？」

ユウに言葉を返してきたのはヒロではなかった。

「後ろに回り込まれた！避ける！」

「間に合うもんかよ……!!」

煙が渦巻き、辺りを視認できずにいるアポロンの背後に、影が迫った。

「間に合わせない……!」

立ち上がろうとしていたところで姿勢を崩される。ドーベルの膝蹴りを喰らったようだ。

膝アーマーから電撃が走る。

「起き……上がれない」

「こんなところで終わられちゃ困るよユウさん」

「言つてろ……!」

右足を大きく踏み込ませ、地面を這うアポロン。

粉塵が漂う中、なんとかドーベルから逃れることができた。

起き上がり、改めて相手を目に留める。

第一印象は、「細い」。

ただでさえ装甲が欠けているウヴァルから、さらに装甲を省いたように見える。両腕などが顕著に現れていた。

しかしその繊細さを感じさせんとするほどの下半身の力強さが、確かにあった。

大きく張り出した脚部こそが、さっきの攻撃の正体だろう。また、腰回りに武装が集まっている。

ちらちらと見える背面には、スラスター類が集中しており、まさに身軽さを体現したかのような機体であった。

そのビジュアルは、さながら武装した飛脚と言ったところか。

かつこよくて、強そう。やはりそんな相手とこうして戦えるのは、ワクワクする。ユウはひしひしと感じていた。

しかし、油断はしてられない。

こちらから攻めるか。

もしくは――

「!?!」

考えている間に、ドーベルがアポロンに迫った。

右サイドアーマーにマウントされていたビームダガーを振りかざし、アポロンを切りつけようとする。

が、ヒロの呼び掛けに咄嗟に反応したユウはうまく回避する。

次はこちらの番だ。

勢いよく飛び上がってから、ボレーキックのような形で目の前の相手を狙う。

――避けられた。

しかしこれでは終わらず、外した反対側に向かってかかとの刃を展開し、体に逆回転をかける。

が、またもや回避されてしまった。

その身軽さを惜しみ無く活かされ、全く攻撃が当たる気配がない。リアアーマーのサーベルラックに手をかけ、引き抜くより先にドーベルに接近する。

しかしその瞬間、ドーベルの左手から何かが放たれた。

またもやグレネードだ。

体勢を変え急速後退するも、相手のサイドアーマーに内蔵されたバルカンがグレネードを貫き、爆発する。

またもや視界が靄に包まれた。

だが、機体にダメージが行き届いていない限りどうということはないのだ。

引き抜かれたビームサーベルの赤い刃が、体を大きく捻るアポロンとともに白煙を切り裂いた。

今度こそ、攻撃体制に入る。

ロボットサイズとしてはとても狭く感じる道路上で、睨み合う二機が並び立つ。

今一度、足を地面に踏みつけ、加速する。

右手に握られたビームサーベルはより一層出力を増し、激しく輝く。

ドーベルはファイティングポーズだ。

相手がかまた攻撃を仕掛けてくるのはわかっている。

だが、前にしか進めない。そうやって戦うことしかユウにはできない。

両手で構えたビームサーベルを大きく振りかぶり、叩きつけるかのごとく振り下ろした。

また避けられた。

背後に回られたドーベルにダガーを突き刺されそうになるが、直前で上体を反らしこれもまた回避する。

近距離の攻防戦……いや、守りではなく互いに避け合っている。

幾度となく、そのビームサーベルを振りかざした。

しかしそれと同時に、幾度となく避け続けられた。



これでは状況を変えることができない。

ユウは隣にいるヒロを見つめた。

ヒロも苦しい顔をしている。

しかし、余所見がいけなかった。

気がついたときには、ドーベルのビームダガーが、アポロンの右手に握られていたグリップを貫いていた。

思わず手を離す。

先に武装をやられてしまった。

前にしか出られない。

だからこそ、今この瞬間だけ切り抜けられたら――

「ユウ、後ろを取ってからもう一度ビームサーベルだ」

「後ろを取れたって、それが出来ればここまで苦戦なんかしちやいないよ……!!」

とは言いつつも、武装を手にしないまま相手の懐へ飛び込む。

ドーベルがアポロンの背面をおそらく捉えたであろう瞬間、

――ハンドガンだ!!!

そう、ヒロに目で訴えかけられた気がした。

攻撃されるより先に、勢いをつけたまま足元へ滑り込む。

ドーベルのビームダガーのリーチでは足りない範囲へ潜ったと同時に、サイドアーマーのハンドガンを二丁取り出しドーベルの背中へ向ける。

「何……ッ!?!」

「もらった!」

三、四発、短い光線が発射される。

一発だけドーベルのバックパックを直撃し、瞬間姿勢を崩すことに成功するも、二発目以降の攻撃は、相手特有の瞬発力で回避されてしまう。

相手のリアアーマーに設けられた5つのバーニアが火を吹く。

しかし、確実に相手の間合いは取った。

もう片方のビームサーベルを引き抜き、ふらつくドーベルに接近する。

しかし同じ行動を取り続けると、相手に読まれてしまう。突然大きく違った攻撃を仕掛けることで、相手を油断させることができるかもしれない。ユウはそう考えた。

接近してから、一瞬振りかぶる素振りを見せ、ビームを展開したままサーベルのグリップを放り投げる。

もちろん投擲する武器ではないため、当たるか当たらないかは一か八かだ。

しかしその僅かな可能性を信じ、ユウは止まらずドーベルに向かって走り続ける。

相手は驚いた様子ではあったが、やはり避けられてしまった。

——それでいい。

持てる推力を尽くし加速したアポロンが、避けるドーベルをさらに避け、ドーベルに当たることなく地面へ突き刺さろうとしていたサーベルのグリップを握り直した。

そんな行動を取るなんて、きっと相手は考えられるはずがない。

旋回し、戸惑うドーベル目掛け今度こそ刃を向ける。

今まさに当たる……といったそのとき、

「防がれた……!?!」

ビームサーベルを握った右腕は、一本のロッドと思わしきものに止められた。

その華奢とも言える腕からは考えられないほどの力で、形勢は逆転させられてしまう。

「チェインシャフト……。ドーベルの主武装だ、覚えときな……!!」

右サイドアーマーにさつきまでマウントされていた巨大なロッド“チェインシャフト”が、ドーベルの手に握られた。

明らかにリーチが長い。さつきのような懐に飛び込む戦法は無理だろう。

「ビームサーベルじゃ……対応しきれないかもしれない」

「大丈夫だ、そんなときは脚がある。自慢の脚がね」

ヒロの心配をよそに、ユウは前を見た。

——面白くなってきたじゃないか。

今一度グリップをしつかり握ったのを確認すると、大きくジャンプをして上からドーベルに迫る。

てつきりガードをしてくるかと思っていたが、そのチェインシャフトで思い切り薙ぎ払われる。

「っ……!!」

予想以上の力強さでアポロンは吹き飛ばされ、ビル郡に突っ込んでしまう。割れた窓ガラスのエフェクトが舞う。

その衝撃で、思わずビームサーベルを手放してしまったのだろう。どこか遠くへ飛んでいったのが見えた。

「マズいー」

「どうしろって……!?!」

破壊されたビルに倒れ込むアポロンのもとに、ビームダガーが先端にマウントされたチェインシャフトを振り回すドーベルが現れる。

すぐ目の前まで迫ったドーベルの腕を両腕で押さえる。

……しかし、やはり強い。

だからといって、負けるわけにはいかない。

相手の攻撃を必死に防ぐアポロンの両腕から、ビームシールドを展開させる。

防御用の兵装とはいえビームのため、γナノラミネート装甲のない相手の腕はビームを受け赤く光り、今にも溶け落ちそうに見える。

「こんなところじゃ戦いにすらならない……広場へ誘い込むんだ!」

「わかったー」

瞬間生まれた隙で、ビルとドーベルから離れ、飛び上がるアポロン。スラストを一齐に吹かし、全力での加速。数あるビルの上を走って、飛んで。

それでも、地上を走るドーベルに追い付かれそうになる。

「地形活かしちゃう? 兄ちゃん」

「時間稼ぎならできるとぞ」

ギリギリまで接近されたところで、ちょうど左足をつけていたビルの角を、そのかかとの刃で破壊する。

砕けた破片のエフェクトが大量に降り注ぎ、ドーベルの動きを止め

た。成功だ。

それを確認したら、再びアポロンはビルの上を飛び続ける。

……しかし突然、足場が崩れた。

「なんで!？」

バランスを崩しそうになるが、咄嗟に点火したスラスターによって、なんとか着地する。

——自分達よりも前に、ドーベルがいた。

「……瞬速だって言ってるんだろ」

とんでもない速さで追いついてきたドーベルは、心なしか赤みを帯びているようにも見えた。

もう逃がさない。

ガンダムの目に、そう訴えかけられているようだった。

息を飲ませる間もなく、ドーベルが一気に距離を詰めてくる。

一方のアポロンは手持ちの武装もほぼなく、また避けるしかできない。

それでも、限界が近づいてくる。

結果的に、広場まで誘い込めたのは幸いと言えようか。

一気に身動きが取りやすくなるがそれはまた、相手にも余裕を与えてしまうことにもなる。

そうなる前に、形勢逆転を考えねば。

「余所見をするなっ!!」

「ぐっ……!!」

頭ばかり働かせている間に、相手に隙を見せてしまった。

チェインシヤフトが下から振り上げられ、アポロンはさらに遠くへ飛ばされてしまった。

「おい、左腕が……」

ヒロの声を聞き、機体を確認する。

先程の攻撃をまともに受けたのがこの腕だったのだろう。使い物になりそうにない。

「兄ちゃん……?」

ヒロがユウの前に乗り出した。

そして鋭い眼差しをアポロンにしばらく向けたあと、後ろへと戻った。

ニヤリと上がったその口角を、ユウは見逃していなかった。

「ユウ、今相手がいるところまで一直線……走れるか」

「いけるよ」

「それと……そろそろカウントだ」

「どうした、こんなところで終わりじゃないだろう」

エイジからの声。

まだまだやるぞ、と言った具合に、ドーベルはもうひとつ右腰にマウントされているチエインシャフト同士を合体させ、さながらソードインパルスのように持ち上げ、振り回し、構えた。

こんなところで終わりにない訳がない。

当然だ。

だって――

「――勝ちたいから……なッ!!」

機体を起こしたユウは手元のグリップを目一杯傾ける。

反動を感じるほどの加速に、鳥肌が立つ。

……やっぱりアポロンは凄い。

ドーベルもその巨大化したチエインシャフトをこちらに向け、接近してきた。

アポロンが何もしなければ、おそらく攻撃を仕掛けてくる。

アポロンから攻撃をすれば、真っ先に避けられる。

そう、持ち前の運動性を活かして何度も何度も避け続けられる。

互いに接近する。

どうすれば。

青白い光を放ちながら加速するアポロン。

どうしたら。

大地に足を踏みつけ、全力で駆けるドーベル。

どうすれば相手に……

ドーベルより手前に、白い何かが見えた。

あれは――

「ユウ、カウントだ!!!」

「!!」

ヒロの声を聞きはつとする。

「見えたよアレが……使えばいいんだろう」

「ああそうだ。とにかくぶつかると勢いで迫っていけ……そしてあれを使うんだ」

アポロンはさらに速度を上げた。

徐々にドーベルが近づいていく。

「3!!」

右手でハンドガンを掴み、照準を向ける。

ドーベルまで40センチ。

「2!!」

それに気づいたドーベルはやはり回避行動をとる。

すれ違う形になったドーベルは、さつきと全く反対方向になることになる。

そして……

「1ッ!!」

「飛ばす!!」

背中の子のバインダーが、勢いよく飛び出した。

「何だと!？」

それと同時にユウの隣に、小型のグリップが現れた。

待ってましたと言わんばかりに、ヒロがそれを握る。

有線遠隔兵器となったバインダーは、黒いリード線を尻尾のようにしながら、退こうとするドーベルを追う。

一方のアポロンは、少し前に遠くへ飛んでいってしまったビームサーベルのグリップを回収する。

ドーベルの背後を取ったソードビットが、地面に突き刺さる。

「ッ……!!」

動揺しきっていたドーベルはそれに躓いてしまう。

バランスを崩したところで、ソードビットのコードがドーベルに巻き付く。

「もう逃げらんねえぞ……!」

ヒロ、自慢気である。

アポロン背部のソードビット基部が、一気にコードの巻き取りを始める。

逃げられないドーベルをそのまま、こちらに引き寄せて――

「これで!!」

「終わりだ……ッ!!」

ゼロ距離となる直前に、ビームサーベルで胴体フレームから切り裂く。

ソードビットがバインダー形態に戻ると、相手はアポロンの背後で爆散した。

「Battle Ended

Winner

Yu's Mobile Suit

Apollon Gun

dam

表示が現れるとユウは思わず嬉しくなって、

「つつしやあ!!!」

声を上げてしまった。

子供みために。

そうしたら、ヒロも一緒に、

「やつつつ……たあああ!!!」

……子供みために、声を出していた。

筐体の反対側へ、ユウとヒロが向かう。

「えつと……」

自分も同じとはいえ、相手のガンプラを傷つけながら戦う。だから、

「ありがとうございました」  
「礼儀くらいは忘れたくない。」

「俺、まだ二戦目なのに……すぐく楽しかったです」

この前の相手には退けられてしまったけども、右手をエイジに向けた。

「……こちらこそ、ユウさん達ほど派手な戦い方する人と出会うのは初めてだった」

握り返してくれた相手の顔は、笑顔だった。

「それが、君達の強さなのかもしれないな」

「強さ……?」

エイジは、満足げにふつと笑った。

「それにしても驚いたなあ、バインダーがあんな風に飛び出すなんてねえ」

「えっへへ……」

しゅん、と立ち上がっていた前髪が倒れ、最初の口調に戻った。

非常にオンオフが表れやすいのだろう。

「ははっ、連絡先交換しちゃった」

「こりや完全に友達認定されたな」

エイジがいなくなったあとのオーツカで二人、ユウとヒロは語らいの時間を過ごしていた。

「想像通りの出来だ、俺達があの時見たビジョンのまんまだった」

「それを言うなら、最高のタイミングで最高のコントロールをしたくれた、兄ちゃんだっすごいよ」

お互い、こうしていると嬉しくて仕方なくなる。

今回は紛れもなく、二人の勝利だった。

「次に備えて、また考えないとな」

「そうだね」



ふと、ヒロが店の壁を目にする。

そんなヒロの視線を追って、ユウもまた目にする。

「……全国大会？」

第14回GPD全国大会。

ポスターに書かれていた文字。

疑問形で呟くが、返事がない。

「……兄ちゃん？」

「え、ああ……いや、何にもない」

少しだけ不安そうな表情をしていたけど、大丈夫だろうか。

ユウは少しばかり心配をした。

でも、

「全国大会……かあ」

「ユウ？」

ここまできると、目指したくもなる。

自分の思う、かっこよくて強い、自分だけのガンプラ。

そんなガンプラで、頂を目指してみたいと思うのは、男子であれば

当然とも言えよう。

「なんか、第一歩を改めて踏み出せたって感じ、しない？」

うーんと少し考えたヒロは、笑顔で答えた。

「……そうだな」

まだまだ、強くなるために。

ユウとヒロのガンプラバトルは、ここから始まる。

「……兄ちゃん、どうしたの？」

店を出て突然、ヒロの顔が強ばった。

同じ方向を向くと、ちらりとこちらの様子を伺った誰かが、去って

いくのが見えた。

その指には、紫色の指輪が。

「……トロさん？」

「いや、違う」

やはり、そうだったのか。

そう呟いた声は、ユウに聞こえることはなかった。

一歩を踏み出したと同時に、

闇も、こちらへと迫ってきていた。

番外編 To The Vast Virtual  
World!!!!

「アポロン使って、宇宙空間から大気圏突入とかしたくないか？」  
滴り落ちる汗をそのままに空を眺めていると、ヒロがユウに問いかけた。

「まあなんていうか……夢ではあるよね」  
「だろ？」

晴天という言葉に相応しいほど、雲ひとつない青空。

目線を少し横に反らせるだけで、目がチカチカするほど眩しい太陽が見えた。

「なんならいつそ、太陽に行きたいな」

「それは無茶なんじゃあないか？」

「でも、アポロンで宇宙に行くのだからって無茶なもんでしょ？」

GPデュエルのバトルフィールドには、限界がある。

街のステージが形成されればそこは街でしかないし、空には限りがあった。

宇宙空間のステージが形成されたって、それは同じことだ。どれだけいくつもの星々が輝いて見えたところで、そこへ降り立つことはできない。

「……現実にしてしまおうか」

「ん？」

ちらりと横目でヒロを見つめる。

何故だかユウにはわからないが、笑っていた。

「地上だって地下だって、どこか宇宙の遠く果てまで行き来できるガンプラバトル。してみたたくないか？」

15の自分より、もつと子供みたいに無邪気な瞳。

ヒロがこんなに楽しそうに話すことは、なかなかない。

「してみたい……けど、それどんな規模になるの、筐体」

「あつはは……そうだよな」

そういうと、ヒロは途端に恥ずかしそうな表情をした。  
そんなに広い世界で戦えるなら、どれほど楽しいことか。

……というか、ほんとに規模はどうなるのだろうか。ドーム貸切とか……？ライブか。

なんて想像を、ユウはヒロと夢の話を語りながらしていたのだった。

あれから7、8年ほど経っただろうか。

バトルフィールドは宇宙。

青白く光る地球に向かって、赤いマントがなびいた。

「大気圏突入体勢に入る。冷却一番二番確認、姿勢制御、A1とD3H4角度固定。F2はそのまま前方——」

いかにも無線通信といったような音質で、それぞれの機体と交信する。

「A1OK、F2！」

「良好だ」

ガタイのいい……というより、大きな腕を持った機体がちちらを向いた。

「D3！」

「問題ない」

GN粒子の緑色を放ち続ける青い機体が、サムズアップを見せた。

「H4！」

「いいよ、いけるー！」

小柄な黄色い機体が答えた。

「各員準備はいいな!!!」

「いつでも」

「瞬速で……!」

「たどり着いちゃうよーっ!!」

それぞれの機体が、徐々に赤みを帯び、加速していく。

「もう夢物語じゃなくなった……兄ちゃんのおかげだ」

俯き、小声で呟いた。

「どうした、ユウ」

「……いや、ただのひとりごとだ」

「フォース”陽炎”……これよりオデッサへ向かう!!!」

にやりと笑ったその顔は、

紛れもなく、かつての少年のままだった。

### 第三話 再燃の灯火

電車を降りてから数分自転車を走らせると、いつもの模型店にたどり着く。

この間購入した、ガンプラを腰から提げることが出来る専用のホルダーを誇らしげに眺め、ウチヤマ・ユウは入店した。

「やあユウくん、学校帰りかな?」

「店長、こんばんは」

こんばんは、と言うにはまだ陽が沈みきっていないな、と口にした後からユウは思う。

「すっかり、ガンプラバトルの虜じゃないか」

「なんとというか……本当ですよね、でも今日は買いに來ただけなので」

「そのわりには——」

そーっと首を伸ばすように、ユウの右腰に目をやる。

「随分とやる気満々だね」

「あはは……なんか、手放せなくって」

いつの間にかユウは、どんなときもアポロンを手元に置いておくようになっっていた。

ちょうどテスト期間が明け、ユウはすっかり解放感に浸っていた。

……忘れてはいけないが、それでも一応受験生である。  
積まれた箱をぼーっと眺める。

特に何も考えず、ただ素組みをしたい。そんな気分。

「お、Gセイバーとか再版されてたんだ」

中々古いキットのために、再版がかかるとネット上では軽く盛り上がったりする、レアキットである。

一度手を伸ばそうとしてみるも、

「うーん……」

古いが故に、ガシガシと動かすには向いていなさそうだな。そう  
思って手をひっこめた。

やる気さえあれば可動改造とかもしてみたい。なんて思いつつ目  
線を少し左へずらす。

「この辺でいいかもな」

ビルドカスタムの辺り。

低価格帯でありながらもバリエーションは豊かであるため、気軽に  
手が出しやすく、なおかつ使いやすい。

可動アームなんかがセットされたものを選ぶと、そのままレジへ行  
こうとした。

よくよく思えば、素組みで作るガンプラを買うつもりだったのに、  
改造に使いそうなものを手にしていたことに気がつく。

まあここは、欲しいものを欲しいときに買うべし、だ。

……が、

「ん、」

一度箱をもとの場所へ戻す。

少しばかりの尿意を感じたユウは、一度トイレへ向かうことにし  
た。

「清掃中」の看板をよそに、個室にひとり。

激しい水の音とともにせつせと用を済ませたユウは、すれ違いざま  
にちらりとこちらに目を向けていた清掃員に軽く会釈をし、トイレを  
後にしようとする。

いや、全然ちらりではない。

ガン見だ。

それも、腰のホルダーを。

すると相手はユウと同様のホルダーから、キラリと金色に光るひと  
つのガンプラを取り出し、こちらに見えるように構えた。

かっこつけているように見えるが、これは言わばガンプラバトルの  
お誘いである。

……かっこつけていることに変わりはないかもしれないが。

トイレを出た二人はそのまま、GPDの筐体へ向かった。

もちろん互いに初対面であるが、ここに立った時点でそんな情報は意味を持たなくなる。

自分も相手も、デューラーである。

それだけだ。

「Y u ' s M o b i l e S u i t

A p o l l o n G u n d a m

V S .

F u t o ' s M o b i l e S u i t

H Y A K U — S H I K I

カードキーを差し込むことで、相手と自分の情報が現れる。

清掃業者の青い制服を身に纏った相手は、イヌハラ・フウトと言うらしい。

2、30代ほどの男は、何故か自信に満ちた目でこちらを見つめている。

が、ユウが一切の反応も見せないことでやり取り？は終了してしまった。

円形の台座にユウがアポロンを置く。

しかし以前と違い、機体の赤に対して目立つ青色の「GNソードII  
ブラスター」を右手に装備していた。

相手も同じようにガンプラを置く。

適度にディテールが追加され、塗装も丁寧。情報量と説得力に長けたいいガンプラだった。

……ってよく見るとあれ、この前ジ・Oにやられてた百式じゃないか。

そんなことに気づいたユウは、こほんとわざとらしく咳をするような動作をし、グリップを握ってから、



「ウチヤマ・ユウ、アポロンガンダム、行きます！」  
己のガンプラを、そのバトルフィールドへと侵入させた。

ステージ設定は宇宙。

思えばユウは今まで、地上でしか戦ってこなかった。慣れない操作感に耐えうるかどうか、実際は計り知れない。

「READY?」

まあ、やってみるしかないだろう。

人差し指から小指まで、ウェーブさせるように折り曲げてグリップを握り直す。

「BATTLE START」

合図と共に動き出す。

地上でかかっていた重力という概念が存在しない宇宙空間で、バーニアを吹かして適当な地点へ移動する。

左側面よりフォアグリップが展開され、両手でライフルを構えた。

「落ち着いて……相手の位置も、動きも見て……」

射撃モードとなったディスプレイでは、黄金色に輝くそれを見逃すことなく捉えていた。

「それと少しだけ……軌道の先を撃つ……!」

深く息を吐いてから、ロックオンされた敵機に向かってトリガーを引く。

高出力の目映い光線が、そのバレルから放たれた。

「ん、エイジさんからのメール?」

「そうそう、なんか突然俺の分析みたいなことを始めてさ」  
数日前のこと。

ヒロはユウと一緒に、ひとつの携帯電話の画面に注目した。

『ハンドガンの扱いが雑に見えたよー、射撃の基礎から練習してみる  
ともっと強くなれるかもねえ』

「一応、アポロンは格闘特化のつもりなんだけどな……」

「まあでも、経験として練習しておいても損はないかもな」

以前の戦闘の中でエイジは、ほんの僅かな弱点に気づいていたらしい。

しかしながらユウの言う通り、アポロンガンダムは近接特化型のガンダムであって、ハンドガンはあくまで保険。

さすがにそれがわかっていないということはなさそうだから、何か意味があるのかもしれない。

「教えてやるから、しばらくこいつ使ってみろよ」

するとヒロがジャンクの箱から、GNソードIIブラスターを取り出し、ユウに手渡した。

そうして今に至る。

「外した……!?!」

アポロンがライフルから放った攻撃は、敵機の百式に見事にかわされてしまった。

相手の機動力はそこそこ。特筆するほどずば抜けて速いわけでもない。

しかし、これでは……。

再チャージを始めるアポロンガンダム。

GNドライブ搭載機でないために武装との相性が悪い、というガンプラバトル特有のある種厄介な特徴があるために、これまた時間がかかる。

接近されては落ち着いて撃つことができないため、距離を開くように相手から遠ざかる。

相手のビームライフルによる射撃が飛んでくるも、それは難なく避けていく。

うまく相手の背後に回り込めた。

「もう……一回!」

「とりあえずは深呼吸な」

「深呼吸」

GNソードⅡプラスターを持ったアポロンが、ヒロの操縦桿で動かされる。

位置を決め、膝立ちの体勢をとってから、ぐつとライフルを構えた。

「相手の動き方、パターン、現在の位置。ある程度把握するんだ」

「動き……位置……把握……」

銃口の向く先には、サンドバッグ扱いのプロペラントタンクが、高速でうろろうろしている。

「整理がついたら……動きの先を見て撃つ」

「先を見て——」

フルチャージ状態のビームは太い帯のようになり、辺りに衝撃波を与えつつプロペラントタンクを貫いた。

「すっげえ……」

「まあこう……先読みの加減とかが一番難しいんだ、練習して勘を掴むしかないな」

射撃によるガンプラバトルも経験していたらしいヒロの話を、ユウは興味深そうに、黙々と聞いていた。

かれこれ4、5発ほどだろうか。

「先読みって……そうそうできるわけないじゃん……!!」

ユウ自身も驚くほど、当たらない。

「——!？」

気がつけば相手のビームライフルの射撃が、左肩を掠めていた。

「ええい……」

本領を発揮できず、弾もなかなか当たらない。

ユウはむしゃくしゃしながら、元の場所を離れ高速で敵機に接近し、

「刃がついてるんだからさ……」

ライフルを持った腕を大きく振りかぶり、銃身下部に装着されている熱刃を、敵機の百式の脇腹に回し、食い込ませ、そして

「こう、したほうが……早いよなあ!!」

上半身と下半身で真つ二つに切り裂いた。

「Battle Ended」

無機質な機械音声が鳴ると同時に、ホログラムによる世界がキラキラと輝きながら消えていく。

最終的に、近接戦闘に持っていつての勝利であったために、練習にはならなかった。

「君のガンプラ、かっこいいね」

バトルが終わってから、相手に話しかけられる。

初対面であってもなくても、戦いを終え、筐体を降りた時点で、そこからは互いを高め合う仲間となるものだ。

「あ……い……ありがとうございます!!」

ユウは自らの作ったアポロンガンダムが好きであった。

そのため、誰かにこうして好感を持つてもらえると、何とも言えない幸福感と達成感に包まれる。

互いの全力を尽くし、持てる力を持ってして戦いきる。

残ったものがどうであれ、戦いが終われば、互いを尊び、労り、認め合い、その戦いに感謝する。

そうして、ライバル同士がそれぞれを高め合うことができる決闘――ガンプラバトルの沼に、ユウは徐々にハマりつつあった。

しばらくユウのアポロンや、相手の百式について語らい、アドバイスなんかをし合いつつ、ユウは相手と別れ、帰路に就こうとした。するとその時、

「そうだユウくん、一つだけ」

丁度今違う方向へ行こうとしている時、再び声をかけられた。

「……？」

「忠告というかなんとか、最近変な輩がこの辺のGPD筐体設置店をうろついているって噂があるんだ。一応気を付けてな」

「は、はあ……」

変な輩。

あまりにも情報量が少なすぎたため、どうせ噂は噂だろうと思いな  
がらも、改めて駐輪場へ向かった。

自転車を漕いでいる途中で、すっかり忘れていた「ガンプラを買う」という目的を思い出してしまったのは、これまた別のお話。

「遅かったじゃないか」

「ごめん、こいつの練習してた。兄ちゃんは早かったんだ」

家に帰ると、部屋には兄のヒロが。

ユウはGNソードIIブラスターを持たせたアポロンを、ヒロに見えるように置いた。

「で、成果はどうよ」

「全く」

「マジかお前……」

ヒロは呆れたような顔をした。

何故かユウも呆れたような顔をした。

「先を読むとか相手を捉えるとか、至難の技過ぎるよあれ。できるわけないって」

「それがガンプラバトルをするやつ言うことか」

センスというかなんと言うか、長けているところと圧倒的に欠けているところの差が激しい。

戦闘スタイルといった形で補うこともできるが……。

「適応力はゼロだな」

「うんんん……」

これでは、予想外の相手や状況が迫った時に対応がしづらい。

「全国大会、気になってるんだろ？」

ヒロの言葉に、ユウは静かに頷いた。

「ちよつとずつでいいからさ、頑張ってみようぜ」

「……そうだね」

今後のことを考えると、やはり手数が多いに越したことはない。できる限り、練習していこう。ユウはそう思った。

「変な輩？」

「そうそう、なんか今日対戦した人に言われたんだ」

ユウはプラ板片手に、ヒロは携帯片手に話している。

「詳しいことはわかんないけど、なんか危なげっぽいよ。あくまで噂だけどき」

「……危なげ、か」

しばしの沈黙。

ヒロは瞬間、険しい顔をしたようにも見えたが、

「な、なんか物騒だな。情報量がなさすぎてアレだけどな」

ふつと、いつもの表情に戻った。

「そうなんだよね、まあ気にするつもりもないけどさ」

そう返すと同時に椅子ごと体を机と正面に向かせ、作業を再開する。

今ユウが行っているのは、いわゆるスクラッチというものだ。

「忘れ物ない？」

「ないない」

朝。

度々ユウとヒロは、家を出る時間が一緒になっていたりする。

「今日もガン普拉バトルしていくのか？」

「そうだね、帰りに時間あったら」

ユウはカバンの中に、ケース入りのアポロンガンダムを忍ばせた。  
「ほらほら、行く」

「おうおう」

急かすようにしながら、ユウは部屋を出て、階段を降りる。

ヒロが一人残った部屋。

目を閉じて、深呼吸をする。

クローゼットを開けると、普段は鍵をかけており開けることのない  
引き出しがあった。

そこへ久々に鍵を挿入し、中を目にする。

「……変わってない、よな」

少しばかりの安堵。

しかし、ヒロの表情はまた強ばる。

決意の表情であった。

「……お前をこうして元に戻したことを、いつかまた後悔するかもし  
れない」

優しく語りかけるかのように呟く。

「それでも、アイツを守るためにも、もう一度——」

それは、かつての戦友に話しているかのように。

「——俺に力を貸してくれ」

手にしたものは、白、赤、青、黄。

その姿は、紛れもなくガンダムであった。

学校にて、休憩中のユウ。

アポロンの製作のときに挿んだ感覚を活かし、武装をスクラッチし  
ようと考えていた。

現状出来ている刀身部分に合わせて、柄と鞘のデザインをスケッチ  
から思考する。

……スケッチと言っても、本当にお粗末なものであるが。

「セイクンはすごいよなあ」

『ガンダムビルドファイターズ』の主人公、イオリ・セイ。

ガンプラに活かすために絵を多少を学んでいたとかなかったとか。

その辺、ユウは全くである。

しかしながら、結論を出すのは立体造形。スケッチの段階では、あくまでなんとなくでよいのだ。

「ん、次移動か」

休憩時間が終わりに近づくのを確認すると、次の授業が行われる教室へ向かおうとする。

教科書、ノート、そしてスケッチ。

積んで抱えて、教室を飛び出す。

「――!?」

「うわっ」

……飛び出したのがいけなかった。

そう！

ユウはドアの向こうに誰かがいると、ビビって腰から崩れ落ちてしまふ

ドがうん千個ほどつきそうなのなビビりなのである!!!!!!

……ガンプラバトル以外においては基本的に。

「……大丈夫?」

扉の向こう側にいた彼女は、そう声をかけてきた。

「まあ……うん、大丈夫。ごめん」

尻餅をついていたその腰を持ち上げ、ばら撒いた教科書やノートを拾う。

目の前にいた彼女もそのまま手伝ってくれる流れになったのだが、

「何これ、刀?」

スケッチを見られた。

見られたといって害があるわけでもないが。

「そう、刀」

「ふーん……」



自分から聞いておいて、案外どうでもよさそうだな、と思ったのは置いておいて。

それよりも、

「ウチヤマくんすっごくいびりじゃん」

なんてユウは言われてしまった。

ユウ自身としてはそんなことは自覚しかない。

しかしながらなんだこいつは。初対面だろう。

よくそんなことが言えたものだ。

「否定はしないけど……ってか、なんで名前知ってるの」

ユウは彼女の名前を知らない。

しかし彼女はユウの名前を知っている。

多少の恐怖心はある。さほど名の知れるほどの行動をこの学校で起こしたつもりもない。

そこで返ってきた答えは、

「……同じクラスじゃん、何言ってるん……??」

しまった。ユウはそう思った。

関わりのない人間は半分ほど名前を忘れがちなのだ。

「……ふ」

「……………ふ？」

「ぷっ……ははは!!何何?変なのー」

終始バカにされ続けていることに気づいたが、ユウはあえて堪える。

「アタシさ、おもしろそうな人が好きなの」

立ち上がった彼女が言う。

「キミね、なんかおもしろい」

「褒め言葉には到底聞こえないけどな」

「そんな褒めてるつもりもないからね」

いちいち引っ掛かるやつだ。

そう思いつつも、ほんの少しだけ笑ってしまった。

「これ、もしかしてガン普拉バトルのやつだったりする?」

「え、」

拾い上げたスケッチを指差して言う。  
もちろん凶星である。

「そう…….だけど」

「ふーん…….」

さつきとは僅かに声のトーンが違った。  
興味がさつきよりはあるのか、はたまた他の何かか。  
その表情は、真剣にも深刻にも見えて――

「あ」

「あ」

響くチャイムの音。

授業開始の合図。

気がつくと教室には誰もいなかった。

「移動教室なのっ、完全に忘れてた……!!」

「アタシも…….っ!!あーマズい!!!」

チャイム後二人の廊下爆走。

遅刻確定どころか現在進行形で遅刻している。

「そっぴゃお前、名前は…….っ!」

「そっかそっかつ、おんなじクラスメイトのことなーんにも知らな  
かったんだもんね…….っ!!」

「ぐぬ…….」

「アズマ・ツバキ!」

隣で走る彼女は、そう名乗った。

「遅れてすみません!!!!」  
「!!!!」

学校帰りは遊びの時間だった。

暇さえあれば模型店へ行き、ガンプラバトル。たまに店を変えては交流し、その繰り返し。

自覚があるかどうかはともかく、ユウ自身の能力は確実に成長していた。

下校前のホームルーム。

携帯の画面を点けると、新着メッセージが。

『今日は早く終わりそうだし、一緒に行くか?』

ヒロから。

もちろん、ガンプラバトルの話。

『うん、行こう』

そう返すといつも、ユウはどこか上機嫌であった。

「兄ちゃん、上!!」

「ああ……!!」

アポロンの背部バインダーが切り離され、さながらファンネルのように宇宙空間を駆ける。

頭上から降り注ぐ弾丸の雨を切り裂き弾き、一切の被弾を無くした。

「上手すぎでしょ」

「当たり前だ、俺を誰だと——」

称賛の言葉を伝えると、ヒロからの言葉が途切れる。

「……兄ちゃん?」

「あ、あーいや、何も」

不思議そうに隣を見つめるユウ。

「……何だ?」

「いや、何も」

本人達は気づいていないかもしれないが、こういったときの受け答えは兄弟共に似ている。

長く付き合があると、やはりそれだけ影響を受けるといふことな

のだろうか。

「対象が移動してるぞー。ユウ、練習だ」

「了解っ！」

サイドアーマーのホルスターを展開し、ハンドガンを手にする。

以前のGNソードIIブラスターのような長距離射撃の装備ではないにしろ、少なくとも射撃の練習にはなるのだ。

両腕を構え、

「さーて……うまく当たれよ……俺の先読み……ッ!!」

相手が近づいてきたところで、引き金を引く。

「うおっ!？」

「やればできるじゃねえか……ユウ」

誰よりも一番ユウ本人が驚いてしまったが、きちんとその銃弾は相手に命中した。

被弾し相手が怯んだところで、ビームサーベルを引き抜き接近する。

これで、勝利は目に見えた。

何日も何日も。用事がなければほぼ毎日のように、ユウはガンプラバトルを楽しんでいた。

不在の日もあったものの、大半はアシストとしてヒロもいた。

射撃に関しては未だ納得はいかないものの、度重なる戦闘によって、最初と比べると随分と精度が上がっている。

まさに、順風満帆といった感じであった。

「ウチヤマ、今日暇か?」

日の暮れ始め、ヒロは友人に声をかけられた。

「悪い、先客だ」

「まあ薄々気づいていたさ、弟さんとガンプラバトルだろ? 人気だよ

なあ」

「他人事みたいだな、なんか」

大学の門を抜けると、ヒロはいつも駅まで歩きになる。

そしてそれは、その友人も同じであった。

即ち、一緒に帰るというわけだ。

「俺はしたことないからなあ、ガン普拉バトル。昔からの付き合いがある友達がやっつてるみたいなんだけど」

「推されてるのか？」

「いや全然。推されてるのはガンダムAGEだけだな。せつかく作ったガン普拉、壊れたら大変だからって」

ヒロはその友人のことは知らない。

それでも、その気持ちは嫌というほど理解できた。

「……そうだよな、壊れたら……大変なんだよ」

「でもやっつてるんだろ？弟さんと」

「なんだかんだで、結局楽しいんだよ。自分が作ったガン普拉が動くのって。矛盾してると言われたらそれまでだけどさ」

「そういうものか」

「そういうもん、だ」

ヒロは少しだけ自慢気そうだった。

「お前も、いつかわかるようになるかもな。カツラギ」

「興味自体はあるからな。いつか手を出すかもしれない」

カツラギ。

それがヒロの友人の名であった。

「なんなら、今から一緒に来てみるか？アイツはすげえぞ」

「はは、凄い自信だ」

「当然」

ヒロはまたしても自慢気だ。

「……駅間で人身事故のため、列車に大幅な遅れが発生しております……」

「……あれ、電車遅れてるのか」

「本当だ」

ホームの電工掲示板を見て、ヒロとカツラギが呟く。

「ユウに連絡しておかないとな……今日は先に始めておいてくれ……つと」

「マジか、大丈夫かな」

届いたメッセージを見て、ユウが呟く。

「先やつておいてつて言われたし、とりあえず入るか」

オーツカ模型の駐輪場にいたユウは、ひとまず店内に入る。

陳列されたガンプラに惹かれつつも、目的の筐体へ向かった。

そこには、何やらいつもと違う雰囲気広がっていた。

バラバラに裂かれた機体。

細かく分解された機体。

頭を抱えたデューラー達。

一つの筐体をそんなものが囲んでいたら、誰でも異常だと感じるであらう。

「何だ、えらく荒っぽいのがいるのか……？」

もしかすると、このときのユウは絶好調だったために多少調子に乗っていたのかもしれない。

ユウはそこに一人立つデューラーの相手をしようとした。

「……気を付けろ」

「え……？」

踞っていた一人が呟いた。

「奴は……ただ者じゃない……」

ただ者じゃない。

その言葉を聞いて、ユウはますますスリルを感じてしまった。

そんなに強い相手なのか。

逆にここで勝ってしまえば――

「――めっちゃかっこいいでしょ」

ユウは立ち止まることなく、立ち位置についた。

さあ、相手はどんなデューラーなんだ。  
フードを深くまで被った男がカードキーを差し込むと、その相手の  
情報が現れた。

「なるほど、勝率8割……なかなかだね」  
イメージ通り、とんでもない奴だ。  
だが、

「こつちだって……!」

ユウは勢いよくカードキーを差し込んだ。  
そう、ユウは現状無敗である。

度重なるバトルの中でも、(危なっかしいところは多々ありつつも)  
確実に勝利を収めてきたのだ。

そう易々と、負けるつもりはない。

「Yu's Mobile Suit

Apollon Gundam

VS.

013's Mobile Suit

Providence Gundam」

相手の機体はプロヴィデンスガンダム。

「機動戦士ガンダムSEED」においてラスボス機体として登場した、  
劇中最強の機体のひとつだ。

屈強たるそのオーラに、ユウは怯むことなく立ち向かう。

「さあ……いくぞ」

ひんやりとした金属製のグリップ。

ああ、これだ。この感覚がたまらなく興奮をそそる。

「ウチヤマ・ユウ、アポロンガンダム……行きます!!」

円形の台座に置かれたガンプラグが、ふわりと浮き上がり、ホログラ  
ムで形成されたバトルフィールドに突入する。

そしてそれは相手も同じで。

「……」

何も言わず、ガンプラを置く。

メモリーカードのようなものを筐体に入れるのが見えたが、気のせいだろうか。ユウはそう思った。

ニヤリと口角を上げた相手が、グリップを動かす。

ツインアイが光を放ち、アポロンと同じくバトルフィールドへ突入した。

紫色の宝玉が光る指環が、ユウの目を惹く。

「あの指環って……」

どこかで見た記憶があるが、どうだっただろう。

しかしそんなこと、今はどうだってよかった。

とにかく目の前に、相手がいる。

決闘が、迫っている。

ニヤリと笑ったのはユウも同様であった。

「へへっ……ちようどいいよ。こいつの強さを試せるいいチャンスだ」

バトルフィールド内に侵入したアポロンは、これまでとほんの少しだけ様子が違った。

ハンドガンが内蔵されていたサイドアーマーのうち左側に、巨大な刀の鞘がマウントされていたのだ。

ついに完成した専用太刀。アポロンガンダム、実質の第三形態。初陣にふさわしい戦いにしてやる。

「READY?」

見慣れた表示。

覚悟もいつしか楽しみになっていた。

「BATTLE START」

ついに始まった戦い。

ユウの性格上、真っ先にアポロンを相手のもとへ走らせる。

一方のプロヴィデンスは全く動きを見せない。

「それじゃあただの的でしか——」

勢いをつけてリアアーマーから引き抜いたビームサーベルは、予期せぬ方向からのビームに突如貫かれた。



「何……ッ!?!」

全く想定のしていなかった出来事。

焦りを隠せず、ひとまず機体を後ろへ下がらせる。

地上設定のステージであるのにも関わらず、無線のドラグーンが、浮遊していた。

「あり得ないでしょそんなの……」

アポロンガンダムソードビットは、ナラティブガンダムと同様、内部に切り離し可能なコードと推進器が搭載されている。

しかしながら通常のファンネルやドラグーンは、地上ステージでは使用できないはずだ。

では、どうして……?」

「いいよいよよ……そんなじゃこっちも……!」

背部バインダーの上半分を切り離し、コードを尾にして射出する。ソードビットとなったバインダーが、プロヴィデンスのドラグーンへ一直線に向かった。

しかし今回の場合はサポーター不在のため、自動操作になる。マニュアル操作と比べると精度はやはり落ちるのだ。

ドラグーンはビットで対抗させつつ、アポロン本体は今一度加速する。

「オールレンジ攻撃は封じたんだ……だから戦えッ!!!」

アポロンがそつと鞘に手をかける。

同時に相手のプロヴィデンスも、複合兵装防盾システム「MA-V 05A」の先端からビームの刃を形成する。

ビーム対実体剣。

マトモに切り結ぼうとするとビームに焼かれて溶けそうなものだが、

なんとそれは、見事なつばぜり合いをやって見せた。

「驚いたか……対ビームコーティングを施した、こいつ専用の刀に……ッ!!!」

あろうことかその太刀は、ビームサーベルの刀身すらも切り裂いた。

そのままの勢いで相手を真つ二つにしてやろう。

ユウはそう決めたが……

「こつちは……固すぎるー!」

その装甲の強度は、明らかに通常のMSのそれではなかった。

製作の際に、パーツ一つ一つの厚みを増しているのか。

何て呑気に考えていると、相手のビームライフルから至近距離で射撃を受けた。

「うあっ……!?!」

久々の被弾。

ソードビットのプラットホームの片側が損傷した。

しかしそれだけならまだ――

「しまっ……!」

再びの多方向からの攻撃。

ドラグーンはソードビットになんとかさせていたはずだが……

「……何だこれ」

ユウが見たもの。

それは攻撃によって落ちるのではなく、突然グニヤリと形を変え、無惨な姿となって落下するビットであった。

「さっきから全部全部……おかしすぎるでしょこれ」

奴はただ者ではない。

その言葉に、一切の嘘がなかったことがわかる。

相手は明らかに、異常だ。

ビームを展開しながら接近してくる大型のドラグーン。

左前方にそれを確認したユウは太刀を左手に持ち変え、ぐつと飛び上がった。

「そろそろ切らせてくれ……アポロンガンダムッ!!」

大きく振りかぶり、空中で斬り込む姿勢をとる。

が、急加速してきたドラグーンが左腕に突進。

太刀を手放してしまうと同時に、左腕がひしゃげてしまった。為す術もなく、そのまま墜落するアポロン。

ここで言う為す術もなくというのは比喩でもなく、事実であって。「……!?おい何だよ、何で動かないんだ!？」

まだ動けそうな状態であるのにも関わらず、アポロンはこちらの操作を受け付けなくなってしまった。

「つていうか……なんか暑くないか……?？」

筐体が明らかに熱を発している。

どう考えても普通じゃない。

「こんな戦い、どうかしてるに決まってる……。一回中止を——」

ディスプレイ上のメニュー項目。

それを開くために、ユウは何度もタッチするが、

「……リリースしてる!？」

機体だけではなく、そもそも筐体自体が操作を受け付けていない。

……否。

相手のプロヴィデンスは、着々とこちらへ向かってきているのだ。

つまり、自分の操作だけ受け付けていない、ということ。

考えられるのは……

「相手の意図的な……?……?あつ」

『最近変な輩がこの辺のGPD筐体設置店をうろついてるって噂があるんだ。一応気を付けてな』

「あれってまさか………ッ!!」

ふと思いつき出される言葉。

間違いなくこいつのことだ。

そう思うとユウは、相手に対して徐々に憎悪の感情が芽生え始めた。

それは自分が理不尽に攻撃されていることに対しての、半ば八つ当たりのようなものでもあった。

「動けッ!!言うこと聞いてくれよ!!負けるにしたってもつとあるだろ

!？」

どうにかならないものかと、目に映るものをとりあえず動かしてみ  
る。

「納得いかない……戦うなら正々堂々じゃないのか……?この……ツ  
!!」

手元のグリップを思いきり引く。

引きちぎってしまうのではないかというほど。

すると、

「あ」

「\*\*\* STOP : 1 x 3 0 5 7 3 1 8 A ( 0 x 1 0 4 3 7 9  
4 3 )

」

突然ディスプレイに現れたのは、真つ青な画面だった。

「……嘘だろ」

文字通り為す術がなくなったユウ。

筐体の熱からか、心なしかバトルフィールドが赤くすら見える。

ゆらゆらと歩き寄るプロヴィデンス。

ああ、そうだな。

こんな理解の及ばない負け方をすれば、今周りにいる人達のように  
もなる。

ユウはそんな彼らの気持ちが変わり始めたのだ。

プロヴィデンスの足音。

ここで終わりか。

迫る足音。

調子に乗るとすぐ終わってしまうな。

誰かの足音。

そう思いかけたユウ。

いや、違っただろ……!?

「俺本当は負けたくない……絶対こんなのに負けたくないんだよ……  
!!!」

思いきるに思いきれない状況。

誰かがいれば。

一人じゃなければ。

誰か……誰か……!!!

「!?」

射撃と爆発の音。

ふと顔を上げる。

「ガン……ダム……?」

白を基調とした、ベーシックなトリコロールカラー。

四本のブレードアンテナ。二本のビームサーベル。

ビームライフルと赤いシールドを装備した機体。

それまでそこにいなかったガンプラが、確かに、そこにいた。

「……よく持ち堪えてくれた、ユウ」

「その声……?」

ひどく落ち着く、聞き馴染みのある声。  
心の底からきつと待ち望んでいた声。  
自分の立ち位置の真横。

普段ならサポーター用として現れる場所。

そこに立っていたのは、紛れもなくヒロだった。

「兄ちゃん……!?!」

「遅れて本当にすまん、戦えるか?」

「え、あ、あのっ」

ユウは状況の整理が未だ追い付いていない。

「バツ……!?!何したんだこれ!?!」

「お、俺だってわかんないけどさ……!!とにかく動かなくなってる……」

「つたく……よいしょッ!!」

ヒロはユウ側のディスプレイを力を込めて叩いた。

なんと表示が復旧したのだ。

「いつの時代の家電だよ!?!」

ツツコミを入れる余裕が生まれたことに、少しだけ安堵を覚えるユウ。

とはいえ、

「……聞きたいこと、山ほどあるんだけど」

「全部終わってからだ。わかるな?」

「……うん」

まずは、目の前の脅威を退けなければならない。

「さあいくぞ……プロメテウスガンダムッ!!」

ヒロの呼び声に呼応するかのように。

久々の戦いを喜ぶかのように。

プロメテウスガンダムの瞳は、緑を放った。

## 第四話 真実、そして邂逅

「さすがにこれほど時間かかると、もう既に一戦ぐらいは終わってそうだな」

なんとか復旧した列車に乗り、最寄りの駅でヒロとカツラギは下車する。

「そうか……今からではもう遅いな。どこかで少し休憩してから向かうか?」

人身事故ということもあり、かなり時間をかけて到着した地の空は、もう既に日が落ちていた。

そんな空のように。

ヒロの表情は、だんだんと暗くなっていく。

「……いや、急がないといけないかもしれない」

「どうしてだ?」

「あいつ、普段はメッセージの返信とかやたら早いんだ。でもこれほど時間が経ってるっていうのに既読すら付かない」

「それがどうかしたのか?」

「マズいかもしれないんだよ……ッ!!」

仕事を終えた会社員達がうろつく改札口を、ヒロが全速力で駆け抜ける。

その後ろを、人の波をかき分けるようにカツラギも追いかける。

「どうしてだウチャヤマ?単に苦戦してるとかそういうのじゃないのか?」

「そうじゃないかもしれないんだ……。可能性が、あるんだ……」

赤信号に捕まってしまうヒロ達。

マズいかもしれない可能性。

ヒロにはそれが、何となく察せられたのだった。

『変な輩?』

『そうそう、なんか今日対戦した人に言われたんだ』

『詳しいことはわかんないけど、なんか危なげっぽいよ。あくまで噂

だけどさ』

いくつか見当がつく。

いつしか、ユウは言ったのだ。「変な輩が現れるらしい」と。

そして今までにユウの前に二度現れた、紫色の宝玉の指環を持つ者。

ああ、あれは間違いない。

(くそッ……なんて浮かれていたんだ……？初めからユウには危険が迫っていたじゃないか……！俺だってそれを警戒して……)

思考が脳内でループし続ける。

恐れていなかったわけではない。

いや、むしろ最初から恐れていた。ユウが“それ”に出会うことを。

「いいかカツラギ、今からお前が見るものは真つ当なガン普拉バトルなんかじゃない」

「……何だって？」

「俺は……アイツを助けに行く」

模型店にたどり着いた時に感じたその異常な暑さで、やはり予想は間違っていないかったのだとヒロは確信した。

「……やっぱりか」

「何だこれは……」

ソードビットが、まるで自らの意思かのごとく、空間ごと捻れ曲がる。さながら蜃気楼のように。

そんな光景を目の当たりにし、カツラギは絶句した。

「絶対こんなのに負けたくないんだよ……!!!」

悲痛な弟の声が聞こえる。

「……乱入エントリーしかないな」



躊躇をしている暇はない。

今、この瞬間。

助けないといけない。

俺が――

鞆の中からガンプラを取り出した。

「出番だ……俺のガンダム……ッ!!!」

ヒロはその取り出したそのガンプラを、全力でバトルフィールド上面に向かって投げる。

そして、同時に全速力で走って筐体へ向かうのだった。

「!？」

射撃と爆発の音。

曇り空に輝く一点の光。

そこから飛び降りてきたそれが地面に着地したと同時に、砂埃が一気に舞い上がる。

「ガン……ダム……?」

靄が晴れると、ユウはそれを見て呟いた。

「……よく持ち堪えてくれた、ユウ」

「その声……?」

傷ついてはいたが、アポロンは未だ健在。

そのことにヒロは僅かにホツとした。

間に合ったのだ。

「……聞きたいこと、山ほどあるんだけど」

「全部終わってからだ。わかるな？」

「……うん」

ユウにとっては、あまりにも理解し難い出来事の連続であろう。それでも。

まずは、目の前の脅威を退けなければならない。

「さあいくぞ……プロメテウスガンダムツ!!」

ヒロの呼び声に呼応するかのように。

久々の戦いを喜ぶかのように。

プロメテウスの瞳は、緑を放った。

普通とは到底思えない、紫色のオーラを放つプロヴィデンス。

それに立ち向かうべく、プロメテウスガンダムが一步を踏み出す。

「……気を付けて。この相手、あり得ない動きばかりするし、させてくる」

「だろっな……知ってるさ」

知ってる……？

言葉に少し疑問を覚えながら、やっと復旧したシステムによって機体を立ち上がらせるユウ。

「対抗する術なら……」

こちらを狙って加速を始めるプロヴィデンス。

「ある……ッ!!」

その直線上にいるプロメテウス。

両者の視線が重なる。

互いのモニターに相手を視認させる。

退かず、恐れず。

その足を、強く踏みしめ、勢いをつける。

「危ない——」

——ユウの声と同時に、プロヴィデンスの右腕が落ちる。

「うそ……!?!」

プロメテウスが背部から引き抜いたビームサーベルにより、斬り裂いていた。

「向こうから突っ込んでくるなら、攻撃で受け流せばいいんだよ……!」

この場においてこれほどの適応力を見せるヒロに、ユウは驚きを隠せなかった。

「ほらユウ、ボサツとしてると次が来るぞ!」

「……わ、わかった!」

呆気にとられている間にも相手は動いている。

次に備えるべく、二人は行動を開始した。

しかしながら、ご自慢の機動力をうまく発揮できず、重い足取りとなるアポロン。

「なん……だよこれ……!!」

このまま全力疾走で、敵のプロヴィデンスのもとへ飛び込んでいきたいところではあるが、

「接近戦は無理だぞユウ」

「わかってるよ……ッ!!」

「……今はな」

今は……?」

時間経過によって、状況が改善されるのだろうか。

それよりも先程から、ずっとヒロが何かを知っているような口振りで話していることを、ユウは不思議に思っていた。

「当たれよ……!」

右サイドアーマーのホルダーからビームピストルを取り出すアポロン。

「少しでもいいから、相手の戦力を疲弊させるんだ」

そうユウに伝えたヒロは、プロメテウスをビームサーベルからビームライフルに持ち替えさせた。

相手の戦力を疲弊させる。

ユウの持つのは、出力よりも取り回し重視のビームピストル。これほど極端に出力が低下している今現在、これでは敵の本体にダメージを与えるのは難しいだろう。

それなら。

落ち着いて。

相手の動きを読んで。

目標の動き——止まった！

「兄ちゃんは本体を頼むよ……ッ!!」

背後から再びこちらに向かってくるプロヴィデンスをヒロに任せると、ユウのアポロンは不規則な動きを繰り返すドラグーンに、発砲した。

「了解だ。ならば……」

敵本体に照準を合わせるプロメテウス。

(いいさ、あくまでこれは相手の行動パターンを読むだけ。

読みきつたらあとは——)

「——そのあとは2分でケリつけきつてやるよ……ッ!!」

緑色の光線が放たれた。

その行く先は、プロヴィデンスの頭部。

ビームを掠め、破壊とまでには至らなかったものの、GPDにおいては致命傷である。

「やっぱり直線の動きだけ……。下手なモン使ってる割にただのド素人じゃないか……!」

相手がある程度見切ったヒロ。

すると突如、プロヴィデンスがユウのアポロンの元へ接近する。

「ユウッ!!」

一方のアポロンは、残ったビームサーベルでドラグーンを仕留めきっていた。

「何……!?!」

油断しきっていたユウは、背後に迫るプロヴィデンスに気づかず――

「出力設定4倍！範囲固定!!」

「G—Program起動!!間に合え……ッ!!!」

——プロヴィデンスの攻撃は、アポロンの元へ届かずにプロメテウスのシールドで防がれていた。

「兄ちゃん……?」

この状況で、プロメテウスの機動力が上回ったのだ。

「つは、はあ、はあ………無事か?」

超加速で飛んできた白いボディは、熱で赤くなっていた。

以前のドーベルと同じように。

「……兄ちゃん、それは……?」

ダクトから熱気が一気に放たれ、そのシルエットに陽炎が重なる。赤みを帯びた装甲は徐々に本来の色を取り戻していく。

——と同時に。

「02:00」

プロメテウスのディスプレイにカウントが表示される。

そして、引いていった赤の代わりに、青い光が灯った。

衝撃波と共に立ち上がったプロメテウスは、ゆらゆらと燃える青い炎に包まれている。

ただ呆然と見つめるユウ。

相手のプロヴィデンスも驚いた様子だ。

しかしそれも当然。

「次は俺の……ターンだ!!」

あれほど足取りが重かった先程までとは比べ物にならないほど、高機動の動きをしているのだ。

足を踏みしめる力も強く、勢い良く飛び出したプロメテウスは、後退しようとするプロヴィデンスを逃さない。

「行かせるかよ……ッ!!」

瞬間、背後に回り込んだプロメテウスがドラグーンユニットに蹴りを決める。

バランスを崩したプロヴィデンスにビームライフル先端の剣を突き刺し、動けなくしてから射撃を食らわそうとした。

……が、捕らえられても尚足掻く虫のように暴れたプロヴィデンスに隙を許してしまう。

「01:43」

「チツ……！ユウ!!そっちへ向かったぞ!!」

「……えっ、あ……うん!!」

完全に動きを止めていたユウが改めて操縦桿を握りしめる。

左腕は使い物にならない。機体はうまく動かない。今できる最大限のことは……

『向こうから突っ込んでくるなら、攻撃で受け流せばいいんだよ……！』

相手は目の前。

パワーは足りない。

ならば相手を――

「――利用するまで……！」

膝下のビームサーベルを展開すると同時に重く右脚を片足立ちで持ち上げる。

それだけで、

「っしやア!!!」

相手の脚を股関節ごと切り裂いた。

向こうから蹴られにくる状況を作ったのだ。

「ようしユウ！よくやった」

「へへっ」

ヒロが褒める。

ユウは素直に嬉しく思った。

とはいえ、戦いはまだ終わらない。

筐体の熱は覚めることがない。

額には汗が。

「そんなユウには、お裾分けをしましょう」

「お裾分け……って？」

コマンド操作を実行するヒロ。

そうすると表示されていた「01:i4」の数字が減っていき、「00:37」と変わる。

「……!!これって……」

それと同時に、ユウの目の前のディスプレイにも「00:37」の表示が現れた。

「これで……いつも通りに動けるようになったはずだ。いけるな？」

不思議なことに、先程まで最悪のレスポンスをしていた操縦系が息を吹き返したのだ。

操縦桿の動きになんのタイムラグもなく、すばやい機動をするアポロン。

重い動きをしていた姿は、もうない。

「つしやア!!かかってこい!!」

アポロンの瞳が輝く。

持ち前の運動性能を発揮し、複雑な動きを絡めた全力疾走で敵を狙う。

相手は困惑した様子だ。

「ユウあれだ。この前の戦いと同じ……あそこまで誘い込めばチャンスは掴める」

「……オーケーわかったよ……やってみせるさ」

何かを目に留めた二人が、言葉を交わさずとも思考を共有した。

勝ち筋が、確かに見えた。

自棄に見えるほど闇雲に突進してくるプロヴィデンスを、難なく回避してゆく。

「さっきの通り、もうこいつに攻撃の正確性なんてない。勝手に突っ込んできたときにバイタルエリアを狙んだ」

「バイタルエリア……？」

「100%相手にダメージを与えられる有効範囲だ。相手が避けきれないような致命傷を与えてやればいい」

画面には「00:25」の表示。

何かの時間が迫っていることだけはわかる。ならばすぐに、決着をつけなければ。

「さて……今そっちに行つてやるからな」

右手を腰の後ろに添えつつ加速。

ビームサーベルのグリップを握つたのを確認すると、ちょうど目の前にプロヴィデンスの頭部があった。

「これでも喰らいな……ッ!!」

ギリギリのタイミングで、既に焼けていた敵の頭をビームサーベルで吹き飛ばした。

相手はまだ動く。しかし入れ違つたところでアポロンは何かを拾い上げる。

「00:13」

「ドンピシャだ……これでッ!」

先程手放していた太刀を強く握りしめると、僅かに刀身が熱を帯びる。

そして案の定、相手はこちらに向かつてきた。

「<sup>バ</sup>烈火——」

その熱が次第に炎へと変わった瞬間、その日一番のパワーで、また凄まじい速度で振り下ろす。

「——<sup>スト</sup>閃<sup>ト</sup>ツ!!!」

相手が無闇に飛び込んでくる勢いと、振り下ろされる刃のスピードが合わさつて、抜群の切れ味を發揮する。

その太刀筋が紅く染まりきつた後、アポロンの背後に回つたプロヴィデンスが上下真つ二つに裂けた。

「ん……?」

——その裂け目から、見たこともない物体が確かに見えて。

「N・R・REACTOR……?」

確かに、そう文字が刻まれているように見えたが……爆発に邪魔をされ、はつきりと視認することはできなかつた。



「Battle Ended

Winner

Yu's Mobile Suit      Apollon Gundam

&

Hiro's Mobile Suit      Prometheus Gundam

「プロメテウス……ガンダム」

それが、兄の使う機体の名なのか。

「……ユウ、今の『バーニングストレート烈火一閃』って……」

「い……ッ!?言ってみたかったんだよそういうの!!!いいでしょ?別に」

ホログラムが消えていくと同時に、ヒロは呑気なことを言うてる。

必殺技名を叫んでみたかった……という、ユウのちよつとした夢。恥ずかしいが、一応叶えられた。

「……さて、と」

話を終え今一度、紫の指輪をした相手を睨む。

「……!?」

負けたのが悔しかったのか、状況が理解できなかったのか、真つ二つのプロヴィデンスを慌てて回収し、何やら声を上げながら走り出した。

「あっ!待て!!」

静止を無視し店を飛び出していく。とてもじゃないが、正常な人間とは思えなかった。

「……あの、ありがとう」

「え、ああ………どういたしまして」

ピンチのところを救われたユウは、改めてヒロに感謝の言葉を口にする。

と同時に、数々の疑問が生まれたのも事実だ。

「教えてくれる？いろいろ」

「……わかった、話そう。何から聞きたい？」

まず始めに、駆けつけたヒロが操ったガンプラについて、ユウが質問をする。

そのガンプラの存在。そして、ヒロの過去。

「兄ちゃんさ、何者なの？そしてそのガンプラも」

ユウはあえて、単刀直入に聞いた。

「こいつはプロメテウスガンダム。わかったとは思いますが、俺の愛機だ。……かつてのな」

「かつて……？」

様々な意味を含ませたヒロの言葉を不思議に思っていると、この店の店長が姿を現す。

「……話すのかい、昔のことを」

「オオツカ、さん？」

「……はい。いずれにせよ、いつかは話すつもりでしたから」

どうやら、店長はヒロの過去を知っているようだった。

今まで深くは知らされていなかった事実。それがどんなものなのか、ユウには見当すらつかない。

ただ一つ、わかるのは。

「……」

あまりいい思いをしていなかったであろう表情。

「……俺はかつて、お前と同じようにガンプラバトルに憧れ、挑戦した。お前と同じように、高いトコ目指したんだ」

「ヒロくんは……次も開かれるあの全国大会の……第6回大会の優勝者だ」

「え……」

その事実は、予想もしていなかったことで。

ヒロがガンプラバトルに触れた経験があったであろうことは、ユウ

も理解していた。

しかしそれがどれほどのものだったのか、ユウは知らなかったのだ。

「ま……待ってよ兄ちゃん、なんで俺はそのことを知らなかったんだよ」

優勝したとなると、家族もその取り巻きも大騒ぎとなるはずだ。

8年前とはいえユウは7歳。そのことを覚えていても不思議ではない。

しかしながら、ユウはその事実そのものを知らなかった。

「いつか大きくなって、ユウ自身もガン普拉バトルを始めたとして……もしそれで、ユウも大会で優勝できたら、その時にトロフィーを見せて、驚かせようとしたんだ。ただの思い付きさ」

「思い付き……って、そんな」

「でもほら、『実はずっと近くにいた人が超強いヤツでした』って後になってわかるの、なんかかっこよくないか？」

目を輝かせながら、どこか嬉しそうに語るヒロに、ユウは頷くしかできなかった。

「自分の弟の前で、いつかかっこいい登場をしてみたかった……かっこいい兄だと思われたかった。子供みただけで、それが黙ってた理由のひとつさ」

かっこよくありたいという、単純明快で、真っ直ぐな理由。

それが、かつてガン普拉バトルに熱中していた少年を動かしたワケであった。

「ひとつ……ってことは」

それなら、もっと胸を張ればいい。

想像していたよりも早いネタバラシだったとしても、明らかにかっこいい登場であったし、本人の目指していたものなのではないのか。やはり、他にも理由があるのではないのか。

ユウは、ヒロに視線を送る。

「……ああ、まだあるよ」

砕けた表情が、次第に曇る。

「一度負けたんだ、バトルに」

「……うん」

「おかしなバトルだった……何も出来ずにバラバラにされたんだよ、プロメテウス」

その事がよほど悔しかったのか、今になって熱が再燃してきたのか、声の上擦って聞こえた。

「訳もわからないまま恨み辛みを吐かれて、家に帰ってきて自分の手の中を見たら……信じられないほどに傷つけられたプロメテウスがいたんだ」

「……」

「なんか、そしたらどうでもよくなってき。トロフィーも壊してしまったし、プロメテウスを戦いに出すのもやめて、全部引き出しにしまったんだ」

ヒロは、ガンプラバトルを棄てていたのだ。かつての夢も熱意も、栄光も一緒に。

「……でも、どうしても悔しくてき。完全体に修復してから封印したんだよ。ユウみたく改造が得意だったわけじゃないから、パーツ総取っ替えだったけどな」

しかしその言葉の節々から、プロメテウスへの愛があったことは、確かに感じられた。

だからこそ、昔自分にガンプラを勧めてきたのだろうか。ユウは心のどこかで、そう思った。

「そう……だったんだ」

「ああ。かつこよくありたかったのに、かつこ悪い幕引きをしたのさ。自分の手で」

ヒロのプロメテウスを握る力が、少し強まる。

ユウはそれを、きつちりと見ていた。

「……あの戦いは、僕も覚えてるよ。システム自体に異常が起こっているように見えたね」

オオツカが話に割って入る。よほど記憶に残るようなバトルだっ

たのだろう。

「そうでしたね……恐らく意図的にパラメータが落とされていて」  
「……………ちよつと待って?それって……………」

聞いていると、心当たりしかないことに気がつく。

そう、つい先程まで戦っていた相手がまさにそれだった。

「その相手、指輪してた?」

「……………ああ」

「じゃあ、やっぱりさっきのヤツが……………!!」

予感はず確信に変わる。

そうとわかつていたなら、一発殴りでもすればいいのに。

正当ではない理由で傷つけられるのは、納得できない。

再び現れたというのならなおのこと、自分は許せない。

「待てユウ」

「なんで!？」

「指輪をつけた人間は……一人じゃない。複数人いるんだ」

……………と、ここで新たな事実が飛び出した。

「……………集団ってこと?」

「確証はない……………けど、俺が負けた相手の他にも、あの指輪をしていたヤツはいたんだ」

どうやらヒロ曰く、過去にも何度か挙動のおかしいガンプラと戦ったことがあるらしい。

プロメテウスの特性上、それらは何とか破ってこられたものの、最後に戦った相手には手も足も出なかった……………ということのようだ。

「紫色の指輪をした人間は集団として存在していて、兄ちゃんはその親玉に当たった……………ってことなのかな」

「そう予想されるな」

んん……………と低く唸るユウ。

困ったような表情のヒロ。

この行き場のない憤りを、どうするべきか。

すると静まり返った二人に、オオツカが提案をしてきた。

「……………現象として見るに、あれはどう考えても不正行為——即ちチー

トだ。決定的な証拠を集めて、月一で開催されてる公式の会議に提出すれば……何とかできるかもしれない」

ここで言う『公式の会議』と言うのは、東京のGPD運営本部にて毎月末に一度行われる、ルールや今後の方針等を定める会議のことだ。

普段は特別目立つ事柄はないものの、改善案やルール、機能の追加要望が直接提出されると、後々実装されていったりすることがある。

そしてそれは、不正報告等も同様であった。

「それをしたとして、事態は変化するでしょうか……」

「同様の不正を働いたガンブラが、バトルできなくなったりはすると思うよ」

「……やるだけやってみるなら、無駄じゃないってことですよね」

ユウの言葉に、ヒロが目丸くする。

「ユウ、お前やる気なのか……?」

「うん」

驚いた様子のヒロであったが、ユウの視線によって次の言葉を押し止めた。

知っている。

今のこのユウの目は、本気の時の目だ。

「……他人事って思えないからさ。兄ちゃんは昔やられてるし、俺だって今被害を被った。これまでもこれから、そうして傷付いてしまう人はきつといるでしょ?」

「ユウ……」

「いつも無謀なことばかり……ごめん。でも、どうしてもね」

言い終わってから、ユウは筐体の奥へ走り出す。

「それに……手がかりもないわけじゃないしー!!」

大きく手を振っているユウの元へ二人が駆け寄ると、そこには一枚のメモリーカードが。

GPDの筐体には、映像記録用のメモリーカードスロットが常備されている。ユウはそこを覗んだのだ。

「慌てて逃げてったから、多分回収を忘れたんだろうね。もしかする

とこのメモリーカードから、不正行為をしているのかもしれないでしょ」

「よく見てたな……こんなところ盲点だぞ」

「へへん、たまたまだよ」

自慢気に話すユウに、ヒロは素直に感心する。

「帰ってから解析だな……。任せとけ、こういうのは得意だから」

サムズアップをかまされると、ユウはそこに拳をこつんと当てて返す。

「……いいの？付き合わせちゃって」

「当たり前だ。俺はお前の兄だからな」

いつかユウに胸を張りたかった兄として。

ユウをガンプラへ引き込んだ者として。

かつて敗れた自分のためにも、今戦おうとしてくれている。そんなユウのために。

「全力を尽くそう。一緒にな」

謎多き闇に、二人の兄弟が立ち上がった。

「本当に仲がいいんだな、君ら兄弟は」

一部始終を後ろから眺めていたカツラギは、帰宅しようとする二人と合流し、呟く。

「あ、えつと……この人は？」

「あああれだよ、大学の友達」

「こんばんは。いつもよく話は聞いているよ」

普段からどんなことをヒロに話されているのかはわからないが……少し不安になる。

が、悪い人ではなさそうだった。

「君は、無邪気でどこまでもまっすぐという印象だ。すごくいいものだね、ガンプラバトルとは」

「あなたは、ガンプラバトルをしないんですか？」

「俺は全然……ただ、正直興味は湧いたかな」

そうして少し話をしてから、ユウとヒロは、カツラギと別れた。

ユウは自転車があるため、駐輪場へ向かう。

すっかり真っ暗になった夜空を眺めながら、二人は歩き出した。

先頭を歩くヒロと、後ろで自転車を押すユウ。

五分ほど沈黙していたが、何かを思い出したかのようにユウが口を開いた。

「ひとつだけ、言い忘れてたー」

「何をー？」

テールランプの光と一緒に、すぐ隣を車が何度も通り過ぎて行く。

そんな中、前にいるヒロに、後ろにいるユウに届くように、車の走行音にかき消されないよう、お互い少し大きな声で話した。

「さっき『自分でかっこ悪い幕引きをした』って言ってたじゃんー」

「言っただけど、それがどうしたー？」

三秒の間。

そして、

「でも今日の兄ちゃん、めっちゃくちやかつこよかったと思うなあー！」

「……！」

とびきり大きな声で、ユウは叫んだ。

何も言えず、ヒロは思わず下を向いて立ち止まってしまう。

「……………ほんつとによ……………お前は」

「何ー？」

「いやー何にもないー…ありがとうな」

ヒロは、僅かに潤み霞んだ視界を手で拭った。

コンピュータのスロットに、先程回収したメモリーカードを差し込む。  
む。

「……………どうだった？」

「ファイルは……………お、3つ見つかったな」

素直に吐き出されたメモリーカードのデータを、今一度確認するユウとヒロ。



『A1t—W 013—13.mp4』つてのが一番上にあるが……  
動画ファイルみたいだな。見てみるか？」

ユウは頷く。

ここまでできておいて見ないわけもないだろう。

果たして、どのようなものが記されているのだろうか。

緊張と期待が混ざりながら、カーソルがファイル名のところへ重なるのを待った。

再生開始。

そこに映し出されたのは、ユウもよく見馴れた、ホログラムによって構成された世界。

「……あれ、もしかして普通にバトルの映像を記録してるだけだったり……」

「いや、そのバトルの様子からも、何かがわかるかもしれないぞ」  
しばらく様子を伺う。

デューラー本人の腕と共に、先程戦ったプロヴィデンスガンダムのガンプラが移り込んできた。

どうやらバトル開始直前の映像らしい。

「……あれは何をしてるんだ」

「あれって？」

聞かれたヒロが画面を指差す。

そこには、バックパックのドラグーンユニットを外し、何かを行っている様子が移っていた。

そして胴体の中に、何かを差し込んで……

「N・R・リアクター……!？」

「え、えぬあ……何のことだ？」

ユウが動画を一時停止する。

画面越しでは見えないが、ユウは確かに見た。

切断されたプロヴィデンスの胴体内部に、その文字があつたことを。

「これが……あの現象を引き起こしてる原因かもしれない」

「……マジか」

そう理由付ける確かな証拠はないものの、予想としては十分考え得るものだ。

最後まで動画を見たが、やはり無茶苦茶な戦い方で勝利を修めていた。

残りの二つの動画ファイルも、同様である。

「こういうの記録するくらいガンプラバトルが好きなら、もっとマトモな戦いすればいいのに」

ユウの素直な感想。

わかっている。

そうもできない理由があるのかもしれない。良くないことであつたとしても、力に魅せられてしまうという気持ちも、理解できない訳でもない。

それでも、人間を——他人のガンプラを相手にする以上、それを肯定してはいけない。

そんな気がしていた。

「……あれ、そういえば兄ちゃんさ、『G—Program』ってやつ使ってたよね。あれは何？」

「そういえば話していなかったな……ほれ」

そう言うとヒロは動画プレイヤーのウィンドウを閉じ、何やら文章のようなファイルを開いた。

「う、うわ……何これ」

パソコン関係に疎いユウにとって、それは意味不明な文字列であり、さながら暗号のように思えた。

これが一体何を示しているのだろうか。

「プログラムだよ、俺が書いた」

「ぶ、プログラ……って何の？」

「プロメテウス用のプログラムさ」

今度はブラウザを開き、GPDのサイトからレギュレーションをまとめたページを見せてきた。

「ガンプログラバトルにおける『ガンプラに搭載される特殊機能、特殊モード発動』について」

「これって……」

「ここに一応書いてんだけど、ガンプラに搭載できる特殊システムって、自分で作るんだよ。だから俺が書いたんだ」

トランザムやエグザムなど、既存作品のものも同様であるが、基本的にガンプラの使うシステムは各個人が作ることになる。

プログラムにそれなりに理解のある人間ならば、当然細かく設定を含ませ、オリジナリティを持たせたものを作り上げることが可能なのだ。

もちろん、プログラムなんて出来ない人間は多くいるし、その中でも自分のガンプラにシステムを搭載させたい者も存在する。

そんなデューラーのために、構造が簡略化され、子供でさえ作成することが可能なほどの、プログラムのテンプレートが公式から配布されているというもする。

上記のようなトランザム、エグザム等ならば、条件さえ満たせば無条件でガンプラに搭載することもできる。

つまりは、特殊機能を作ること自体はさほど難しくもないのだ。

しかし、これらを実際に使用するには、運営からの認証が必要である。

基本的にAIによるシステムチェックと認証であるが、幅があるとはいえ許可が降りるまでに数日かかることがあった。

またその審査基準も少々厳しいものとなっており、テンプレートから作成したものはおおよそ申請が通るものの、ヒコのように一からプログラムを書いたものとなると、申請が通らないことが多くある。

ガンプラに特殊機能を搭載するにあたって一番難易度が高いのは、この認証、審査であろう。

「まあわかると思うけど……『ずっとめっちゃ強くなる』とか『負けなくなる』とか、あからさまなシステムは作ったところで弾かれるだけだからな。強力でありながらも、良いバトルをするための力を構築する……そんな“いい”バランスが大事っていうか」

「な、なんかすごいね……ほんとに。何でもできちゃうんだ」

「んまあねえ。こういうのは専門だから」

へへん、とドヤ顔のヒロ。

昔からパソコンをいじり慣れていたのも、今大学で同じようなことをしているのも、ユウは知っていた。

自分には到底出来ないことだ、と心の中で素直に尊敬している。

「それでさ、どういう機能なの?」

「大きく分けて3つあるんだが、まず1つは『機体全体の一時的な出力向上』だ」

「トランザムみたいなの?」

「そ、実際トランザムをベースに作ったからな」

G—Programの1つ目の機能『機体全体の一時的な出力向上』

向上する出力の倍率を任意で定めることができ、倍率によって制限時間が異なる。

制限時間超過後は機体性能が著しく低下し、それは倍率が高ければ高いほど顕著になる。

2つ目は『機体出力の僚機への共有』

1つ目の機能によって増幅させた機体の出力を他の機体へ分け与えることが可能であり、複数機を同時に強化させることができる。

ただし1つ目の機能によって設定される制限時間がさらに短くなるため、ここぞというところでの秒単位の戦いが要求される。

「力の共有っていうのはなんだかいね、オリジナリティもある」

「だろ? 幼いながらよく考えてたもんだよ」

一人で戦うときも、誰かと戦うときも、強力な力を発揮させることができる。

ガンプラバトルにおいて、ここまで頼もしいシステムもそうそうないだろう。

「それで、3つ目は……? どんな隠し球があるの?」

目を輝かせながら——若干食い気味にユウが問う。

しかしヒロは、どこかバツの悪そうな顔で

「……内緒」

と、小さく呟いた。

「え、ええ!?!何で!?!」

「隠し球だからだよ! 必要なときになれば言うから」

今言ってくれてもいいだろう、と思いつながら、もしかすると今言っではいけない理由もあるのかもしれない。……いや、兄ちゃんのことだし、また何かのサプライズのつもりなのかもしれない……などと、ユウはなんとか納得しようとした。ともあれ、結局詳細はわからず仕舞いだ。

「まあまああれだよ! なんにしたって、あの無茶苦茶な野郎共には確実に有効に働くだろう、G—Program」

「そ、そうだね……!!」

華麗? に話をすり替えられたが、G—Programが切り札になるというのは事実だ。

相手のチートによって強制的に性能が落とされるなら、こちらからまた性能を底上げすればいい。それだけのこと。

「ただし……」

「……制限時間を越えれば、確実に負ける……か」

まさに、一長一短と言えるだろう。

「まあ、今俺達にできるのは、次に備えることだ。頑張ろうぜユウ」  
「……うん、もちろん」

目と目で、お互いの言いたいことはなんとなくわかる。

水曜日の夜11時。

ユウもヒロも、決意の目をしていた。

「うん……」

昼の休憩時間。机の上に弁当箱を広げながら、ユウは一人唸っていた。

次に備えること……と一言に言っても、何をどうすればいいのか悩むものだ。

戦いの手数を増やすこと。単純に経験値を積みもつと強くなること。自分一人でもある程度対処できるようになること。

いずれにせよ、戦いをし続ける他ないだろう。今日も学校帰りにバトルをしなければ。

と、ここまで考えてから初めて弁当に箸を付けた。

「……それで、」

「？」

ひとつ、息を吐いてからユウは正面を向く。

「なんで俺の机でご飯食べてるワケ？」

「いつも一緒のみんな、部活の大会で揃って学校に来てないからさ。ヒマなのよね、アタシ」

ユウの向かいには、さも当然であるかのように机の上で弁当を広げているツバキが。

ユウとツバキは先日初めて話したばかりだ。

「ヒマって……まあいいけどさ」

「なんとなく目に入ったから。んね？」

ユウは特に返事をしなかったが、わざわざ拒否する理由もなかったため、一応の了承とした。

「ぼーっとしてんね」

「考え事」

「ガンプラのことでしょ」

「う……」

凶星だ。

「あんま調子よくない感じ？」

弁当箱の白飯を掬い上げ、ツバキが聞く。

こうしていると、意外と箸の持ち方は綺麗だなとか、机に肘とかつかないんだなとか、そんなところに目がいく。

「調子よくないっていうか、ちよっとした問題がな」

「ふーん……」

暫く、静寂が続いた後。

「……ウチ来る？」

「え」

突如ツバキから発せられた言葉は、ユウにとっては衝撃的であった。

同級生の女子の家に。

この自分が。

「それって……!?!」

「それ……って……?」

ユウの目の前にあったのは、彼女の家……というよりも。

「ウチさ、喫茶店やってるんだよね。入んなよ」

そう言われるがままに、ユウはツバキのあとについていき、入店する。

夕方ではあるが、たまたま店内に他の客はいなかった。

個人経営の、小さな喫茶店である。

「コーヒーとか好き?」

「……わりと」

カウンター席に座ると、ツバキはその向かいに立つ。

「そんじゃ淹れるね、800円」

「はっぴゃ……ッ!?!」

自然に手渡される流れだと完全に思い込んでいたユウは、値段を提示され驚愕する。

そして単純に高い。

思わず声を出してしまったのを背に、ツバキは奥へ去っていく。

瞬間ちらりとこちらへ振り返り、

「……冗談♪」

と、笑った。

その事実には安心すると同時に、ユウは不思議とどこかどきりとしてしまった。

「ん、お待ちせ」

カップをカウンター越しにテーブルへと置いたツバキは、こちらを

覗きながらもたれかかっている。

「……なんか悪いな、わざわざ」

「いいよいいよ、なんだか結構な悩み事があつたみたいだし。一杯飲んで、頭の中リフレッシュさせなよ」

昼に少し見せた素振りだけでここまでしてもらおうというのも、正直どこか申し訳ない。ユウはそう思いながらもいただきます、と小声で呟き、コーヒーに口をつけた。

「あ……おいしい」

「ウチヤマくん、苦いのもイケちゃうタイプなんだ」

「まあ一応……昔からよく飲むし。ってか、自分でコーヒー挽けるのは凄いな」

こちらからあまりしつかりと奥の様子は見えなかったものの、かなり慣れた手つきだったように思えた。

「凄いでしょ？よく言われる」

ツバキは得意気な表情を見せ、話す。

「親がこういうのやつてるのもあつて、アタシも教えてもらつてたんだ。たまに手伝ったりもするし」

なるほど、と納得するユウ。

家族の影響で幼い頃から仕事道具に触れる、というのはよくあることだろう。手伝いをするなら尚更だ。

「……うん、本当に凄い」

ごく、と喉を鳴らしてから、ユウはまた感心した。

「……話聞こっか」

「え、」

じつと自分を見つめていたツバキが、不意に投げ掛けてくる。

「聞いてもわかんないでしょ？」

「んーまあね。でもなんて言うかなあ……的確なアドバイスとかが出るわけじゃなかったとしても、ただ思い悩んでることを誰かにほろっと溢すだけで、気が楽になったり、一回落ち着いてまた別のところから物事を見れたりするかもだよ」



遠慮せずに話してみなよ、とツバキは言った。

本人の言う通り、それで何か解決に向かうアドバイスが貰えるとは思えない。

でも、そうやって言ってくれる誰かがいるのは嬉しかった。

怪奇な力を操るガンプラ、またはその集団が現れつつあること。

自分の兄が、かつてその力に敗北していたこと。

今、自分がそれに立ち向かおうとしていること。

そのためにどうするべきかを考えていること。

いざ話し始めると、意外となんでも口にしてしまった。

できるだけ、詳しくなくても伝わるように話を噛み砕きながら話すと、ツバキはうんうんと静かに話を聞いてくれた。

「なんだかおつかない話だなあ」

「まあな、」

無謀だと思われただろうか。それでも、一度やると決めたならそこは曲げたくない。

「……でも別にさ、難しく考えることはないんじゃない?」

どういうこと、と聞くより先に、ツバキは話を続ける。

「お兄さんのために頑張ろうとしてるってことは伝わったからさ。ウチャマクんの思ってる通り、練習していろいろできるようになっていくのがいい……と思う」

「……やっぱそうだよな」

小難しいことを考えても仕方ない。

地道に進んでいって、その中で大きな収穫を探すのが良いのだろう。

「でも、多分もつと大事なのは“思い”だよ」

「……根性論?」

「ち、違うつてば! 思いが強ければ強い方が、モチベーションに繋がるでしょ? そしたら結果も追い付くんじやないのかなあって!」

「結局根性論な気もするけど……」

しかしながら、そう言われるとなんとなく納得はできる。

自分のやる気は、自分の行動に直接作用する。

何においても自分次第なのだ。

「……やらなきや、俺」

「ん、その気持ちで十分だと思うよ」

サムズアップを見せつけてくるツバキ。

それを見てユウは、微笑んだ。

「もしかして、普段から誰かの話聞いてたりするの？」

「ん、どして？」

相手の話の耳を傾け、相手に寄り添って言葉を返す。

ユウはなんとなく、ツバキがそれに慣れていく感じがした。

「話してて悪い感じがしなかったっていうか……第一、昼間の俺を見ただけでここに連れてきてくれたし」

「おせっかい……だった？」

「いや、世話焼きって感じ。当然いい意味でな」

ユウは今一度カップに口をつけようとしたところで、もう既にほとんど飲みきっていたことに気づく。

「……へへ、わかる？よく言われんの。友達思いなんだよアタシ」

「それ自分で言うのか……」

……いいやつだとは思っているが、どこかたまにムカつく。

だが、嫌な感じもしない。

知り合ったばかりではあるが、かなり心を開いてしまっている自身に、ユウは驚いた。

しかし、そりゃあ誰かに頼られるよな。そう思った。

店の奥から誰かがやってくる。

「あつ、お兄ちゃん……帰ってたんだ」

「ん、ああ」

背の高い好青年といった出で立ちで、ツバキは彼のことをお兄ちゃんと言った。

そのまままっすぐ一直線に、ドアの方へ向かっていく。

「……」

「……………」

振り返ったその青年に、ユウは何故かまじまじと見つめられる。目を合わせているのも気まぜくなり、軽めの会釈。

「……ふふっ、ツバキと仲良くしてやってくれてありがとう」  
すると青年は爽やかに笑い、再びドアと向き合った。

「まさか家に男を連れ込むようになるとは、な」

「お……ッ!?!」

一言を残し、青年は立ち去っていく。

一方のツバキは――

「そんなんじゃないし……!!」

――大層、不服そうだった。

「……あの人は?」

「アズマ・マナト。アタシのお兄ちゃん」

「いたんだな、お兄さん。仲良さそうじゃないか」

内容はともかくとして、からかい合ったりできるならそれは仲の良い兄妹の証拠ではないだろうか。

ユウも、ヒロとそうしているように。

「……そう、見える?」

「え、」

ユウには何か、含みを持たせているかのように聞こえた気がした言葉。

だが彼女のことだ。特に意味もないんじゃないか。そう思ったユウは、軽く頷くのを返事とした。

「……そっか!」

思った通り、何事もなかったかのように笑顔で返される。

ユウはそのことに安堵し、そして飲みきったカップをツバキへ渡した。

「ご馳走さまでした」

「お粗末様でした」

それから軽く話し、感謝の言葉を述べた上で、ユウはガンプラバトルの練習をしてくる旨を伝える。

「ファイトだぞ、ウチヤマくん!!」

ツバキの力強い応援に見送られながら、ユウはいつもの筐体へ向かうのであった。

「ッ……!!悔しいけど、単純に相手が強いなあ」

その日の相手は手強かった。

相手の駆るガンプラは「ビルドバーニングガンダム」。

ガンダムビルドファイターズトライにおける主人公機であり、近接格闘に特化した機体だ。

……そう、機体コンセプトがアポロンとおおよそ同じとも言える。

「近い近い……ッ!!」

普段なら自分から相手に接近したがるものの、逆に相手から近づかれると慣れない。

だが、ここで慣れなければいけない。

逃げてばかりいちゃいけない。

ユウにはわかっていた。

「悪いが次は俺の——」

右手は鞘に手をかけており、

「——ターンだ……ッ!!」

兄のセリフを真似したユウはそのまま太刀を引き抜きつつ、回避行動にブレーキをかけ、踏み込む。

受けの態勢から、攻めの態勢へ。

ビルドバーニングの拳が空虚を突く。

その瞬間の動きのロスを、ユウは見逃さない。

「今……!!」

ユウ命名、バーニングストレット 烈火一閃。

赤熱化し炎を纏った白銀の刃が、ビルドバーニングの曲面を形作つた腰を切り裂く。

「よ、よし……」

正直ヒヤヒヤしていたユウだが、なんとか勝てた。

相手からの押しが強い場合は、自分からも攻めればいい。

そうしていれば必然的に、相手の弱い“隙”が見えてくる。  
ユウは地道に、着実に、戦いのためのスキルを獲得していった。

数日後。

「おかえり、兄ちゃん」

「おーっす、はいこれ新発売」

「おおっ!!最高だよ……」

金曜日の夕方、帰宅したユウとヒロは机の上にプラモデルを広げる。

「それ、もうすぐ始まるテレビシリーズの機体だよね」

「主役機だからな。確保しない理由はないだろ」

ニヤリと笑うヒロを横目に、ユウは自分の作業を続ける。

何度か続いたバトルによってすり減った関節や装甲を、修復させていたのだ。

ヒロは一通り箱の中身を確認したあと、一度箱を閉じ、しまう。

「ん、作らないの?」

「いや、作ってもいいんだけどさ……久しぶりに改造したくなって」

ユウは内心驚いた。

プロメテウスガンダムという、改造の結果自体は目になっているものの、ヒロ自身がガンプラを改造しようという姿は、これまで見たことがなかったからだ。

「どしたの?急に」

「なんか、突然頭に浮かんだことがあってな……手を動かさなきゃダメな気がしたというか、いてもたってもいられなくなったというか」  
そう言うとヒロは、ガンプラのジャンクパーツを集めた箱を取り出してきて、早速漁り始めた。

取り出しているのは……ライフルのバレル?

「ユウさ、最近すごくバトル頑張ってるだろ」

「えっ、まあその……うん……?」

頑張ってるか頑張ってるかを自分で量るのは難しいが……頑

張っていないというのも、嘘になるかもしれない。

疑問形になりつつも、ユウは答えた。

「やっぱりユウのそういうところ見てるとな、俺も頑張りたい気がしてくるんだ」

細々としたパーツを集めながら、ヒロが続ける。

「言つたろ？一緒に全力を尽くそうって。だから俺は、ユウのサポートを全力でやるって決めた」

「兄ちゃん……」

「俺とプロメテウスが先制攻撃、それ以降のアポロンの後方支援、そしてG—Programによるエネルギー共有。例のチーター野郎が出てきた場合は、この3つを担わせてもらうぞ。問題ないか」

ヒロは真剣な眼差しで、ユウと目を合わせた。

答えは、言うまでもない。

「……うん、任せる」

ありがとう、と小声で呟いたのは、ヒロに届いただろうか。

「さてと……そんじや俺もやるぞ、改造を」

イスを少し横にずらし、ヒロが机を使うスペースを設けるユウ。

その日は一晩中、ユウもヒロも、ガンプラ改造に夢中になっていたのであった。

いつも通り、メッセージのやり取りで待ち合わせをする、学校帰りのユウ。

模型店の外で待ちぼうけをしていたが、改めて以前にも目にしたポスターを見つめる。

「全国大会、か」

実は先日、ユウはヒロと共に、最寄りである第1ーブロック地区予選にエントリーしてきたところであった。

興味が沸いていた舞台が、近づこうとしている。

自分は、果たして大丈夫だろうか。

不安は間違いなくある。だが、それだけではないとも思っている。

微かな自信。数多の強敵と戦える希望。確かな興奮。

その全てが、ユウを掻き立てる。

アポロンガンダムを、一番かつこよくさせる舞台に連れて行ける。

「……!!!」

想像するだけで、そわそわした。

「悪い、待たせ……た？」

「……ん、あつごめん」

到着したヒロが、ぼーっと立ち尽くしているユウを見て戸惑う。

「何かあったのか……？」

「んーん、何にもないよ。行こっか」

ユウはヒロを引っ張って店内へ入っていく。

この日はヒロの腰からも、ガンプラのホルダーが提げられていた。

「さて……どこで戦おうかな」

筐体に囲まれながらユウが呟く。

初めから戦う気が満々なのは、理由があつて。

「……地区予選に出るには、ある一定数以上、バトルに勝利した実績が必要……だったよね」

「その通りだ。例の集団を叩くことだけに目がいつてると、ノルマ達成できなくなっちゃうぞ」

「大丈夫だよ兄ちゃん。向かってくる相手みんなに勝てばいいんだから」

「フツ、その意気だ」

「ここ数日、ユウは幾度となくガンプラバトルの経験を積み重ねてきた。

たとえ強力な敵が立ちはだかったとしても、簡単に負けるつもりはない。

「……つと、どうやら待ち構えているデューラーがいるぞ」

「行くよ、兄ちゃん」

「ああ……どこまでもついていつてやる」

筐体の前で仁王立ちをしていたのは、これまでと違って二人。

しかし、ヒロとしては好都合であった。

N・R・リアクターを用いた違反行為を行う相手に対し、乱入をしかけて二人で戦うことはまだしも、普通のデューラー一人に対して、ユウとヒロの二人でかかるのはいささか腑に落ちない。

逆に、最初から相手が二人ならば、二対二の構図になるため、気兼ねなく戦うことができるのだ。

「……うまくサポートできるか、試してやりたいからな」

それにヒロのプロメテウスガンダムは、数年ぶりに新規武装を搭載しているのだ。

腕試しなら、誰だつてしたくなるはずだろう。

相手と目を合わせ、ユウとヒロはカードキーを筐体に差し込む。

「Y u ' s M o b i l e S u i t

A p o l l o n G u n d a m

&

H i r o ' s M o b i l e S u i t

P r o m e t h e u s G u n d a m

V S .

K e n j i ' s M o b i l e S u i t

F a w n F a r s i a

&

J u n ' s M o b i l e S u i t

X E K U - E I N S ( 2 n d t y p e a r m e

d )

どういう訳か、相手はなかなかアンバランスな組み合わせに見える。しかし、そんな油断が隙を生むのだろう。

そうさせてはならないとユウは心の中で、自らを戒める。

ホログラムが広がり、バトルフィールドが形成されていく。

相手の二人が機体を発進させていくのを見てから、ユウとヒロも、目の前の台座に各々のガンプラを乗せた。

ヘパイストス。そう名付けられた、中遠距離射撃用複合兵装を右腕に装備した、新たな装いのプロメテウスガンダム。



「ウチヤマ・ヒロ、プロメテウスガンダム出撃する……ッ!!」

何度も戦いを経験してきたことで、強い愛着が湧きつつあるアポロガンダム。

「ウチヤマ・ユウ……アポロガンダム！行きますッ!!」

二つのガンプラが肩を並べながら浮き上がり、半球状のバトルフィールドへ、直進した。

ステージ設定は森林。

開けた土地も少なく、視覚的に障害となりやすい木々が満ちている。

「READY?」

ふと思い返すと、バトルのはじめからプロメテウスと一緒になのは、今回が最初。

ユウはそれに気づくと同時に、この右隣の存在がやけに頼もしく感じた。

相手は、一体どう攻めてくるか。

第二種兵装のゼクアインを後方に配置し、フォーンファルシアが直進してくるか……これだ。

相手は恐らく自分達と同じ手を使うだろう。そう確信したところで――

「BATTLE START」

――バトル開始の無機質な効果音が、耳に届いた。

辺りを覆い尽くす木々の全長よりも、MSの全長の方が僅かに高く、一応の視界は確保できる。

……とはいえ、そこに映る情報量は僅かであった。

「まずは敵を炙り出す。位置が特定でき次第、急行するぞ」  
「わかった」

胸を張って堂々とする、数年振りのガンプラバトル。

ヒロはどこか、清々しい気持ちであった。

握りしめた操縦桿が、プロメテウスに命令をする。

「へパイストス、レディ」

勢いよく飛び上がったプロメテウスは、その森の全貌を目にする。索敵モード——熱源の移動は、うまく感知できなかった。

ならば……！

GNソード宜しく折りたたまれていたへパイストスのバレルが、前方を向くように展開する。

回転移動後、本体とバレルがドッキングすると、巨大なスナイパーライフルへと変貌を遂げた。

連続射撃モード——一点を狙わず、高出力のビーム砲撃を放ち続けることで、周囲にビームを撒き散らすモード。欠点として、エネルギー消費があまりにも激しいため、複数回の使用は考慮されていなかったりする。

「こいつはとびきりのオ……」

ヒロが手元のウインドウ操作でそれを選択すると、銃口にエネルギーが充填されていく。

「……威嚇射撃ってやつだ……ッ!!!」

桃色の太い光線が地表を焼く。

そのまま機体は上空で旋回を始め、次第に射線は円を描いた。

炎と炎が一本に繋がった後、大爆発が巻き起こる。

射撃を終え、元いた場所に着地するプロメテウス。

「す、すっごいけど……敵に見つからないの?」

「それも一つの作戦さ」

「作戦……?」

ユウの疑問に対して、ヒロは人差し指を立てて得意気に答える。

「もしかしたら、敵がうっかり射撃に当たってくれるかもしれないし、当たらなくて逆にこっちが見つかったとしても、相手は向かってくるだけ……。そうなれば、こちらからお迎えに行く手間も省けるっつてもんだろ?」

へパイストスのバレルを元の形態に戻し、低出力モードで前方を撃つ。

木々の間に、道ができた。

「あと、一か八かではあるが……ビームで森を円形に焼けば、その円の中に敵がいた場合、簡単には外へ逃げられなくなる。俺達と一緒に、嫌でも中心に集まってくるっていう算段さ」

「……もし敵が円の外にいたら？」

「離脱できなければ俺達が燃えておじやんだ」

「ほ、本当に一か八かなんだね……」

思ったよりも大胆な作戦を考えるなあ……とユウは苦笑いをした。

……とはいえ。

「そういうの、嫌いじゃないかも」

「だろ？」

苦笑いは、本当の笑いに変わる。

口角が自然と上がる。ニヤつく。たまらない。

この瞬間がまた、楽しいと思えた。

「お膳立てはさせてもらったんだ。先導して、道を切り開き続けるのはお前の仕事だぞ。ユウ」

「わかってるよ……任せて」

待ってましたと言わんばかりに、ユウは操縦桿を強く握り直す。

スラストーが火を吹くと、アポロンは加速し、森の中を進み始めた。

プロメテウスも、アポロンの後ろに続く。

「うわ……すごいな」

敵の位置を探りつつ移動をする二機。

辺りを囲む炎が、徐々に広がっていくのが、確かにわかる。

「どう？見つかった？」

「いや、ちつとやらかしたかもしれないな」

「え、何が……？」

つい先程まで得意気だったヒロの態度が、目に見えて変わっている。

「……木燃やしまくったせいで、熱源の探知がアテにならない」

「何やってんの?!?!」

円形に照射されたビームにより燃えた地表と、敵機体の反応が混同

するようになってしまった。

燃え広がるのもヒロの想定以上に速く、機体の移動と区別が少々つきづらい。

「……仕方ないなあ。森より機体の方がギリギリ背高いんでしょ？ 視覚的に見つからないかな」

「やってみる。あとそのまま直進すると炎にぶつかるとぞ」

「ってことは……反対方向へ向かうよー！」

相手が炎を避ける行動を取っていると仮定すると、しばらくは燃え広がらないであろう円の中心方向へ向かうのが正解だ。

スラスターによるエネルギー消費を軽減させるため、アポロンは地に足をつけ、走り出した。

それでも、十分な速さだった。

「右斜め後方!!ゼクアインだ!!!」

「後方……!?!」

かかとのブレードを展開し、急ブレーキをかける。

そのまま旋回し、加速の方向をゼクアインへ向けると、アポロンはハイジャンプをした。

「やっと思つけた……今そっちへ行つてやるツ!!!」

敵機捕捉。

すかさずリアアーマーからビームサーベルを引き抜き、その勢いのまま相手を切り裂こうとする。

……が。

「んな……ツ!?!」

アポロンの突撃は、突如現れたもう一機によって防がれた。

「そんな……一体どこから!?!」

「……頭頂高か」

「何……?」

改めて、敵機との邂逅を果たすアポロンとプロメテウス。

「フォーンファルシアの頭頂高は16m……小柄さを活かして、この森で気配を消してきたんだろう」

「盲点だった……ついゼクアインばかりに気を取られて」

話している間にも、ゼクアインがスマートガンを構え出す。

「反省するのは後だ……ゼクアインの射撃は速いぞ！次の手を打てッ！」

「了解ッ!!」

スマートガンからのビームを二機同時のジャンプで避けると、プロメテウスは後退、アポロンは前方へ加速をかけた。

フォーンファルシアのバトンがビームを纏い、それらを細かく放つてくる。

アポロンはそれを全て回避……することができなかったものの、瞬間的にビームシールドを展開することで事なきを得た。

手に持っていたビームサーベルを起動させ、刀身を出現させる。

逆手持ちをし、相手へ突撃姿勢を取ると、スラスター最大加速でフォーンファルシアに飛び付く。

「……何ッ!？」

しかし、ビームサーベルは相手に防がれた。

というより、相手によって減衰させられている。

「電磁装甲か……厄介ではあるが……ッ!!」

当然、ビーム兵器が全てではない。

一度ビームサーベルをリアアーマーへ戻そうにも、腕をがっしりと掴まれており制御が効かない。

体格の割にパワーがあるなあと敵ながら感心しつつも、自慢の脚で

相手を蹴り飛ばす。

ビームサーベルを戻し、改めて太刀を取り出すと、切っ先を相手に向けて威嚇した。

「さて、お前から動くか、俺から行くか……」

対するフォーンファルシアは、バトンに纏うビームをしなやかさを持ったりボンのように変質させ、こちらを見つめている。

「なら……俺から行くぞッ!!」

少々後退したプロメテウスは、予想外の動きを見せるゼクアインに

驚かされていた。

「おま……ッ!!ビームサーベルで突つかかってくるとか聞いてないぞ!?!」

第二種兵装ということもあり、てつきり後方支援に徹するかと思っていたが、全くもってそんなことはなかった。

「悪いがお前ばかり相手に……してられねえッ!!」

ヘパイストスのバレルを展開し、通常射撃モードで一発お見舞いしてみせる。

しかし直撃させたのはゼクアイン本体ではなく……その足元。泥と砂埃を巻き上げらせ、目を眩ませた。

ビームリボンの不規則な動きに戸惑いながらも、アポロンは突撃をやめていなかった。

「悪いな……この刀身はビームの粒子すら切り裂くことができるんだ……ッ!!」

すぐ目の前まで迫ってきたビームでさえ、アポロンの太刀がそれを無効化させる。

ユウは自ら作り上げたこの刀に、絶対的な信頼を置いていた。

目と鼻の先で繰り広げられる攻防戦は、激しさを増していく。

バトンの先から撃ち放たれた射撃に思わず不意を突かれ、頭部を掠めた。幸い致命傷にはならなかったものの、辺りどころが悪ければカメラが死んでいただろう。

しかし、その攻撃がユウに火をつけた。

「へっ……やってくれたなア!!」

アポロンの太刀が赤熱化し始め、次第に炎を帯びる。

「バーニングストレット  
烈火 一閃オッツ!!」

そのエフェクトにおののいたか、フォーンファルシアがバトンで攻撃を防ごうとしたその右腕ごと、大きく振りかぶった刀身が裂いた。

バランスを崩し、転倒直前のところでフォーンファルシアの胸部が光り始める。

「今度は何だ……!?!」

「拡散ビーム砲だ!!ユウ、避けるッ!!」

ヒロの通信が聞こえたとはいえ、完璧に回避することはまず不可能だっただろう。

完全にバイタルエリアを侵していたアポロンは、まさに直撃コースだ。

……だが、ここで簡単には終わらなかった。

「……!?!」

フオーンファルシアのビーム砲の発射直前、二機の間にも別の機体のビームが割り込む。

射線の先には、狙撃モードのヘパイストスを構えるプロメテウスの姿が。

この突然の射撃を回避するためにフオーンファルシアが動いたことで、拡散ビーム砲の射角が大きくずれ、アポロンへの被弾は免れた。

ヒロが、ユウを助けたのだ。

「ありがとう兄ちゃん……また助けられちゃった」

「いいつての。俺はお前をサポートするって決めたからな」

体勢を立て直してから一度距離を取ると、相手の姿がよく見える。

ビーム砲を当てられず、困惑した様子のフオーンファルシアに、全力疾走するアポロン。

相手を一度大きく飛び越え、機体の背後を取る。

反応が追い付かない間に、かかとのブレードを展開してから回し蹴りをした。

手応えは……一瞬だけだった。

「……ッ!」

掠めたのは敵のバックパックの一部であり、本体に大ダメージは食わらせられなかったのだ。

落ちたバトンを左手で掴み直してから大空に向けて跳び、逃げ始めたフオーンファルシアをアポロンが追いかける。

「逃がすかよ……っとうわっ!!」

相手の掌からビームの雨が降り注ぎ、アポロンの対応が遅れる。

しかしそこにプロメテウスの銃撃が援護に入った。

「兄ちゃん!!」

「ビームバルカンは気にするな！俺がお前の邪魔を全て消してやるツ!!」

腰を深く落とし、狙撃モードのヘパイストスは上空を彷徨うフォーンファルシアを捕捉した。

敵の攻撃が止んだと同時に、アポロンもフォーンファルシアを狙って飛び上がる。

しかしやはり小柄さが活かされ、プロメテウスの狙撃すら回避し続けていた。

「ちよろちよろと……俺より速いのは気に食わねえツ!!」

左手にビームピストルを取ったアポロンが、プロメテウスの射撃を回避した瞬間のフォーンファルシアを狙い、銃弾をばら撒く。

「頭を下げるユウ!!」

「ツ……!?!」

すぐさま上空にて姿勢を下げると、背後からプロメテウスのそれとは違うビームが通りすぎていった。

「……ゼクアインの野郎か!」

プロメテウスがアポロンの援護をするように、ゼクアインもフォーンファルシアの援護をしていたのだ。

速射型スマートガンが、その名前の通りプロメテウス以上の充填速度でアポロンを狙い撃ちしてくる。

「ツ!!むしゃくしゃさせてくるなア!!」

ビームピストルの方向を180度変え、ゼクアインに向けるアポロン。

「当たらなくてもいいからこいつで少しはビビってくれ……!!!」

狙いはうまく定まらなかったが、何度か発砲したのをゼクアインが回避行動を取ったために、位置を変えることができた。

そして幸い、そのうちの一撃がスマートガンに直撃する。

「よくやった!!」

「つつしや!!」

爆発を見て安堵するユウであったが、まさにその瞬間が“隙”であつ



たことに、少々遅れて気がついた。

「がはアッ!!」

フオーンファルシアのビームリボンがアポロン全体を巻き付けるように纏わりつき、離れない。

ビームで機体が焼け、動けなかった。

再び胸部の拡散ビーム砲にエネルギーのチャージが行われ始めると、さすがのユウも焦りを見せる。

「なんの……これしき……ッ!!」

ユウは両腕からビームシールドを最大出力で展開し、敵のビームを相殺していく。

トドメと言わんばかりのプロメテウスによる掩護射撃で、相手の束縛を逃れた。

「……!?!」

ヒロのモニターからアラートが響く。

ヘパイストスの照準をフオーンファルシアから外すと、すぐそばにビームサーベルを刺してこようとするゼクアインがいた。

「そうか、さっきの攻撃で射撃ができなくなって……」

相手のゼクアインは満身創痍であった。

一番のアイデンティティを失ったことで、目の前の敵を狙うことにシフトしたのだろう。

「だが、舐められたモノだな……」

すると突如ヘパイストスのバレル下部が、ゆらゆらと妖しく、青白く発光していく。

「俺は近接も……苦手ではないんだよッ!!」

青い熱を帯びたのはブレード部分。

ヘパイストスの持ち方を変えると、完全に相手を斬り込む姿勢になる。

次にゼクアインがビームサーベルで突撃したその瞬間――

「はあッ!!!!」

――ゼクアインの胴体はさながらバターののように、意図も容易く切

断された。

「兄ちゃんがゼクアインをやった……！なら俺は……ッ!!」

拡散ビーム砲が発射されるもそれを回避し、コードを伸ばしたままソードビットを射出した。

アポロン本体よりも機動力の勝るソードビットが、避ける暇など与えずフォーンファルシアに直撃する。

二つのビットを突き刺し相手の動きを止めたまま、アポロンは地上に再び降下した。

背中を勢いよく振り下げ、敵を地面に叩きつける。

「残りはあいつだけだ」

「やれるか、ユウ」

「当然じゃん……！」

ソードビットを基部へと戻し、相手を今一度睨み付ける。

気がつけば、周囲の炎は思いの外すぐ側まで近づいていた。時間はもうそれほど残されていない。

次の攻撃で勝てる……勝たなくては。そう思ったユウであったが、

「何だ……？」

「……マズいなこれは」

立ち上がったフォーンファルシアが、何やら雄叫びを上げているように見えた。

ユウの額に汗が流れる。

その瞬間ユウは、全てを察した。

「この筐体の熱さ……もしかして」

「お前の言う、N・R・リアクターってやつを……あいつも使っているということだろうな」

始めから搭載していたものをここまで隠し通していて、ピンチとなったこのタイミングで起動させたのだろう。

見たところ、デューラー同士で口論を始めており、ゼクアインを使っていたデューラーはこのことを知らなかったようである。

ユウもヒロも、一気に機体のレスポンスが劣悪になっていくのがわ

かった。

「……とはいえ、だ。相手は既にギリギリの状態……時間稼ぎも要らない。すぐに決めるぞ」

「わかったよ……何秒？」

「待つてな……」

ヒロがデイスプレイ操作を実行し始めると、待ちきれなかったかのようにフォーンファルシアはアポロンに突進をしかけてくる。

「ぐうッ……!!」

「ユウ!!」

反撃のつもりだろうか。アポロンの右肩を掴み、そのままバトンを離した掌のビームバルカン——出力設定を勝手に変更したせいで、バルカンと言える出力をしていないが——を発射させた。

即座に右肩を切り離れたものの、相手はこちらを逃がさない。

「二人あたり35秒だ!!G—Programを3倍で起動させるツ!!」

これまでの戦いで消耗してきたこともあり、エネルギー残量が乏しかった。

「厳しいねえ……でも、だからこそ燃える」

ユウの心臓はバクバクしていたが、それと同時に興奮もしていた。

プロメテウスが青い炎に包まれると同時に、アポロンの反応がどんどんと復活していく。

「パワー同期OK！動けるぞ」

フォーンファルシアをかわせるようになったのを確認する、相手の離れたバトンを奪い投擲する。

相手もまたそれを回避したものの、その間に距離を取り、体勢を立て直す。

背中合わせになるアポロンとプロメテウス。

「00・28」

フォーンファルシアが再び雄叫びを上げると、今度はステージ設定を僅かにいじられた。

炎の燃え広がるスピードが、格段と速くなったのだ。

「迫ってきてる……俺達と心中するつもりってか」

「させるかよ……相手はまた拡散ビーム砲を撃ってくる。ユウ、こいつを借りるぞ」

「借りるって……？」

ヒロがウインドウからある項目を選択すると、突如アポロンのソードビットが射出される。

「え……!？」

何も知らないユウは驚愕するが、そんなユウを気にもせずヒロは事を進めていく。

合体攻撃モード——バレルを展開せず、ヘパイストス本体の左右に、アポロンのソードビットを装着することで、刺撃または一度きりの高出力射撃を行えるモードだ。

「00:20」

「ヤツのエネルギー充填速度は明らかに速くなっている!!敵のビームはこつちが引き受けるから、お前はトドメをさしてくれッ!!」

言い終わるより僅かに先に、フォーンファルシアが、超出力の拡散ビーム砲を放つ。

「間に合え……って!!」

ソードビットと合体したヘパイストスから、艦主砲クラスのエネルギーを発射した。

出力に耐えきれず、僅かにプロメテウスの足が後ずさる。

だが、なんとか踏ん張って見せた。

「00:14」

フォーンファルシアのビームとプロメテウスのビームは、互いに同じ射線上にあり、真正面からビーム同士がぶつかる。

辺りに強い衝撃波と、甲高い音が鳴り響く。

「00:12」

「負ける……ものかアッ!!!」

ユウが、思いきって攻撃をするために。

ユウが前を向くために。

ユウを支えるために。

様々な思いを秘めたビームが、フォーンファルシアの攻撃を押し退けていく。

「今だユウ!!トドメをさせエツ!!!」

「ぬあああああッッ!!!」

燃え広がる炎。

残りわずかなG—Program。

いずれにせよ時間がない。

力負けし、モロにへパイストスの射撃をくらったフォーンファルシア。  
ア。

「00:07」

焼け焦げながらも、まだ反撃をしようとする、その目の前には――

「やられてくれ……ッ!!!」

――アポロン<sup>アポロン</sup>の顔が、迫っていた。

焦りの中、膝下のビームサーベルを展開したアポロンが、バイタルエリア内のフォーンファルシアを蹴り裂く。

最後まで反撃をやめなかった相手が、音を立てて爆散した。

「00:00」

タイムアップ。

最後までこの炎をモノにしていたのは、

「Battle Ended

Winner

Yu's Mobile Suit Apollon Gun

dam

&

Hiro's Mobile Suit Prometheus

Gundam

ユウのアポロンと、ヒロのプロメテウスであった。

「っはアア……」

ホログラムが消えていくと同時に、思わず座り込んでしまうユウ。

正直、危なかった。

なんとなく、ヒロが手を差し伸べてでもくれるかと期待していたユウであったが、

「は……………」

ヒロもまた、ユウと同じように姿勢を崩していた。

「……………そうだ、フォーンファルシアのデューラーは……………!!」

何かを聞き出さなければ。

そう思い、慌てて立ち上がったユウは走っていく。

「お前!!いやキミ!というかあなたツ!!ケンジさんとか言いましたよね?!!」

「な、なんだよ……………!?!」

思っていたよりも年上であつたが故に、一応呼び方を変えたユウ。ゼクアインを使っていた相手も、色々と聞きたそうな顔をしていた。

「あの無茶苦茶な、常軌を逸した能力!!あれは一体どうしたつて言うんですか!!」

「んなこと知るかってんだよ!!」

「……………N・R・リアクターか」

「な……………ツ!?!」

しらばつくれた様子に腹を立てたユウは、相手の凶星を突いた。

「やっぱりそうか……………あれは一体どこで手に入れた!?誰が主導でこんなことをしているんだ!!」

「お前ら勝てたんだから文句ねえだろうがよオ……………!!」

「勝てずに無茶苦茶にされた人間だって、大勢いる筈だろう……………!!!」

「やめておけユウ!!」

思わず掴みかかりそうになったところを、ヒロの制止で止められる。

「話してはもらえないですか。これ以上傷つく人を増やしたくない」

とはいえヒロも、その声色から静かに怒っていることが伝わる。

「わ、忘れたよそんなもん……………!!」

しかし、相手はその一言を言い放ったと同時に、大急ぎで逃げていく。

「ツ!!待てよ!!」

捕まえようとするも敵わず、結局逃がしてしまった。

相手は申し訳なさそうに深く頭を下げてから、追いかけていった。

「……収穫はナシか」

「N・R・リアクターってのが現象の原因”ってことが確定しただけでも、よかつたでしょう。ユウ」

落ち込むユウの肩に手を置き、慰めるヒロ。

「それにさ、見てみるよ」

「……?」

携帯電話を開き、筐体のカードキーと連動しているアプリを見せる。

「……お前が デュエル 決闘の末、確かに勝ち取った勝利だ」

そこには、勝利数に+1の文字が。

地区予選にエントリーした以上、その一回の勝利が、これまでより遥かに価値のあるような……そんな風に、ユウは思えたのだった。

「負けちゃったんだなあ、ナンバー042……ケンジくんだけ」

薄暗く、しかし暑くて、嫌な空気が立ち込める場所。

さながら、フィクションなんかによく出てくる地下闘技場のよう  
な。

「悲しいなあ……みんな勝ってほしいのに」

あちらこちらに散らばる、型落ちの筐体。

そこで盛んに戦う者達。

それを一人椅子にもたれ掛かりながら、見つめるフードの男がいた。

その指には紫色の指輪が。

「勝ってほしいのに……勝ってくれよお……」

小さく聞こえる嗚咽。

涙は、落ちない。

「勝ってくれなきや……ユウが悲しむじゃないかアアツ!!!!」

しかしすぐさま、その声は怒号に変わる。

息を切らしながら立ち上がる男。

「みんなは……代わりに頑張ってるね？」

叫び散らしたばかりとは思えない気味の悪い笑顔が、目元の隠れたフードからチラりと、確かに見える。

闇は、既にすぐそこまで来ていた。



## 第五話 敗者の在り様は

「ねえ、勝ちたい?」

薄気味の悪い笑みを浮かべる男が問う。

「負けたのってやっぱり、悔しいよね?」

わざとらしく、フードの縁を深く引つ張り、続ける。

「強いつてこと、証明しないとイケないんだもんね」

すると男は、ポケットから小さな黒い箱のようなものを取り出した。

そこには『N・R・REACTOR』の文字が。

「……そろそろ出番だよ、ナンバー106」

男からそれを手渡された少年は、メガネのブリッジを軽く押さえる。

「……ありがとうございます。クロノさん」

「なんてことはないよ。ただ僕は、君たちみんなに勝利を掴み続けてほしい……そして、それを見せてほしいだけなんだ」

闘いに明け暮れる者たちの声をBGMに、薄暗い場所で交わされた、二人の会話。

どこまでも底が知れない微笑みが、口元にだけ表れていた。

俺は昔からそうだった。

「それじゃあ、今日はみんなで自分の似顔絵を描いてみよっか!」

「はいー!」

『……………!』

小さい頃から、そうだった。

「ソウタくん上手だね〜！」

『……………！』

「わあ、マリちゃんそつくり！すごいね」

『せんせいかけたよ！』

「おっ！ユウくんも描けたんだね……………どれどれ……………」

『……………？』

俺には、

「…………ユウくんの顔はこんなのじゃないよ、これじゃヘルメットみた  
い」

『え……………』

胸を張れるものなんて、なかった。

「投げろウチヤマ!!」

「次にかかっているぞー!!」

『……………ツ!!』

体を動かすことが得意ではなかった。

『あつ——』

「どこ投げてんだよ!!」

「終わったよ!!これで」

自分の出来ないことで他人に責められることが、いつも納得できなかった。

『…………大休憩だ、折り紙折つとこ』

「行こうぜ！ドッジボールするぞ!!」

「おう！」

「ちよっと待って！今行くから!!」

『……』

だから、俺は自ら孤立していた。

でもそれ自体は、苦痛ではなかった。

『……中学受験でもするか』

「え、どうしたんだ急に」

趣味という趣味がなかった。

かといって、退屈していた訳ではない。

『なんとなく、だよ』

ただ、もしかしたら世界が変わるかもしれない。

俺の目にも素晴らしく映る、そんな世界が待っているかもしれない。  
い。

そう思つて、俺は違う環境を望んだ。

『……みんな、点数高いね』

「毎日毎日塾に通つてると、嫌でもこうなるさ」

「俺はもう勉強が恋人かもなあ……」

『す、すごいなあ……ほんとに』

「大したことじゃないよ、これくらい。ウチヤマもウチヤマで、誇れる  
ものがあればそれでいい」

正直、俺と30も点数に差を空けている奴に言われたくなかった。  
学力は最低限度……私立中学にいる身としては、ペーパーと言え  
る。

誇れるものなんて、あるはずもなかった。

みんな自分の色を持っていた。  
俺にはずっと、なかったように思う。

そんな俺が、出会ったもの。

「はいこれ、プレゼントだ」

『これ……ガン普拉？』

ガンダムブレイカー4というゲームが家にあっただから、その存在を知らなかった訳ではない。

というより本当は、心のどこかで興味を持っていたに違いないだろう。

「イチから教えてやる。一緒に楽しもうぜ、ユウ」

だからこそ、初めて本物に触れた時。

『……!!!』

その楽しさ、自由度の高さ、可能性。  
それを知った瞬間――

『うん……いやるよ、ガン普拉……!』

――俺の世界は、鮮やかに色づいた気がした。

「……!!」

響くアラーム。

朝日。

微かに鼻を掠める、トーストとバターの香り。

ウチヤマ・ユウはその全てによって、これまで回想してることが夢であったことを理解した。

「ユウー、もう朝できてるぞー」

階段の下から、兄の呼ぶ声が聞こえる。

ユウは軽く返事をしてから起き上がり、一日を始めるのであった。

朝食をとつてもなお眠い目を擦りつつ、パジャマを脱ぎ、制服へと着替えるユウ。

そんな隣でヒロも、カバンの中身を確認しながら、家を出る支度をしていた。

「ユウ、今日もやるのか？」

「もちろんさ」

「テスト期間……なのにな？」

「も、もちろん……さ」

触れられたくないところに触れられたユウは、露骨に反応が渋くなる。

そう、ユウはいくらデューラーの端くれとはいえ、所詮はただの学生なのだ。勉強や成績に追われる身であることには何ら変わらない。

それでも、できる限りはバトルで良い戦績を残し続けていきたい……というのが、ユウの考えだった。

「学校にいる間はめちやくちや頑張ってるから……さ、あはは……」

「そ、そうか。まあ……できるだけのことはしておけよ？」

やれやれ、といった様子で立ち上がるヒロ。

それにつられて、ユウも重い腰を上げた。

自転車を漕ぎ、駅に着けばホームで別れ、二人各々の目的地へ向かう。

普段と変わらない、朝の光景だった。

「うん……」

ある日の昼休み。

ユウは酷く頭を悩ませていた。

明日はいよいよテスト当日。目の前の机に広げられているのは、数学の問題集。……なのだが、

(あ、頭の中がガンプラのことでいっぱいだ……ッ!!!)

そう、ユウはガンプラバカである。

テスト期間だろうがテスト前日だろうが勉強中であろうが、構わず脳内では新たな武装や機体の構想、設定が浮かんでくるのだ。

……どちらかといえばむしろ、テスト期間の方が捗るかもしれない。

ユウを悩ませているもの。それはつまり問題の内容でも、試験に対する不安でもなく、心を揺るがすその誘惑であったのだ。

「なーやってんの、ウチヤマくん」

一人、悶え苦しむユウに声をかけるツバキ。

「……ーな、なんだアズマか……いや、何もないけど」

「ガンプラのことでしょ」

「まあ………うん、おおよそ合ってる。勘がいいな」

「ふふん、よく言われるよ」

大したことではないが、ツバキはどこか自慢気だった。

「テスト期間ぐらい我慢しなよ……って言いたいたいところだけど、それも難しいんだね」

「正直な……己の欲にはどうにも抗えない、というか」

「………というか？」

2秒、固まる。

直前まで笑っていたツバキと対称に、ユウはどこか、少々真剣な面持ちであった。

「………考えないといけないって、焦ってる」

ガンプラバトルも、製作も、所詮はただの遊びである。しかしながら、今のユウには2つの目標があるのだ。

1つは、自分だけのガンプラで、全国大会に出場すること。

もう1つは、実の兄であるヒロや、他の人が被害を受けた『N. R. REACTOR』問題の解決。

今ユウが特に焦っているのは、後者の方であった。

「ッ……いっつまさか……」

「ああ、間違いない。お前の言ってた、NRリアクターを使ってるんだろう」

立ち並ぶ、アポロンガンダムとプロメテウスガンダム。

その目の前にいたのは、ファントムガンダムであった。

しかし、その様子は明らかに異常なものであり、

「ユウ、避けるッ!!」

「間に合わないって……ッ!!」

突如として、地面が割れ弾け飛び、紫色の炎が広がった。

ただのファントムライトではなく、システム自体に干渉を及ぼすほどの力……それが、『N. R. REACTOR』であった。

強い芯を伴った炎が、一直線にアポロンの脚部めがけて飛んでくる。ユウはそれを避けることができず、左脚が根本から欠落した。

「マズいな……ユウ、動けるうちに仕掛けるぞ」

「使うんだね……？わかったよ……」

アポロンが満足に動けないと悟ったヒロは、右腕に装備された中遠距離射撃用複合兵装「ヘパイストス」をパージし、バックパックからビームサーベルを引き抜く。

それと同時に筐体のディスプレイをタッチ操作し、ある項目を選択する。

「なるべくすぐに済ませたい……よし、出力5倍！現段階での残りエネルギーから計算すれば、制限時間は1分半だ」

[G—Program 2nd function]

ウィンドウが表示されると同時に、プロメテウスから青い炎が広がった。

「出力同期！なんとか動けるよ、兄ちゃん」

そんなプロメテウスの炎と同調するかのように、アポロンの胸部に埋め込まれたクリアパーツが青く輝く。

二本の脚で立ち上がれない代わりに、射出したソードビットを左腕で抱え、松葉杖のようにして起き上がった。

「01:20」

軽快な動きを取り戻したプロメテウスが、ビームサーベルの出力を強め、ファントムに接近しようと試みる。しかし、不規則に揺らめき、時に拡散してくるファントムライトの炎に阻まれてしまった。

「厄介過ぎる……ッ!!俺が接近出来るように、ソードビットで道を作ってくれないか!!」

「難しいけど……やってみる!行つて!!」

再度、ブースト全快で走り始めたプロメテウスが、ファントムの元へ向かう。

プロメテウスの動きを察知したファントムが、腰からフレームソードを引き抜き、警戒しているようだ。

睨みつけるような瞳が、文字通りその形相を変える。二段階排熱モードとなり、フェイスイープリンの形になったのだ。

「01:00」

その瞬間、プレッシャーにも似た緊張をヒロは覚える。操縦桿を握る手が固まる。刹那、プロメテウスは動きを止めてしまうと、その隙に大きく広がったフレームソードの炎がプロメテウスを振り払おうと迫ってきた。

「ッ……………!!」

やってしまった。そう諦めかけたその時、  
「やらせない……………ッ!」

コードの繋がった1基のソードビットが、プロメテウスを庇うように現れる。

フレームソードの炎を、さながら切り裂くように貫き、霧散させた。

「00:50」

「大丈夫!?兄ちゃん!!」

「ゆ、ユウ……?すまない、俺は——」



「いいっていいって、兄ちゃんがヤツに接近出来るように道を作るのが、今の俺の仕事なんだから。ここで終わりじゃないでしょ？」

ヒロははっとした。

まさかユウに、こんな風に助けられるなんて。

「——ありがとう。行こうか」

どこか嬉しそうに笑うと、ヒロは今一度、操縦桿を握りしめる。

止まっていた足でまた地面をしっかりと踏みしめ、走り出すと、驚いた様子の相手がバタフライバスターを手にし、ビーム刃を形成し始めた。

「00:47」

プロメテウスのビームサーベルも高出力のまま、敵へと飛び込んでいく。

ついにすぐそばまで来れた……あとは斬り込むだけ。プロメテウスは大きく振りかぶる。

「……ッ!!マトモにやり合おうなんて……甘いか、さすがに」

「00:38」

火花を散らしながら繰り広げられる鏖迫り合い。しかし、フロントムのバタフライバスターは露骨に威力を強めてきた。

押される——!

「がはアッ!!」

プロメテウスのビームサーベルが打ち消された。

直後、体勢を崩したプロメテウスに、ガンモードへと変形したバタフライバスターの光弾が降り注ぐ。

「マズい……!」

「00:30」

吹き飛ばされるプロメテウス。狼狽えるヒロにもお構いなく、再びサーベルモードの形を取ったバタフライバスターをその手に、フロントムが接近してくる。

蜃気楼を纏いながら。

「兄ちゃんッッ!!」

「!？」

突然の鈍い音。ヒロの手元のディスプレイに映ったのはアポロンだった。

なくなった片脚はそのままに、スラスターだけの力で飛び上がり、フアントムに勢いよく突進したのだ。

周囲のオーラによってその形を歪めながらも、アポロンは前を見据えていた。

「これを!!」

一瞬だけ手を伸ばしたアポロン。

何かを察知したヒロは、それに間に合わせるべくプロメテウスの手を伸ばさせる。

手に掴んだもの……真つ赤なグリップ。一筋の鋼。

「00:25」

「うぐ……っ!!」

容易く振り払われたアポロンは、岩壁に叩きつけられる。

直後、態勢を整えたフアントムがまた紫色の炎を広げた。

向かってくる炎の嵐に、咄嗟に太刀で防御するプロメテウス。

「00:19」

「今!!」

耐えきり、その足をしっかりと大地に踏みしめ、また踏み込み、相手を捉えるプロメテウス。

次に来たフアントム本体に、ヒロは動じない。

二度目の鏝迫り合い。しかし先程までと明らかに感触が違った。

「こ、これは……本当にすごいなアイツは……ッ!!」

僅かに熱を帯びる刀身が、なんと敵のビーム刃を切り裂く。

「00:14」

一歩だけ距離を取る。

そして、腰を落とし、肩を引き、

「これで……終いだ!!」

勢いよく、その刀を投げつけた。

ブレの一つもなく、まっすぐに。

敵が纏わせる炎も、バタフライバスターも、そして最後の抵抗のI

フィールドをも貫く。

眩く光を反射するほどの刃先が、敵のバックパックから突き出る。ファントムはそのまま崩れ落ちることすらせず、爆発した。

「Battle Ended

Winner

Y u ' s M o b i l e S u i t A p o l l o n G u n

d a m

&

H i r o ' s M o b i l e S u i t P r o m e t h e u s

G u n d a m

バトルフィールドのホログラムが消えていくと、戦いの惨状を改めて目の当たりにすることになる。意外にも、爆発に巻き込まれておきながら、プロメテウスの投げた太刀は無事であった。

……ほんの数ミリ、刀身が欠けていたことを除けば。

ユウ達は急いで相手デューラーのもとへ駆けつけるが、逃走の準備を始めているようだった。

焼け焦げたファントムを回収しようとしているところへ声をかけると、相手は肩をすくめる。どうやら手が届かないらしい。

次はメモリーカードスロットに手を伸ばしていたため、ユウがその手を掴んだ。

「待って」

声を荒らげることもなく、なんとか冷静に制止を試みるユウ。

しかし相手はその手を振り払い、最終的には、逃走されてしまった。

「また……逃げられちゃった」

「こここのところ、こんなケースばかりだ。バトルをふっかけられるにも、こつちが対戦相手を待つにも、NRリアクターが使われて大変なことになって……最後は逃げられる。ここまで俺達に集中してくるんだ。意図的に狙われている可能性もある」

「……」

ユウは悩んだ。どうして狙われるのだろうか。何か理由があるのだろうか。

「でも、今回はまた収穫があった。メモリーカードの置き土産2枚目と、相手の使っていたガンプラそのものだ。ここから何かが掴めるかもしれない。運営に提出できる材料にもなってくれるなら、ベストだな」

「そう……だね、また解析頼んでもいい……?」

「もちろん。尽力しよう」

希望を探そうとしていたヒロだが、ふと戦闘中のことを思い出す。ファントムライトを発現させたファントムガンダムの威圧感。それに、過去の記憶を重ね合わせていた自分。

背筋の凍るような、何とも形容し難いプレッシャーは、あの時と非常に似ていて……

「……弱さだな、俺の」

ユウのためにも、次は迷惑をかけないように……自分に負けないようにしよう。そう、ヒロは決意していた。

その一方。

「その、ごめん。油断してて脚がやられて」

「いや、俺こそ一瞬怯んでしまっていた。ユウが動けなくなったら、俺が前が出る。それで問題はないんだぞ」

アポロンが地に足をつけて立てなくなってから、ヒロはプロメテウスで近接戦をしかけるようにしていた。それはお互いでお互いのダメージを補い合うという、非常に理想的なタッグバトルの形だったはずなのだが。

「……うん。でも、次はもっとうまくやる」

ユウの表情は、どこか不安げに見えた。

実際、近頃NRリアクターを用いた相手と戦うことが多くなってきた。ヒロのことを思っているユウの行動だということも、ヒロ自身は一応理解しているつもりだ。

それでも、手を引くことも、諦めることもできる。今でも本当に、大会に出ようと思っっているのだろうか。

どこか根を詰め過ぎなのではないのだろうか。ヒロにはどうしても、そう思えてならなかった。

「ウチヤマくん、テストどーだった？」

声をかけるツバキに、無言で返却後のテストを見せる。

点数は………良いとも悪いとも言い難い、なんとも言えないものだった。

「あ、あー……なるほど」

「どうもやる気にならなくてな……」

「大丈夫？成績下げすぎないようにしなきゃだよ」

「わかってる………んだけどなあ」

わざとらしく不貞腐れるユウ。

高校への進学も控えている。不安に思うことが多いのは、自然なことだろう。

それに、今不安に思うことは、ひとつだけではない。

「ガンプラのことでしょ、今考えてるの」

「お前……俺が何か考えてるとき大体ガンプラのことだと思ってないか？」

不機嫌気味に問いかけるが、否定はしなかった。

というか否定できなかった。

やっぱり、ユウはガンプラバカなのだ。

「報告書は書き上がったか？」

「……？ああ、カツラギか」

ヒロとカツラギ。休み時間の二人だ。

「もう少しのところだ。急ぎながらもちよつと頭休ませないと……疲れる」

「ウチヤマ、お前近頃ガンプラバトルで忙しそうだもんな」

「……ちよつと、色々な」

ヒロが何やら表情を曇らせていたのを、カツラギは見逃さなかつた。

「お前の研究テーマは、非常にみんなが注目しているものだ。それに完成度も。だが、だからこそだ」

「？」

「休憩はしつかり取らないとな……ということだ。ウチヤマ、今日は付き合ってくれないか」

「いいけど……何かするのか？」

「俺にガンプラを教えてください」

それは、カツラギなりの気遣いであった。

果たしてそれが、一番の休息になるのかどうかはわからないが……ずっと頭を使い続けるよりかは、こうして理由をつけてでも別のことをさせたほうが良いだろう。それが彼の考えだ。

「へ……うべ、別にいいけど……」

二人は、帰りにそのまま、ユウやヒロが普段行く模型店へ来ていた。

「二度、二人のバトルを見に来たとはいえ、こうしてじっくり見るのは初めてだな」

「あー、そういやそうか……多いだろ、ガンプラ」

「ここは、個人経営の模型店としてはそこそこ規模が大きい方である。ユウが初めて来たときにそわそわしていたのも、そのスケールによるものだろう。」

「そういや、カツラギは機体の種類とかわかるのか？」

「あまり詳しくは……だが、なんとなくはわかるぞ。これは……確かゼイドラだな」

「おお、正解」

指を差しながら、カツラギはどこか得意気な様子だ。

そんな彼を横目に見ながら、ヒロはビルダースパーツ等を見ていた。ユウが使うかもしれないと思ったのだ。

『せっかくここに来たんだから、ついでに何か買っていこう』の思考。財布の紐が絶望的なまでに緩いタイプの人間のソレである。

ちなみに、ユウも同じような思考回路をしている。

数十分と眺めていると、カツラギが初めて、ひとつのパッケージに手を出した。SDガンダムのコーナーだった。

この模型店には売り場と、バトルの筐体があるブースの他に、簡単にプラモ製作等もできるリーススペースがあった。工具も貸し出ししてくれる。

「……意外だな。まさかガンダイバーに目をつけるとは」

カツラギが手にしていたのは、「SDガンダムフォース」に登場する水中型機体「ガンダイバー」。

ヒロは、はつきりと言えはかなりのマイナー機体だという第一印象を受けていたが……見るもの全てが新鮮な彼にとっては、野暮な話だ。

「もしかすると、中学まで水泳部だったからだろうか。どこか感じるものがあつたのかもしれない」

「直感つてやつか？選んだのは」

「それもそうだ。だがキスギに——あ、いや……友人に『まずはSDから作つたらどうだ』と、以前言われたこともあつてな」

机で向き合うヒロとカツラギ。まずは箱を開けるところから始まる。

数あるSDガンダムの中でも、またさらに価格の抑えられたガンプラだ。中に入っているランナーは少なく、簡単に組み立てられそうだ。

「これ、ニツパーなしで組めるっけな……あ、大丈夫そうだ」

「手で取れるのか？」

「取れるはずだ。けど、もしかすると色が足りていないかもしれない」  
少し不安に思ったヒロであったが、組み立てる上での心配はいらないようだ。しかしながら、パーツ数の少なさゆえ、シールがかなり多くなっている。

仮に全て貼ったとしても、完璧な色再現とはいかないだろう。

「……やはり、塗らないといけないか」

少々落ち込んだ様子のカツラギ。そんな彼に、ヒロは優しい言葉をかけることにした。

「いや、最初はいいと思うぞ。まずは、楽しく作って楽しく遊ぶっていうのが重要だ。色は……そうだな、いつか自分から気にし始めてからでいい」

「塗装とか改造は、しなくてもいいのか」

「したくなればすればいいけど、まだそう思わないならそれでいいんだ。そういうもんだぞ」

「……そういうものか」

いつしか、誰かが言ったように、ガンプラは自由なのだ。

他人に迷惑さえかけなければ、どれだけ好きに楽しんだって構わない。

購買意欲を満たすために、ただ買い集めるのも。買ってそのままの状態で、ただ作るだけでも。ただ素組みをして、さながらアクションフィギュアのように遊び尽くすのも。簡単な加工を施したり、シールを貼ったりするのも。丁寧に気になる部分を処理し、くまなく塗装をし、模型としての完成度を高めるのも。好きな部分だけをかき集めて、好きな色に塗って、自分だけのオリジナルを作るのも。そのどれもが、ガンプラの楽しみ方であり、誰かに縛られるものではないのだ。

だがしかし、時にそんな「自由」という言葉だけを振りかざし、他者に迷惑をかける者もいる。

だからこそ、勘違いをしてはいけない。「自由」であるということはいち、最低限のマナーを守った上での権利。他者の自由を侵害し、正しく在る者を傷つけてはいけない。

そこに、何らかの理由があつたとしても。

「……」

ユウとヒロは今、そんな誰かと戦っている。

いつかそこに、矛盾や疑問を感じることもあるかもしれない。それでも、今は戦うべきなのだ、と、ヒロは思った。

ユウが戦うならば、今は自分が支えなければ、と。



パーツをもぎ取りながら、カツラギは実際にガンダイバーを組み始めた。

「やはり……変だろうか」

「……？何が」

「この歳にもなつて、SDからだなんて。子供っぽすぎないだろうか」  
カツラギは再び、不安そうな声を漏らす。

「正直言うと、俺はこういうのが結構好きなんだ。素直にかっこよくて、純粹に楽しいって思えるようなものが。もちろん、それ以外も好きではあると思うがな」

彼はどこか恥ずかしそうに、頭を掻きながら続けた。

確かにSDガンダムといえば、低年齢層向け というイメージがあるかもしれない。しかしながら——だからこそ、そんなイメージに縛られる必要性もないのだ。

「変なんかじゃないさ。俺も好きなんだ、そういうの。特にSDガンプラなんて、作ってるのがめっちゃくちゃ楽しいからな」

「そう……だな、確かにそうだ」

「思うがままに手でもいで、直感的に組み立てる……多少の色不足も気にしないままなら、それだけで楽しいだろう。作りやすいし、わかりやすくかつこいい要素も、多く詰め込まれてるしな」

ヒロが初めて作ったガンプラはSDガンダムだった。それもあつて、ヒロとしてはどこか思い入れもあるのだ。

幼い頃はただひたすら、SDガンダム三国伝の機体を一心不乱に作り、遊び続けていた。カツラギの気持ちはよく分かる。

作りやすい構成。多用されるメッキパーツやクリアパーツ。幼心にしてみれば、そんなもの楽しいに決まっている。

「俺な、時々変形合体のできるおもちゃとかに触れてるんだ」

「ガンプラ以外で？」

「ああ。結局のところ俺は、かっこいいロボットが好きなんだと思う。もちろんガンダムも同じ。子供っぽい、とか、それだけの理由で胸を張れないなんてことはないんだ。童心のままに、好きなことを好きなようにするっていうのが一番……だと思っぞ」

「好きなように……」

もしこれから、今日初めて手を出したことによって、ガン普拉にどんどんハマっていつてくれるならば……忘れないでいてほしいこと。

それが、好きなように楽しんでほしい、ということだった。

「ガン普拉ももちろん同じ。自分の好きなようにしたいと思うから、その気持ちを突き詰めて改造したりする。ガン普拉バトルでもそう。自分の「好き」を一途に追いかけていこうとするからこそ、先へ進める。……俺も、昔はそうだった」

「昔……？」

「あ……っ！なんか変に昔のことを思い出していたな……忘れてくれ」

自分の気持ちを伝えようとし過ぎるあまりに、つい自分のことを話しかけてしまうヒロ。

自ら進んで、「好き」を貫くために、戦った日々。

「……！」

(そうか……ユウもきつと、自分の「好き」を突き詰めて追いかけていこうとするために、戦ってるのか)

カツラギに話していると、昔のことを思い出した。

そしてその時の記憶が、今のユウと重なって。

(「好き」を追いかけられるための道を整えるために、あいつ達と戦おうと決めてくれたのか)

ヒロのために。それと同時に、全国大会で戦いたいという強い意思があるのだとしたら。

(ユウは……)

ヒロは、今ここにいないはずのユウが、あまりにも眩しく見えた。

「ありがとう、カツラギ」

「えっ？」

「お前のおかげで、やっと気づけた」

「そ、そう……？か、ならいいんだが」

「とりあえず、色々調べた結果としては……メモリーカードに関しては以前とほぼ同じで、戦闘時の映像を記録しているのみ。でもって相手の使っていたガンプラ本体だが……」

「……！」

ボロボロになったファントムガンダムのバックパックを外して、その中から何かを取り出し、見せるヒロ。

「こいつが出てきた。やっぱり、ユウの言ってた通りだ」

『N・R・REACTOR』……か。これが……」

黒い小箱のようなもの。そこには確かに『N・R・REACTOR』の印字があった。

「こいつの解析も一応試みてはみたが……俺が投げた太刀が見事にこいつを貫通していたらしくてな。完全なデータの吸い出しは出来なかった」

「仕方ないよ。ここを潰さないと、相手の暴走は止まらないし」

「そうなんだよな……厄介なことだ」

二人向かい合って、困った表情をする。

「だが、”完全な”吸い出しはできなかったが……一部プログラムの残骸だけは確認できた」

「え、そんなことできるの……?」

「できる。俺はな」

ユウは、ヒロが大学で普段どういふことをしているかすらあまり知らないが……実は相当の実力者なのではないか、と思った。

第一、あれほどまでに機能と出力を詰め込んだG—Programを作ったほどなんだ。

「それでなんだが……」

ヒロは、ユウにパソコンのディスプレイを見せる。

プログラム言語の一部分だろうが……

「いや、わかんないって」

「わからないか」

何故わざわざユウにそれを見せようとしたかは、謎である。

「わかりやすく言うと、パラメータの上昇、下降を制御できる部分だと  
思われる」

「じゃあやっぱり、確定なんじゃ——」

「ほぼ確定ではあるけど、システムに直接干渉し得るものであるとい  
う部分が発見できないと、100%の黒とは言い難い。まあそもそ  
も、こんな外部デバイスを用いてシステムを使っている以上、かなり  
濃い目のグレーではあるがな」

GPデュエルの運営は、意外と厳しいんだ。とヒロ。

ここまで怪しいものが見つかっていながら、決定打にはならないと  
いうのが、悔しいところだ。

「そ、そっか……」

「でも大きな進歩ではある。たとえ僅かでも、相手のシステムがここ  
に残っている ということがあった以上、一番俺達が欲しい部分を  
いつか見つけられる可能性もあるということだ」

「……そうだよね。だったら俺も……」

「あー、NRリアクターを壊さずに勝とうって思うのはやめておけ。  
難易度が格段に上がってしまう。まずは、その場その場で戦いを収め  
るのを優先した方がいい。だから、その……」

ヒロは、難しそうな顔をした。

今自分達がやろうとしていることが、難しいことだとわかっている  
からだ。

それでも、

「……気負うなよ。あまり。俺がついてるってことを忘れないでいて  
くれ」

「兄ちゃん……」

ユウが目指す先に、大会という純粋な目標があり続けるのなら。

俺は、ユウを守る者となろう。

それが、ヒロの決意だった。

「……ありがとね」

いつもの放課後。ユウとヒロは模型店にいた。

今日の目的もガンプラバトル。大会の地区予選に進むためには、一定数の勝利ノルマが必要だ。

「あ……っ！」

「あの反応はまさか……NRリアクター!?!」

たまたま目に入った、他人のバトル。

ストライクベースの機体と相対する機体が、突如紫色のオーラを纏い始めたのだ。

「マズいぞユウ……このままじゃあの人は」

「た、助けに行く? 本人がめちやくちや強いかじゃなかったら、きつと……」

「そうだよねえ、でも、本人がめちやくちや強ければ……ね」

「そうだといいんですけ……ってエイジさん!?!」

「え?!」

ユウとヒロは驚愕する。あまりにも当たり前前のように会話に挟まってきたのは、かつてユウ達が一度戦ったノダ・エイジだった。

しれっと、ユウの隣に立っている。

「ふふー、こっちの地区の様子はどうかあつて、なんとなく見に来たところだったんだよ」

「そ、そういうことでしたか……エイジさんも気になりますか、あの戦い」

ユウは、さっきの危なげなバトルに目を向けた。

それに釣られるように、エイジも。

「気になる気になる! この地区でのトップランカーが、チーター紛いの相手と戦ったらどっちが勝つのかなあ……」

「……トップランカー?」

気になる言葉が聞こえたため、ヒロが問う。

トップランカー……まさか。

「あれえ、知らないの? 彼が、君達のいるこの地区での上位成績者……」

”疾風の猛獣”、ユウジン・ヤマト。ここらじゃ一番強いって噂だよお」

はつきり言うのと、ユウもヒロも初耳だった。

ユウはガンプラバトルをまだ始めたばかりだし、今は目の前に現れる誰かと戦うので精一杯だ。

ヒロが現役で戦っていたのも、かなり前の話。今は誰が強いかなんて、知り得ないものだ。

「……いやしかし、いくらトップランカーとはいえ、あの力に対抗しようなんて——」

「に、兄ちゃんあれ!!」

「え、えええ嘘だろ……」

確かに、機体操作のレスポンスは異常なまでに劣悪になっているが……相手が飛び込んでくる勢いを利用して、いとも容易く相手を切断する。以前プロヴィデンスと戦ったときの、ヒロの戦い方と同じだった。

「ツたく……またこいつらか」

バトルが終わると同時に、うんざりといった様子で小言を吐く。事実として勝てはしているが、やはりNRリアクターを使う者に、嫌気は差しているようであった。

「ん……? おお、そこで見てる兄ちゃん達」

「へ……!? は、はいっ!!」

呆然としてしていると不意に声をかけられ、思わず返事が上擦ったユウ。

「君達、アポロンガンダムってのを使ってる二人組じゃないの? 近頃こころでブイブイ言わせてるって聞いたけど」

「……俺達って、噂になってるの?」

驚くべき事実には、ユウはきよとんとしてしまった。

「はは……っ、そうらしいな」

昂るものがあつたのか、思わずニヤリと笑みを零すヒロ。

そんな二人を、一歩下がってエイジが見つめていた。

「どうだ、一戦やってみないか? 近頃ろくでもないヤツと当たることが多くてなア」

「……喜んで、受けましようー!」

ユウはヒロと目を合わせる。言葉を交わさず、ただ頷くと、二人は筐体のところへと向かう。

「……頑張れ、お二人さん」

二人の背を眺めながら、エイジは小声で呟いた。

「Yamato's Mobile Suit

Metal Garuru Strike Gundam

V.S.

Yu's Mobile Suit

Apolloon Gundam」

カードキーを挿入し、バトルの準備をする。

相手のガンプラはやはり、ストライクガンダムがベースらしい。

「……緊張するか?」

「してる。正直」

強い相手であるということがわかった以上、ユウが恐れるのも無理はない。

それに、G-Programのようなシステムがなくとも、NRリアクターの力を持つ相手を倒したほどだ。それほどの実力者なら、二つ名が付けられるのも納得がいく。

「ギアて……ユウジン・ヤマト、メタルガルルストライク!! 発進するツ!!」

相手方が先に飛び出した。ユウ達もそれに続く。

「ウチヤマ・ユウ、アポロンガンダムツ!! 行きます!!」

ガンプラの置かれていた台座から本体が勢いよく飛び上がると、そのままバトルフィールドへ。

今回のフィールド設定は、宇宙空間だ。

「BATTLE START」

合図と共に、スラスタ全開で飛び出すアポロン。

幸い敵機は真正面。直線上に相手がいる。

「宇宙での戦い……どこから攻撃が飛んでくるかわからない。相手の攻撃手段も全て把握しているわけではないから、警戒しておけよ」  
「うん。わかってる」

もちろん、ユウの隣にはヒロがいた。今回は久しぶりに、プロメテウスの出番はなさそうだ。

距離が近づいてきた。こちらから仕掛けるか。

そう思った瞬間、相手がライフルをこちらに構えてくる。すぐに射撃が飛んでくることを想定し、ユウは軌道を僅かに下げようとした……が、

「ユウやめろー！避けるなら左右だ！」

「え、なんで——」

目を離した隙に、緑色の光弾がアポロンを襲ってくる。

しかも一撃ではない。縦向きが交互に二撃だ。

「あれってもしかして……二連装のビームライフル……？」

「気をつけろ、回避の仕方にも気を配れ……いつも通りじゃ避けきれない」

強く操縦桿を握りしめるユウ。

その眼差しは、真剣ともとれるが……焦っているようにもとれる。

「要するに勢いつけて、ドンと避ければ問題ないってことでしょ」

「ま、まあそうなるが……」

ユウはあえて余裕のある言い回しをして、自らに自信をつけようと試みた。

成果が出ているかどうかは……次の手応え次第だ。

さて、いよいよぶつかると寸前まで来た。

アポロンの右手は、左腰の刀に添えられている。

一方の相手は、本当に余裕があるのか、あまり動じる様子はない。

「……舐められてる。やろオ……」

距離は詰めた。どこまで余裕ぶっているつもりだ。ユウは引き抜いた太刀をそのまま相手にかざした。

「ッ………!!?」

「アーマーシユナイダー……だど?!」



しかし、それは難なく防がれる。

一瞬の隙に引き抜いたコンバットナイフ”アーマーシユナイダー”で、アポロンと鏝迫り合いをしてみせたのだ。それも、到底押し切れそうにない。

「クソ……ッ!!」

パワーで押されたアポロン。素直に弾かれてしまった。

投げ出された機体を、手足の慣性で静止させる。そして、改めて相手のガンプラを目の当たりにした。

メタルガルストライクガンダム。

ストライクガンダムをベースにした改造ガンプラ。全体的に青系の要素が強められており、爽やかな雰囲気でありながら、どこか獣のような豪快さも持ち合わせているように思える。

大型化したストライカーパックのウイングと、ブルーに発光した機体各部が目を惹いた。

「つへへ……好きですよ、そのガンプラ」

「それはどうも。俺も君の機体……非常に強く惹かれている。だからこそ、戦いたかった」

どこか満足そうなヤマトと、歯ぎしりするユウ。

相手のガンプラを褒め称えるのは本心ではあるが、それと同時にユウは、焦りも感じていた。

「……今回こそ、もうへまはしないよ」

隣に並び立つヒロに、ユウが言う。

ヒロは、困ったように頭を掻いた。

周囲はデブリも、小さく浮かぶ岩などもなく、ただ純粋な無重力空間が広がっている。戦いやすいといえれば戦いやすが、それらを利用した戦術を取ることもできない。

打つ手は、かなり限られている。

「来たー!」

「……ッ!!」

ガルストライクの射撃。今度こそ相手を警戒し、見つめたまま回避行動を取った。

次にこちらから出来ることといえば……

「牽制！」

「わかってるー！」

右腰からハンドガンを取り出し、数発。

もちろん相手には避けられるが、これは構わない。

「先行させてもらうぞ、ユウ」

ソードビットが射出される。ふわふわと周囲を漂ってから、たちまち攻撃性溢れる軌道を始めると、目標のガルルストライクを指して飛び始めた。

「3方向から攻めさえすれば……ッ!!」

小型かつ、小回りの効くモノだ。いくら相手が強くとも、簡単にはやられない。

敵機の注目をソードビットに集中させてから、今度はアポロン本体のターン。

太刀の切っ先を相手に向けたまま、懐に飛び込もうとした。

しかし、

「掴まれた……だど!？」

その刀身が目指した先には、ガルルストライクの脇が。

胸とその間に挟まれ、身動きが取れなくなった。

「かなり見え見えな動きだ……その程度では落ちんツ!!」

ストライカーパックに接続された、ビームサーベルを引き抜いてきた。咄嗟の判断でアポロンも腰からビームサーベルを引き抜き、応戦する。

一度急接近を狙った状態だ。距離があまりにも近い。

ビームとビームの交点から、眩い火花が散っているのが、モニターにもよく映っていた。

相手のガンプラの端正な顔立ちが、どこか狂氣的にも見える。

「こつちを忘れんなよ……いー」

ヒロが操るソードビットが、二機の間を割って入った。

余裕ができ、改めて距離を取るアポロン。

ガルルストライクは脇に挟んでいた刀を、放り投げるように振り

払った。

再度、睨み合う二人。

「君は、あのろくでもないヤツらと戦い続けているみたいだな」

「……い、ええ、そうですけど」

突如、ユウはヤマト本人に声をかけられる。

そんなことまで噂になっているのかと、内心ユウは驚いた。

「君らが知ってるかは知らないが……小規模ながら救世主扱いすらされ始めてる。大したもんだと思うよ俺は」

「あ、ありがとうございます……ますか？」

「だが、だからこそ聞きたい。何故君が、わざわざこんなことを続けるんだ」

ヤマトは、真剣そうな目つきで問いかけた。

どこか意味ありげな質問に、ユウは少し悩む。

「何故、とは……？」

「ただの……それもまだ期間的にはビギナーとも言える君が、こんな厄介事に首を突っ込み続ける必要はないはずだ。違うか？」

「それは……」

ユウは唸った。

確かに、自分じゃなくてもいいかもしれない。もつと強い誰かがいるなら、任せたっていい。

でも、ヒロの気持ちがある。他に傷ついた人もいる。誰も立ち上がらないなら、自分がやりたい。そう思う心はある。

もちろん、何もそう単純ではないし、うまくいかないことだって当然ある。

それでも、集団から狙われつつあることを思えば、もはや後戻りすら出来ないところに、ユウは既にいるのだ。

「……俺が、やらなきゃいけないことなんだ」

「ヒーロー気取りか？そんな切羽詰まった表情で」

「……!？」

そんなユウの言葉に対して、ヤマトが放った言葉は、嘲笑混じりの

酷く冷たいものであった。

「初対面なのに悪いとは思うが、今の君は抜けかけの子供の歯みたいにグラグラだ。いつ崩れ落ちるかもわからないし、勝手に全部背負って勝手に潰れる、そんな未来が見えるぞ」

「何を……言ってるんだよ!!!」

動きを止めていたことにしびれを切らしたユウが、アポロンを急加速させる。

消えかけていたビームサーベルは再び光を灯し、ガルルストライクの脚部めがけて飛び込む。

が、呆気なくその攻撃は躲かれてしまった。

相手の機動力が高すぎるのか、はたまた練度の違いか。

「誰かのために戦おうというのなら、それを悪く言うつもりはない。だが、その根底にある本当の気持ちを忘れてはいるようでは——!!!」

「ッ……!!!」

「——いけないんじゃないのか……? これはガンプラバトル……所詮はただの遊びに過ぎないはずだッ!! このままじゃ勝利の女神は、君に微笑むことはないぞ!!」

向かってても、向かってても、躲され弾かれ。

ヒロは、ユウがどんどんとヤケになっていることに気づいていた。

「落ち着けユウ、興奮しすぎるな!」

ヒロの声は、果たして届いたのだろうか。

「わかってる、わかってるさそんなこと……!! だからこそ、これから俺が全力で戦うためにも……不安材料は消しておきたい……自分のためにも、みんなのためにも……!!」

浮かんでいた太刀を回収し、振りかざす。

荒く、ブレた太刀筋。以前の戦いでついたヒビが軋む。

「だから勝たなきゃいけない……最後に笑うのは……俺なんだッ……!!」

「調子に乗るなア!!!」

初めてその刀身が相手に触れたと思ったその瞬間、  
「!!?」

ガルルストライクの簡単な肘打ちで、アポロンの刀は折れてしまった。

呆気にとられていると、打点の高い回し蹴りで、アポロンは吹き飛ばされる。

「ぐあああつ!!」

「そんな、ユウの刀が……!」

咄嗟にヒロが飛ばしてきたソードビットが重なり、推力を全開にして、無理矢理アポロンを受け止めた。

「今からでも笑っていられないヤツが、最後に笑えるものかつ!!!」

ヤマトの厳しい叱責。

ユウはハツとした。

「自分一人で重責を感じて、焦るくらいならやめてしまえばいい……これはゲーム……やめるのは簡単だし、誰にも文句を言う筋合いはない……だがツ!!!」

ビームサーベルを逆手持ちにしたガルルストライクが、回転をかけながらアポロンを襲う。

直撃の寸前、相手の手を腕で押さえ、なんとか軌道を逸らした。

ギリギリでビームの粒子が触れてしまったのか、アポロンのブレードアンテナが一本、宙を舞う。

「それでも自分が戦うべきと思うなら……その先を見据えて笑え……!」

「……!」

機体と機体の力比べ。腕力の攻防がアポロンを押ししていく。

「自分のために戦うなら笑え!誰かのために戦うならもつと笑え!!そうして自分を鼓舞してでも……自分の目指したものを見失うな」

見据えて笑え。

目指したものを見失うな。

哲学的でありながら、その言葉の本質を、ユウは直感的に感じた。

無理やりにも笑って、目の前の困難を打ち破れるなら、

先にあるものにも、目指しているものにも……  
手が、届くだろうか。

「……つけない」

「ユウ……？」

「俺はアポロンで……カッコつけたい」

ユウの、そもそもの行動原理。

それは至ってシンプルで、単純明快で、子供っぽくて。

でも、だからこそ……笑うことなら容易い。

「このアポロンガンダムを、大きな舞台でかつこよく魅せたい……強い相手に勝ちたい……ああ、そうだとも……ッ!!!」

アポロンの瞳が、光り輝く。

それと同時に、アポロン側が徐々に力を強めてきた。

「せめて普通に戦う時くらいは……笑ってやるさ……!!!」

操縦桿を握るユウの口角は、気がつければ上がっていた。

そんなユウの様子に、ヒロはどこか安心する。

「言つたら、気負うなって」

「兄ちゃん……？」

「お前はそうやって、全力で楽しんでいればいい。ずっと悩んでる必要はない。壁にブチ当たったときには……隣に俺がいるはずだ」

隣を見つめるユウ。

ヒロはそんなユウに、サムズアップをしてみせた。

「俺のやることは、これからも変わりませんよ」

「いいのか？ あんなヤツらと戦い続けることになっても」

ヤマトの言葉に、ユウは落ち着いた言葉で返す。

「……それすらも、糧にしたいんです」

力を強めてきたアポロンが、ついにガルルストライクを振り切った。

「糧にできる……はずなんだ……ッ!!」

と同時に、右膝からビームサーベルを発振し、飛び膝蹴り。

今度こそ攻撃は、ガルルストライクに命中した。

「ッ……!!なんだよ……随分余裕あるじゃないか」

アポロンの膝蹴りは、防御しようとしたガルルストライクの左腕を切り裂いていた。

「根っこに持つてるモンは単純でありながらも、立ちはだかる壁すら糧にして進みたい……そう思えるような人間なら、最初から余裕ぶつても良かったんじゃないのか」

「……？」

「素質あるってことだよ。食らってるんだぜ、ほら」

ガルルストライクが、わざとらしく左腕の切断面をアポロンに見せてくる。

ユウは、迷いさえしなければ強いのだ。

「ずっと思ってたんですけど……貴方の方は最初から随分と余裕ぶつてますよね」

「当たり前だ。自信があるからな」

「いいんですか？今、当てたんですよ。俺は」

ニヤついた表情のユウ。機嫌を取り戻したと同時に調子に乗っている。

「が、調子に乗ればこそだ。いくらでも調子に乗ればいい。ヒロはそう思っていた。」

ヒロは、ユウの強みを知っているのだ。

「ユウ、今度こそお前の戦いに持ち込んでやれ」

「兄ちゃん……」

「カッコつけるんだろ？」

ヒロは、ユウの肩にそつと手を置いた。

「……ああー！」

もちろん、諸々の問題が解決したわけではない。

それでも、自分がどうあるべきかという心持ちは、確かに見えた。今この場において、ユウの気持ちは晴れやかだ。

「持ち込んでやる……俺の領域に！」

アポロンは素手でガルルストライクに立ち向かう。

相手は当然こちらを警戒し、攻撃を仕掛けてきた。二連装のビームライフルの光弾が、立て続けにアポロンを襲う。だが、

「もうそれは……受けない!!」

華麗な身のこなしで、すべてを交わした。

直線で目の前に飛んできた攻撃は、ビームシールドを展開し相殺させる。

「今度は格闘で勝負ってね……!」

右拳を引き、構える。

ガルルストライクはアーマーシユナイダーを取り出した。

「……!!」

ほとんど衝突に近い形で、両者の攻撃は激突した。

「勘違いしないでくれ。一応言っておくが、今回は君に説教を垂れるつもりで戦ったんじゃない。君と戦いたかったから戦った、ただそれだけだ。俺が言ったことはすべて、俺個人の興味に過ぎない」  
ぶつきらぼうでもあるヤマトの喋り口だが、どこか楽し気でもあった。

「戦いたかった……光栄ですね、それは」

ビームシールドのビームが、アーマーシユナイダーを構える相手の右手に直撃。ナイフもろとも赤熱化していく。が、作り込みの凄さが故か、腕は破壊できそうにはない。

「期待しているぞ、君が目指す場所で、戦えることを……ッ!!」

我慢の限界、といったようにガルルストライクが蹴りを加えてくる。

反動が操縦桿に伝わる。が、アポロンもすぐさま構えていた右拳を相手に打ち込んだ。

瞬時に避けるガルルストライク。だが、

「足癖の悪いのは……こっちも同じでなア!」

アポロンが脚部スラストだけを全力で点火させ、ビームサーベルを発振させた脚部で斬りつける。

「そんな見え見えの攻撃……効かぬと言ったはずだ……!」

「ならッ!!」

躲された直後にかかとのブレードを展開し、同時に相手に掴みかか



りながら逆噴射。

「……ッ!？」

そのブレードは、ガルルストライクの左肩を傷つけた。しかし、ダメージは浅い。

距離を取ろうとするアポロンに、ガルルストライクは無理やり接近してくる。

相手が接近してくるなら――

「こつちからも仕掛ける……!!」

以前の戦いは、確実に活かされている。

ちようど目の前に、先程折られてしまった太刀の剣先があった。

それを無理やり掴んで、短剣として相手を切り裂こうと挑む。

一方の相手は、先程と同じように、うまい角度で力を加え、再び折ろうとした。

が、

「……硬い!？」

先程と打って変わって、簡単な肘打ちでは折れそうにないほど、強固。入ったヒビもびしやりと閉じきったままだ。

不可思議に思うも、とにかく相手ごと弾き返すガルルストライク。

結果的に距離を置くことになったアポロンは、その刀の一部分だったものを勢いよくガルルストライクに蹴飛ばした。

「そんなものを――」

「それが本命だなんて……誰が言った!!」

刀は適当に蹴ったのだ。相手に弾かれようと問題はない。

休む暇さえ与えず、アポロンは腰からハンドガンを取り出す。狙う

先は、折れた刀身。

そう、アポロンの刀にはビームコーティングの効果を持った塗料を塗布している。

「何……ッ!？」

撃ち出した数発が鏡面に反射し、軌道が変わる。そのままガルルストライクの頭部に命中。メインカメラを使えなくさせた。

インパルスガンダムがフリーダムガンダムとの決闘の際に用いた

テクニック。ユウは即興で、それを再現してみせたのだ。

「次……」

アポロンはソードビットを一度基部に回収させ、そのまま高速移動を開始する。

煽った上で逃げたのだから、当然ガルルストライクはアポロンを追いかける形になる。

「着いてきなー」

二機が共に移動していくと、徐々にステージ設定も更新されていく。

気がつけば何もない空間から、デブリ帯に突入していた。

「ハメラれた……か。いいのか？ここじゃ君だって動きづらいだろう」

「それはどうかな……」

ますます余裕ぶるユウ。

そんなアポロンを追いかけ、左腕を失ったままのガルルストライクは行く。

しかし、メインカメラに相当する部分が破壊されている以上、モニターによる一人称視点での操縦は不可能だ。ヤマトは肉眼でバトルフィールドを覗き込んでいた。

隙間を縫うようにしながら機動するも、アポロンの動きはブレなかった。バインダーの繊細な姿勢制御も相まってのことだろう。

「そろそろこれで……ッー」

再度、ソードビットを展開。しかしながら今度は、コード付きでの射出だ。

「任せろ、ユウ」

小型の操縦桿を握るヒロが、ユウに合図を送る。

それを見たユウは、従うように行動を開始した。

「ちよこまかと……随分すばしっこいヤツだな君は……だが、速さだけなら——」

「誰が……」

ガルルストライクの上を取っていたアポロンが、真上から襲いかか

る。

「速さだけだって……ッ!?!」

ユウとヒロが、交互に言葉を続けた。タイミングはバツチリだ。死角を確保していたのはアポロン本体だけではない。

ガルルストライクの背後にも、2基のソードビットは近づいていた。

ビームサーベルを突き刺しにかかるアポロン。

しかし、すばしっこいのは果たしてどちらか、ガルルストライクも素早く上面にシールドを構え、応戦。

だがソードビットにまでは対応できなかったのか、コードごと巻き込んだぐるぐる巻きに、ガルルストライクは巻き込まれた。

「何イ……!?!」

「ツツ……!?!おらアツ!!!」

アポロンはそのまま大きく相手を振り回し、比較的大きなデブリに向かって放り投げた。

ぶつかり、砕け、塵が舞う。

「おおこれは……マズいな」

焦りを覚えるヤマト。しかしながら当然、彼の表情が曇ることはなかった。

「だが……燃えるじゃないか……!!」

すぐさま立ち上がり、アポロンの元へ。

モニター越しでは操縦できないはずなのに、異常なまでのマニユール。

ヒロは推力源に目をつけた。

「ストライカーパックだ」

「な、何……?」

「相手が装着しているストライカーパック……あれが圧倒的な加速力を生む要因さ。おそらく、E・I・W・S・P.のそれを大きく上回るほどのチューンをしているんだろう」

相手の足を押さえるには、まずはここから。

ヒロはそう伝えると、ソードビットの機動を再開させた。

どこまでもガルルストライクを追尾するソードビット。  
そして、またその相手を追い詰めるアポロン。

再度距離を詰め、近接戦へ。

「ッ……い・本当に猛獣みたいだ、どこまでもどこまでもこっちに向かってくるな」

「こちらの台詞だ、そつくりそのままお返ししてやる……ッ!!」

蹴りと蹴り。

拳と拳。

最初のバトルのときには恐怖で仕方なかった、細かな破損も塗装の剥がれも、今ではどうでもいい。

ただ、相手に攻撃をしかけ、受け止めたい。

強めに足の裏を敵に押し付けると、ガルルストライクはバランスを崩す。

「今だ!! 兄ちゃんツ!!」

「言われなくとも……!!」

合図と共に、直ちに飛び込んでくるソードビット。今度はそのコードをガルルストライクのバックパックに巻き付ける。

「巻き取れツ!!」

「そつちも引いてて……!!」

アポロン側が、コードを引き戻そうとする。

ソードビットも推力を強め、力を加える。

よって、ストライカーパックの接続基部に巻きつけられたコードが、徐々に軋み始め……

「やりやがったな……ッ!」

半ば強引に、接続を引き剥がした。

もちろん、破壊という形で。

「これで……素早くは動けまいッ!!」

武装も十分に使えないはずだ。視認性と機動力さえ落としてしまえば――

「油断したな、ウチヤマ・ユウ!!」

「な……ッ!!?」

なんと、切り離したストライカーパックの主翼兼スラスターユニットが、またさらに分離する。

意思を持つかのごとく機動し、それがガルルストライクの手元にやってくる……

「まさか!!」

「大剣……!?!」

「悪いが……貫つたぞ!!!」

ストライカーパックの主翼だったものは、巨大な剣と化した。

あ然としたままのアポロンに、それは襲いかかる。

気がついたときには、相手はこちらへ向かって振りかぶっていた。

避けなければ。そう考えるも、信じられないスピードで刃先がこちらへ向かってくるのだ。

スラスターユニットを兼ねた部分から大量の推力を放出。その加  
速力で相手の意表を突き、

「!!!」

高められた切断力で、対象を破壊する。

それがこの武装、スラストエッジであった。

「Battle Ended

Winner

Yamator's Mobile Suit

Metal

Garuru Strike Gundam」

ガンプラバトルで、負けた。

これまでユウは、数々のピンチとも戦ってきた。

戸惑いながら、恐怖しながら挑んだ初めての戦いも。

目の前に現れた、怪しい力を持つ集団との戦いも。

その全てを、勝利という形で収めてきた彼だからこそ。

ここに来ての初めての敗北は、強く、胸を刺した。

ホログラムが消え、改めてアポロンの様子を見る。

これほどまでにしっかりと、胴体から真つ二つにされたアポロンを見るのは、初めてだった。

何より、機体の状態としては確実に相手の方が不利だったはずだ。それでいて勝てなかったのは、明らかに熟練度の差が要因だろう。向こうから、ヤマトが歩いて近づいてくる。

「……」

『完勝』できなかったのは、久々だったよ。本当に楽しかった」

「……！」

しかし、彼ほどの相手をここまで痛めつけられる者は、そうそういないらしい。

ユウは、僅かに誇らしげになった。

「またいつか会おう。黄昏の太陽神」

「え……」

聞き馴染みのない言葉達。思わずユウは聞き返した。

「黄昏時って、大体夕暮れを指すんだ。薄暗いながらもどこか、景色は赤みがかかっていて。まだ荒削りだが、ぼんやりと輝く……」今の君にぴったりだろう」

「……！」

ヤマトは、ユウ達に背を向けながら、こう続ける。

「夕暮れはつまり、日の出を控えた状態でもあるだろう？君達にはそれが見えたんだ、確かにな。……じゃあな」

そう言葉を残してから、こちらを振り返らず手を振るヤマト。ユウとヒロは、そんな彼の背中を、ただじっと見つめていた。

店を出てからの帰り道。ユウとヒロは二人きりだった。

ヒロは、ユウを気遣うように見つめる。

「……ユウ、その——」

「んああああ——————————ッッッッ!!!」

「!?」

が、そこから出た言葉をもかき消すかのように、ユウは突如大声で叫んだ。

「本ツツツツツ当に!!!悔しい!!!」

ユウはまつすぐに、そう付け加える。

その一言に全てが詰まっていた。

「でも、いやだからこそ……次は絶対に勝ちたい……!」

今一度、ユウを見つめてみるヒロ。

「……俺やつぱり、ガンプラバトルが好きで仕方ないよ」

その表情は、驚くほど晴れやかで……かつ、情熱に燃えていた。清々しいほどの笑顔だった。

日の出まで、果たしてあとのくらいだろうか。

そう遠くなさそうさ。

ヒロは自然と、そう思えた。

「よし、アポロンの修理、俺も手伝うよ」

「ほ、ほんとに!?それじゃあ兄ちゃんは何してくれるの?」

「いや、わからん」

「ちよつとオ!!」

「そうだな……塗装くらいか?」

「スプレー塗装やったことあるの?」

「ほとんどないが」

「そういえばそうだったな……」

「本当に凄いなあ……あの二人は」

一人、店の筐体ブースに佇んでいたエイジが、ぼそつと呟く。

「やつぱり、君達はボクの憧れだよ」

にこやかな表情のエイジ、しかしながら、

「……追いついてみせるさ、すぐにね」

彼の瞳もまた、情熱に燃えていたのだった。

「ツ……!!何なんだよコイツ!!」  
「勝てるわけねえっての……!!!」

「Battle Ended

Winner

Toror's Mobile Suit  
Gundam F  
ete」

「……」

僕は昔からそうだった。

「ただい——」

「凄いじゃないか!!やったなあ!」

「ジュニアピアノコンクール最優秀賞、アオヌキ・ケイゴ!お母さん誇らしいわ」

「やっぱりお前は才能の子だよ……!」

「えへへ、ありがとうお父さん、お母さん」

「……」

僕には、胸を張れるものなんてなかった。

「……ん?ああ、シヨウか」

「あ……た、ただいま」

「また遊んでいたのか?」

「……うん、そうだよ父さん」

「お夕飯、冷めちやっただから温め直すわね」

「あ、ああいいよ母さん、あとで一人で食べるから。今ちよつと気分が優れないんだ」



特技は多くなく、好きなことで、誰かに認めてもらえることもなかった。

……食卓に座ってこちらを見ている、アイツとは大違いだった。

普段から、孤立している自覚はあった。事あるごとに自分の部屋へ逃げ込むから、当然といえば当然だ。

でもそれ自体は、苦痛ではなかった。

趣味という趣味が、ずっとなかった。

でもいつからか、ガンプラを作るようになっていた。

今でも一番の趣味だ。

自分の中にあつた、純粹で単純な「好き」の気持ち。

そこから、愛機も生まれた。

ガンプラバトルを始めたのは、ただの興味だけではなかった。

僕の目に映る世界が、どうか変わってくれないだろうか。

強くあれば、周りも僕を認めてくれるんじゃないのか。

そんな希望を望んで、筐体のグリップを握るようになっていた。

「……僕は誰かに認めてもらうために、お前を作ったのか……？  
フエーテ」

時々、ふと冷静になることがある。

それでも机の上に飾られたソレは、当然何も答えてくれなかった。

薄暗い部屋の片隅にて、ベッドに横たわる。

そのまま、誰かに目覚めさせられることもなく、ゆっくりと目を閉じた。

黒い小箱を、握りしめたまま。